

文明四年二月三十日

〔愚句〕

將軍記附錄百十九義政 三十日、連歌し侍しに、

月のこる千里は春の夜はあけて
さ足路のするにいつるはりふを

三月 小盡 戌

二日、己亥、連歌御會、義政之ニ陪ス、

〔愚句〕

將軍記附錄百十九義政 三月二日、内裏にて、かき火あまるとす茶をふか

りゆ絲と侍るふ、

のとのふ影かき地こは行はる小舟

めくみはつすもきぬかしこさ

ふ湯雨草木もまじは色つきて

三日、御はつつたさひくまいりしついでみ、三千とせにさ火も、花の

はつりゆれと仰られしよ、

いそそ湯めくき金ふははつつ愛

松うげは落葉のちりやはもるらん

木はるあらそも湯あきの月

うらも野分はをとたうたくれ

たまされの旧はみ人々奪得のみえぬ

水乃足堂りもそ湯ふろ愛色

竹河比布ち瀬もみえはかむむ日よ

文明四年三月二日

文明四年三月三日

五五六

かほ、きや移くら此方、いそくらん
あふせまゆのまうたれそと
きふはあく移も老のうくひを
うりらん六十と地ふし宮中
をむいぬなう此あうじあゆさず
浦かえのよ跡ともえは月影

○三日連歌御會、便宜ニ依リ合致ス、

三日、庚子上杉房定、毛利重廣ヲシテ同族朝廣遺領ノ檢斷職ヲ管掌セシム、

〔毛利安田文書〕伊佐早謙氏所藏

朝廣跡所々大犯三ヶ條之檢斷職事、任大法、可被致成敗之由被仰出候恐々
謹言、

千坂定高

文明四
三月三日

毛利越中守殿

(千坂)
對馬守定高(花押)

○朝廣ヲ重廣ノ同族ト認メテ掲書ス、又房定、重廣ノ同族毛利宮内少
輔ヲ撃チシヲ賞シ、地ヲ與ヘシコト、三年十二月二十七日ノ條ニ見エ
タリ、

右點一條
兼長飛鳥
左點飛鳥
井雅親

五日、壬寅五首通題ノ和歌ヲ詠シ給フ、甘露寺親長等モ亦詠進ス、

〔親長卿記〕三

三月二日、晴、五首和歌來五日可詠進、可被召點之由有仰、右

(飛鳥井)
兵衛督雅康奉、

四月四日、晴、去月二日五首和歌近日被取重云々、予愚詠去月進上了、

〔紅塵灰集〕

行路柳、五首通題、右點、太閤、兼、左、飛鳥、井、

春うせになひく柳あはは塵をふれしちまはは煙とりのま
道の邊り柳のいと比たて劣まよゆまうふ人うおるとえはる

春夕月

さら劣まよ夕ほうを愛月うけ此夜を待不とをうすまをもうか

深山茶

吉野山な火あらちをもをゆまかけて花よまおくの花を問うか

寄煙戀

雲比上は衛士のさく火乃煙さへおよハ劣中にこゝをまひつゝ

寄舟戀

あふ事ハかゝ、此浦まこく舟比かひぬき世まううたしつとぬる

六日、癸卯前大僧正覺杲寂ス、

文明四年三月五日六日

五五七

文明四年三月十一日

五五八

〔仁和寺諸院家記〕 菩提院

前大僧正覺杲、號内大臣□□中院内大臣顯成公息、南(二カ)長者文明四年三月六日入滅、

尊勝院

覺杲僧正菩提院、自性院、大鳳寺、同院管領、

〔東寺長者補任〕 五 應永廿九年

僧正覺杲菩提院○三長者、應永三十年ニ長者ト爲リ、同卅一年ニ至ル、

十一日、成義政百韻連歌會ヲ行フ、

〔愚句〕

○後鑑百十九義政將軍記附錄九所收 三月十一日百韻連歌、一字露顯う世うせお

もひくらししてをむいそよ、

あらしと、布深山を此の寺

はふ此狩場や又かへりこん

日け此こは鳥立もみえをふる雪よ

こもりある人ハ戸口よす、足きて

そゆ瀬の寺の月やまゆらん

をかまを手折日くれちううた

一字露顯

花よ林し葛城山はあひそて、

きりやえ波邊に鷹のあくこそ

穂よいつる田此ものいさを雨ふりて

あそ見うおくや鹿の子布山

たえく、にさつ男此ともじ影みえそ

ひくや舟子のこそるかすめ

志ら雲此八重此を不ちのあま此うへ

霧日と此矢田野の末や志く影らん

布此まふうせ此をそ有乳山

おもふはら、袖を干かそ愛

露此身の消ぬへきそり忍回日ひ

まち得てふとり月ハ見まふし

きへくまむ山乃住家此あまのくれ

か回ろ此うこそ玉藻のあま

そかりあきなまをさてもい、をむ

をるふまの文字ハ心此うちあれや

とひみしかよふせきは筑紫路

文明四年三月十一日

五五九

十四日

文明四年三月十一日

五六〇

十四日、人々酒のミ侍し時、月をミて連歌し侍し、深山路やミくは毛と
 我きあさかを足、
 春とて、春り船旅の布添さす
 礎うゆをともしむらた月此もと
 不じ乃まゑる春添かりハいくつら
 むらゝに刃萩うつろひ菊さだて
 遊りそたさう袖のむらはき
 十六日、藤のあるかゝよて連歌し侍し、吹まよふ風よきぬとやきこ盛
 らん
 うち林ぬゆめうむをひはとめ窓
 志ハしををらふあふさう此關
 たちあらふ杉乃こ此まの花はより
 筆をろうか添水くたのあと
 手習うまゝう此文字も書よせて
 いまはあまの袖もをぬる
 をしうかく野へ此おそれ露みえき
 かさあ添山登こえてく添しき

十六日

雪日く新木曾の御坂此とひころも

いつくともあらぬまゝらの一さけひ
 能ゆるやとをきむさゝひのこる
 ふりぬる宮り春去ゆか
 かつた日了はそめ驚をせつれて
 やか愛ふまゝ添梅は四ふかり
 希く風乃はう添ハかひく糸さくら
 ちり此うた身そありう志られぬ
 ふもとあるい四を深山よを見くへて
 すゝれをま拿は月ういりく添
 法遣くせあうめくらせる秋の日ふ
 かよ添ハはそくま不此あさみち
 舟さそ添あゝ乃いとあくこつれまひ
 月うとくさをう添ハ足く夜
 露結とほ足くあ添のゝ山あろく
 廿四日、和漢聯句は、彈琴消永日、
 かく添もあ拿したまのうくひは

二十四日
和漢聯句

文明四年三月十一日

五六一

文明四年三月十二日 十四日

酒促千秋興

と記え此色多ふひく竹の葉

官租勝勸農

田うへはハ畔をゆつま跡此と記す

きけそと、り此をのそ我あく蛙

はまむめうえり鳥やをむらん

足うは乃水りきよくあおら

をむ月此うをも雲井よくもりあ

○十四日、十六日、二十四日連歌會、便宜ニ依リ合致ス、

十二日、己酉、細川勝久。僧寶英ヲシテ、伊豫保國寺住職及ビ同寺領ヲ安堵セシム、

〔保國寺文書〕豫○伊

伊豫國新居郡西條庄保國寺領并住持職等事、任先例可被領掌之狀如件、

文明四年三月十二日

(細川勝久)
兵部大輔(花押)

寶英藏主禪師

十四日、辛亥、赤松政則、備前金山寺等ニ、五年間ノ諸役ヲ免ズ、

浦上基景

〔金山寺文書〕

○一備前地頭家證文

五ヶ寺事、任去三月十四日御奉書之旨、五ヶ年中諸役御免許之段令存知訖、仍狀如件、

文明四

十月三日

金山寺

(浦上)
基景(花押)

(端書)
上 浦上六郎兵衛殿御書案

十六日、癸丑、義政。伊勢國司北畠政郷ノ兵ヲ徵ス、是日、其將石内某、山城木津ニ至ル、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十 九 三月十六日

一、伊勢國(北畠政郷)司勢木津ニ着云々、公方御下知故也、一族石内中將云々、大將歟、

〔大乘院寺社雜事記〕

五十 四月十二日

一、伊勢國司舍弟東門院入室事、自學侶相支子細在之、比興言悟道(語)斷次第也、無故實中々沙汰外至也、然而近日岩内在陣之間、依計略無爲無相違、近日學侶申之云々、伊勢與當殿事云々、

文明四年三月十六日

文明四年三月十八日

五六四

軍勢番替

十五日、一、伊勢軍勢、今日番替罷上畢、

十八日、乙、興福寺大法師良宣ヲ法橋ニ敍ス、

〔大乘院寺社雜事記〕 五十 四月十二日

僧綱

一、上北面良宣有舜僧綱事申入之、自去年被申殿下之間、今日口宣到來、

(庭田雅行)
上卿源中納言

文明四年三月十八日

宣旨

大法師良宣

宜敍法橋

藏人右中辨藤原兼顯奉

十三日

一、良宣口宣并衣一給之、畏入云々、

十九日

一、有舜法橋去七日より一向伏病不便、跡事孫六歳子申置云々、此分事不可有子細之由仰了、

良宣疾重

去年分

二十三日、庚、義政。畠山政長ノ請ニヨリ、北小路第三臨ム、

〔宗賢卿記〕 乙 三月廿三日、畠山尾張守借用北御所日野氏ノ生母苗子居所北小路室町西

願ニアリ、申、室町殿渡御云々、

二十七日、甲、延曆寺六月會ヲ追修ス、

〔親長卿記〕 三 二月廿五日、晴、今日廣橋大納言示云、六月會去年分事、近日

可始行、參向弁事申請之政顯左少辨(廣橋)爲其役歟、在國之間及闕如、元長申任弁官、可參

行之由可申云々、有予返答云□□之間早速之儀過分也、但可然之樣可被計申沙汰、若

被任弁官者拜賀大儀爲同事、可被補侍中之由申之、尤可然之由命之、ハ二月上

ニ二十七日ノ條

卅日、晴、朝間廣橋大納言綱光來、侍中蘭臺事賀之、次閑談、六月會參向事條々

談之、供給事堅問答座主云々、自予許同可申云々、侍中更今日可下知之、午刻

許無量院僧都來、六月會講師宣下、更申之了、勅使事供給之儀堅被仰出了、座

主被加下知者可申右左云々、無日數之間早々可申返事之由仰了、

三月四日、晴、招行遷威儀師、談六月會事、在別記○別記所見ナシ、以下同シ、

七日、晴、詣座主許、申談六月會事、在別今日歸宅了、

行遷威儀師

講師宣下

文明四年三月二十三日、二十七日

五六五

甘露寺親
山長元登

文明四年三月二十七日

五六六

廿七日晴登山去々年寅歲六月會始行也右少辨元長參向之故也在別

廿八日晴講師來

四月四日晴今日下山

手輿ニテ
登山

六日晴今日令用登山輿廣橋大納言輿也今日返遣了預置岩藏申實相也抑今度用手輿了先々京中用四方輿於河原撤蓋爰予勸修寺大納言廣橋大納言等相談云先々用四方輿雖然當時構爲洛外其上撤蓋預置河原在家了當時是又不可叶自京中可用手輿之條如何返答當時之儀任本儀雖可用四方輿就便宜可爲手輿之條可有何子細乎任兩卿意見用手輿了參内番也自十二日爲當番依登山申暇了仍自今日祇候參御前山上事種々有御尋入夜甚雨下

〔宗賢卿記〕

乙 三月廿七日山門六月會去年分勅使藏人右少辨元長今日登山云々

〔重胤記〕

○歷代殘闕日 三月廿七日晴

一今日山門大會ニ甘露寺殿弁御參向也

○元長右少辨ト爲ルコト二月二十七日ノ條ニ見エタリ

四月大朔盡

二日長義政一條實久ヲシテ播磨弘山莊領家職ヲ安堵セシム

〔古簡雜纂〕

六

播磨國弘山莊領家職事如元領知不可有相違狀如件

文明四年四月二日

(義政)
(花押)

一條中納言殿

〔親長卿記〕

三 四月廿一日晴一條中納言實久申安堵勅裁事(勅書)同可書遣云

々略○中何様可仰元長之由返答了

廣橋大納言申一條中納言實久申安堵繪旨事可書遣云々仰元長遣了播磨弘山莊

三日巳興福寺ニ勅シテ幕府ノ旨ニ任セ同寺領山城山田莊地下人等ノ

押妨ヲ停メシメラル

〔經覺私要鈔〕八十 五月十二日戊申齋

一自雜掌袖留木方被成繪旨トテ被進之

廣橋大納言申山城國山田莊號當尾事地下人等押領云々頗招罪科者

文明四年四月二日 三日

五六七

實久安堵
繪旨ヲ
請フ

繪旨

文明四年四月七日

五六八

歎太以不可然任武家御下知旨可致其沙汰之由可令下知給旨天氣所候也仍言上如件元長誠恐謹言

文明四年四月三日

(甘露寺)
右少辨元長奉

進上興福寺別當僧正殿政所

御請案文

廣橋大納言申山城國山田庄號當尾事地下人等押領云々頗招罪科歎太以不可然任武家御下知可致其沙汰之由可令下知給旨謹奉了可加下知滿寺之由可令奏聞給之狀如件

五月十二日

前大僧正經覺 請文

右少辨殿

〔親長卿記〕

三 四月廿一日晴廣橋大納言申山城國山田庄事地下人及違

亂之間武家被成下知可申請勅裁云々仰不可有子細云々廣云(橋勝カ)仰元長可書進之由申之予相代書遣之云々

七日西、癸御內鞠アリ後數之ヲ行ハセラル

〔親長卿記〕

三 四月七日晴有御內鞠予源中納言(庭田雅行)滋野井(教國)右兵衛督等也

無名門前
ニ行フ

八日晴有御內鞠予之外無人就鞠事種々有御尋事申所存之旨了

十日晴有御內鞠予源中納言外無人

廿六日晴及晚細雨下於無名門前有鞠

廿七日晴及晚於無名門前有鞠予先伺天氣今日後花園院御忌日也可蹴鞠之條如何仰云鞠之事ハ不可苦云々

八日甲、戌權大僧都救舜ヲ授戒和上下爲ス

〔親長卿記〕

三 (通秀) 四月八日晴自座主僧正許戒和上宣下事申之仰元長令書之(尊應)下中院大納言了

〔重胤記〕

○歷代殘闕日 十一月二日
記七十八所收

應以法印權大僧都救舜爲授戒和上事

右少辨藤原朝臣元長傳宣大納言源朝臣通秀宣奉勅依請者寺宜承知任□

□行之

文明四年四月八日

大史(小カ)卜槻元晴

料紙剛紙禮紙一枚在之

九日乙、亥幕府鞠始

文明四年四月八日九日

五六九

文明四年四月九日

五七〇

〔親長卿記〕

三

四月九日晴室町殿御鞠始也、自去月相觸、近年予不參、又應

召如何之、

先是詣右兵衛督飛鳥井雅康陣所、人々同有一盞、次尅限西尅參鞠場、西面御開屏中門、右兵衛督命杉原先賀茂榮久縣主持參御鞠、置庭中退入、次參仕人々、

幕府西面
ノ庭ニ行
フ
參仕ノ人

新大納言勸修寺教秀、廣橋大納言綱光、予源中納言庭田雅行、滋野井前宰相中將、教國、

藤宰相高倉永繼、右兵衛督、新藤宰相武者小路種光廣橋兼顯薄以量等、

武家輩、畠山尾張守、同宮内大輔、

賀茂輩、棟久、榮久、貞久、遠平、在久等縣主也、

公卿小文疊、殿上人圓座也、東上北面賀茂輩副西屏、南上東面也、武家輩圓座、

副北屋垣、東上南面也、

爰前内府下簀子、着北座、見證、次人々着了、室町殿自車寄妻戶出御、人々進寄

樹下給、次新大納言廣橋綱光廣亞相、予源中、滋藤宰武衛等進立、各蹴鞠之後、少々立替

了、暫室町殿令歸入給、人々猶蹴之、暫又出御令立樹下給、予可立之由、武衛命

之、立西下南之處、可立御向縮之由命之、頻辭退、重命之間立寄了、次藤宰相、滋

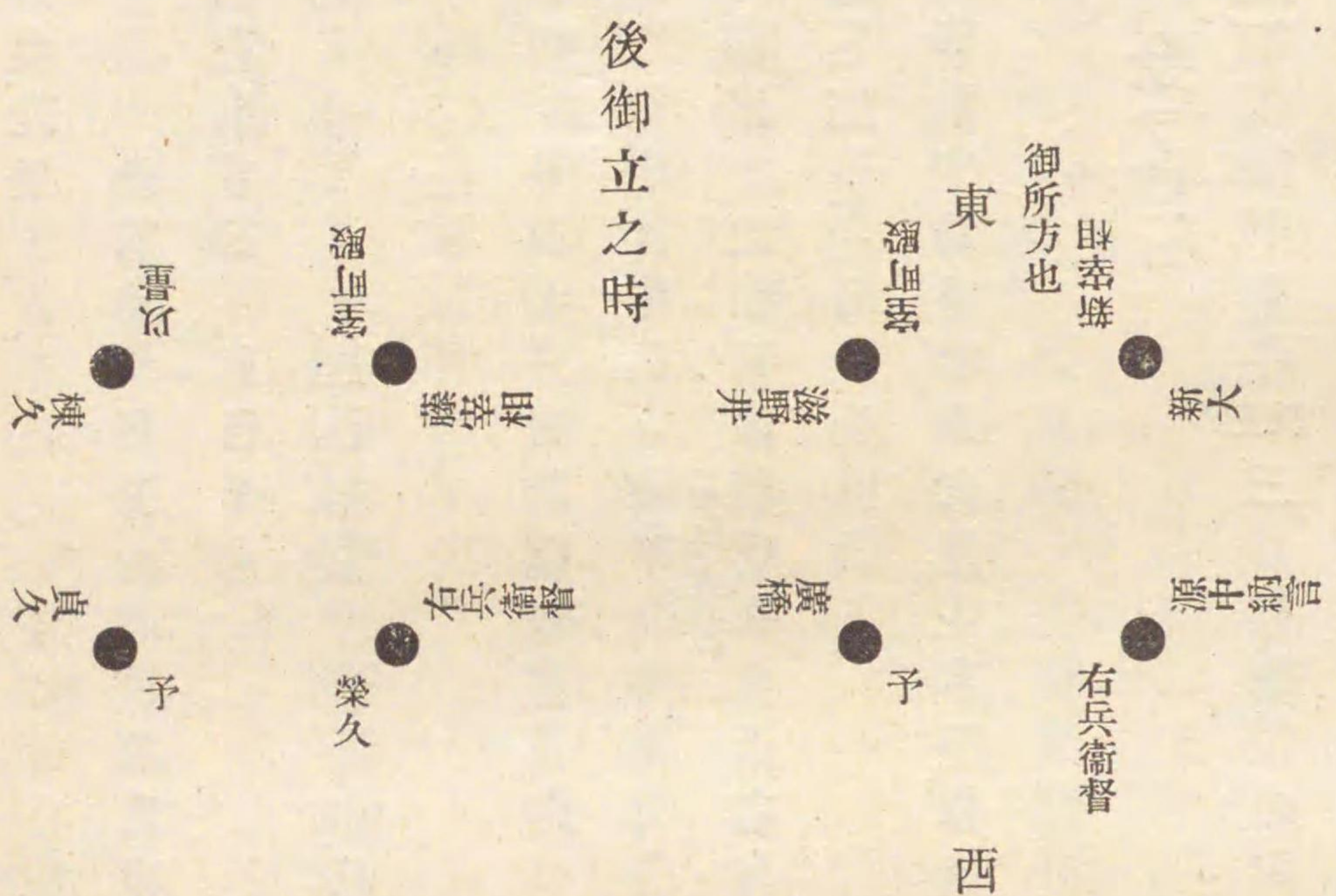
野井、右兵衛督、棟久、貞久等也、不立替蹴之事了、進上御太刀、有御對面、初參人

日野勝光
見證ス

義政樹下
ニ立ツ

二腰進之、

初度御立



文明四年四月九日

五七一

義政親長ノ妙技ヲ感ズ

文明四年四月十一日 十三日

五七二

人々無殊異失珍重々々、

十一日晴、廣橋大納言參會、命云、一昨夜於武家有御酒、室町殿仰云、予鞠神妙之由、室町殿有御感云々、面目至也、

十一日、丑幕府ニ勅シテ、畠山政長ノ部下神保某ノ、鴨社領攝津倉垣莊ヲ違亂スルヲ停メシム、

〔親長卿記〕三 四月十一日晴、鴨祠官氏人等列參、(攝津豐能郡)倉垣庄神保違亂事、捧申

狀奏聞、仰云、可被申武家云々、被下女房奉書、仰廣橋大納言、即申入武家、堅可申付之由、可仰畠山之由、可申伊勢守之由有仰云々、(伊勢貞宗)

十六日晴、倉垣庄渡、今日沙汰進云々、

廿三日晴、鴨社禰宜祐香卿來、倉垣庄事、堅依被仰付、去十六日進渡狀了、畏入之由申之、

十三日、己卯、稻荷祭ヲ停ム、

〔東寺私用集〕三 文明四年辰三月無御出之、四月十三日祭禮無之、御供御札

〔東寺長者補任〕五 文明四年辰寺務無之、稻荷祭無之、

倉垣莊鴨社ニ歸ス

山城西林院定珍ヲ法印ニ敍ス、
〔親長卿記〕三 四月十三日晴、(西林院)定珍僧都申、法印事、奏聞、勅許、仰元長令書口宣案、令遣西林院了、

〔參考〕

〔山城名勝志〕十二 愛宕郡 西林院 舊跡隣勝林院、惠心僧都彫刻彌陀像被安置云々、今荒廢

十五日、辛巳、月蝕、

〔大乘院寺社雜事記〕十五 四月十五日、月蝕、

〔經覺私要鈔〕一八十 四月十五日辛巳、霽

一、今夜蝕也、皆蝕了、如闇夜、御祈禱師誰人哉、

〔本朝統曆〕戊 壬辰文明四年

乙巳 四大朔丁卯、未五 十五望、亥五 月蝕皆既、戊子 四、巳六 十六日、壬午、鴨社御蔭山祭、

〔親長卿記〕三 四月十三日晴、自鴨禰宜三位祐香卿許有使、來十六日御蔭

山之時、渡和琴之處、去々年燒失之時、(紛)粉失了、(累代)物云々、仍去年借渡賀茂社之處、

文明四年四月十五日 十六日

五七三

皆既

和琴貸附

同返上

續歌

文明四年四月十八日 十九日

五七四

當年不叶、公方御物有御寄進之様、可申沙汰云々、予云、御物、不多、御寄進事如何、當日事爲神事之間、可申出之由返答、奏聞之處、可被借下云々、
十六日、晴、今日御蔭山無爲云々、
十七日、晴、和琴自鴨社返上、御經文五合持參、

和歌御會、義政之ニ陪ス、

〔親長卿記〕 三

四月十六日、晴、室町殿有御參内、女中同、有御續歌、有披講、讀

師前内府、勝光、講師俊量朝臣、續様有不、講頌廣橋大納言、予、右衛門督、(四辻季春)、左衛門督、滋野井前宰相中將、右兵衛督等也、事了及大飲、

十八日、甲申、日吉祭ヲ停ム、

〔續史愚抄〕

卅九 後土御門院上

四月十八日、甲申、日吉祭無沙汰、親長卿記

十九日、乙酉、賀茂祭ヲ停ム、

〔續史愚抄〕

卅九 後土御門院上

四月十九日、乙酉、賀茂祭無沙汰、但自今年被懸

葵桂於御殿、親長卿記、同追

〔親長卿記〕

卅一 傳奏奉書案

葵木枝事、如此被仰出候、可被尋遣之由、按察殿所候也、(仰脫)恐々謹言、

葵木枝

(文明四年) 三月廿二日

賀茂神主殿

親繼判

葵桂ヲ懸

自當年可被懸葵桂候、先令進上候輩、貞久縣主、已進上候、各可進上之由、可被相觸之由、按察殿所候也、(仰脫)恐々謹言、

(文明四年) 四月十九日

賀茂神主殿

親繼判

百韻連歌御會、義政之ニ陪ス、

〔親長卿記〕 三

四月十九日、晴、有御參内、女房一献申沙汰也、有御連歌、百韻

執筆右衛門督 季春、

室町殿

あけろふや□の露乃玉をされ

〔愚句〕

○後鑑百十九義政 將軍記附錄九所收 四月十九日、内裏百韻御連歌侍、分まよふ

野へのすゝね此打さひき、
さひとりの人のりてのつぎをば

うちかきむまゝ此海へ乃朝不らき

文明四年四月十九日

五七五

文明四年四月十九日

のこれる雪乃足也影と就や可
 此こそふ法やいまもたえをぬ
 をくはま此節會とる雲のうる
 輪のまゝとふ影秋此月々け
 足うきせし比まと地う浅茅原
 さぬく此虫の糸あらく野へ成て
 くは目すすや我きくやむるを路
 花あらてとつきもあらぬ三吉野や
 よいのうれをむかくれ家此えは
 波あらしき浜へ此小舟こたへり
 あふそいり江うきむあゝの子
 水てあ我いけまの魚此つあうきて
 こ四りと地とほよとの川きく
 うくひほのまう此とらうはあく
 むら鳥此竹ま糸くらをあらうひま
 まややお不井の秋乃川あ足
 かりさほ水ふさひ結あひまりて

五七六

み一人のまゆ此あとりあのそれぬ
 後の世にもるほくりをくつ足
 林よ金ふとゆる道此あそはら
 はきとちていさほれ起せんかり枕
 何とさきほこそとちあははあけ
 ふま地の月よおほえは夜ハ深ま
 扇をばうと足あうらもをくころま
 あこりやおもふをほ乃日くれち
 雪此ふほ日うそれますくあき
 春風うこそる此花此のたくもり
 ほくくと思はまひぬる身此行衛
 うまゆ杖登たのむらひああ
 手をさゆと細うちやをむ老のさう
 あたよほ鳩此まこあ夕くれ
 おむとて半此月やま糸くらん
 なひくれそれまましあ萩の葉

二十一日、丁幕府ヲシテ、春日社領和泉深井莊代官ノ違亂ヲ停メシム、

文明四年四月二十一日

五七七

文明四年四月二十二日 二十三日

五七八

〔親長卿記〕

三

四月廿一日晴廣橋大納言申(和泉北郡)深井庄事則代官違亂之由自

春日社注進可被申武家云々仰云早可申

二十二日子義政細川勝元ノ新第ニ移ル

〔宗賢卿記〕

乙

四月廿二日室町殿渡御新御所若公御讀書可爲六月之由

有沙汰云々

○勝元ノ新第ヲ義政ニ進メシコト三年八月三日義政勝元ノ新第ニ移ル條ニ見エタリ

二十三日丑鴨社禰宜祐樹叔父祐野ト因幡ノ領地ヲ爭ヒ祐野夫妻ヲ害シテ自殺ス

〔親長卿記〕

三

四月廿三日晴鴨社禰宜祐香卿來○中略倉垣莊ノコトニ

リメタ祐樹進退事尋之於因幡國知行分依口論々々等致害祐樹又自害云々廿八日晴祐樹縣主遺跡事尋遣一社也

〔親長卿記〕

卅一

傳奏奉書案

就祐樹縣主叔父祐野并伯母等殺害事其身已令自殺之上者雖爲犯科人之(仰殿方)跡可被殘歟可被斷絕歟社例一同可被注進之由被仰之旨按察殿御奉行所

義尚讀書始ヲ行ハントス

候也恐々謹言

文明四年四月廿七日

親繼判

鴨禰宜三位殿

先度祐樹縣主遺跡事被尋仰之處于今不被申是非候何様候哉早々可被申一同御返事候兼又中務大輔事口宣案被進候由申旨候恐々謹言

五月七日

親繼判

鴨禰宜三位殿

〔河合神職鴨縣主系圖〕

祐香禰宜從三位民部大輔

享德四年四月十七日正四位下文明三年五月之比前官

祐樹禰宜宮内大輔

文明三年五月之比前官○祐野ノ系所見ナシ

祐宣

文明三年五月新權禰宜○略下

文明四年四月二十三日

五七九

文明四年四月二十三日

五八〇

祐康福宜右大夫

享德二年五月十六日從五位下、

祐忠

大永三年十一月廿八日從四位下、

祐平

文龜二年四月四日從四位上、

祐光

大永四年十二月廿八日正五位下、
享祿四年五月三日從四位下、
天文二年四月廿一日從四位上、

〔鴨氏世譜〕

鴨縣主祐樹

永亨七 十二月稱貴布禰祝、

八 十一月稱貴布禰禰宜、

長祿二 正月日記曰、比良木權禰禰宜祐樹、

○是ヨリ先賀茂社氏人事ヲ以テ社務祐樹ト争ヒシコト、二年九月十日ノ條ニ見エタリ、祐樹自殺ノ月日ヲ詳ニセズ、姑ク本文ニ據リテ

此ニ掲グ、

二十四日、庚寅大内氏ノ兵、東軍ヲ攝津天王寺ニ攻ム、東將寺町三郎左衛門尉等奮戦シテ之ヲ却ク、

〔經覺私要鈔〕

一八十 四月廿四日庚寅霧曇入夜眞實儀計小雨

一、大内衆責入天王寺燒之云々、眞偽如何、

廿六日壬辰、雨下甘雨云々

一、大内者共責入天王寺事、今日傳聞了、於堂舍者不燒云々、去廿四日責入之間、細川内者寺町三郎左衛門尉捨身命雖防戰、寺町既及生涯之間、(處)歌方若黨七人令打死之間、其隙遁死了、自身令打大刀之間、モ、ヲ突通了、然而甲斐致防戰之間、無爲云々、於大内衆者、所々へ打入、思不_レ物ヲ取テ引退云々、其跡ニ又用害ヲ沙汰、寺町取陣云々、

○是ヨリ先大内氏ノ兵ノ河内ニ入り、關郡ニ陣シ、東兵ト戰ヒシコト、去年六月二十一日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

二十六日、癸亥當座和歌三首通題ヲ賜ヒ、近臣ヲシテ詠進セシム、

〔親長卿記〕

三 四月廿六日晴、及晚細雨下、○中略、蹴鞠ノ、仰云可有和歌御

文明四年四月二十四日 二十六日

五八一

甲斐防戰

張行、題三首同題可然歎誠可有其興之由申之、郭公歎雨中郭公歎雨中其興候之由申了、原夏草戀歎雜歎雜可然之由申、彼是有御擇、後予可計之由有仰、漁舟火歎夕眺望歎由申之、夕眺望之由有仰、被遊御短冊被下之、人數事、予可書之由有仰、即隨仰注之、各可詠進之由可仰云々、伏見殿御陣所、予持參了、雅康卿陣屋同持向了、其外於番衆所仰之、雨中郭公、原夏草、夕眺望也、伏見殿、源大納言入道、新大納言、予、右衛門督、源中納言、勸解由小路前中納言、中御門中納言、右兵衛督、菅宰相、民部卿等也、

廿七日晴、昨日當座、今日可寄書之由有仰、清書之、點事被申室町殿了、及晚被加點被進之、

〔紅塵灰集〕

雨中郭公文三前通題當座准后燕日

待日心てあ不きし袖や不ととよまを去と、ぬよハ此雨よ不をらん

夏原草

をのろあ、みえこりわねるる逢て草の袂をうけを野原を

夕眺望

影のこるより此とねるさよよて入日の跡乃山う之を穿る

御製
義政點シ
奉ル

三十日、丙申、從三位花山院政長ヲ正三位ニ敘ス、

〔公卿補任〕

二十 權中納言從三位藤政長 廿二 四月卅日正三位

〔宗賢卿記〕

乙 五月七日、花山院中納言 政長、去月卅日一級位 正三 云々、

○萬里小路賢房ノ敘爵ハ、本日ノ事ニアラザレドモ、便宜左ニ合敘ス、

〔宗賢卿記〕

乙 五月七日、左大弁宰相廣光卿語云、去月廿七日萬里小路

寺、亞相教秀 號賢房童形申爵、則件日出仕云々、

一日、丁酉義政。大乘院尋尊ヲシテ、公武女中ノ詠歌ヲ批點セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕五十 五月一日

一、自公方御歌點被申之、袖留木法橋持參云々、公武女中等御詠云々、

三日、己亥蹴鞠御會、

〔親長卿記〕三 五月三日、晴、早旦有鞠、

九日、晴、早旦有鞠、無名門前

十三日、晴、早旦有鞠、殿上廣亞相頭役也、

十七日、晴、及晚有鞠、

十八日、晴、及晚有鞠、無名門前

十九日、晴、早旦有鞠、陶山備中守頭役

廿一日、晴、及晚藤宰相音信、仍參內、於殿上前有鞠、葛袴、每度如此

廿三日、晴、及晚參內、於無名門前令切立、竹四本假沙汰也、

廿四日、晴、早旦有鞠、無名門前予頭役也、

義政。夫人日野氏卜、貞常親王ニ候ス、

無名門前
二行フ
殿上前ニ
行フ

御陣屋

室町第殿
上ノ西

〔親長卿記〕三

五月三日、晴、今日室町殿并御臺入御伏見殿御陣屋云々、

〔宗賢卿記〕乙

五月三日、伏見殿式部卿御座所、殿上室町殿并女中御出、曉

天御退出云々、

七日、癸卯從二位鷹司政平、近衛政家等ヲ正二位ニ敘ス、

〔公卿補任〕四十

內大臣從二位藤政平 五月七日敘正二位、

權大納言從二位藤政家 五月七日敘正二位、

〔公卿補任〕四十

文明五年癸巳年

權大納言從二位藤教秀勸修寺、三月十八日、賜去年五月七日敘正二位々記、

前權中納言從二位藤基有持明院、三月十八日、賜去年五月七日敘正二位々記、

前權中納言從二位藤季春四辻、三月十八日、賜去年五月七日敘正二位々記、

〔諸家傳〕四下

大炊御門信量元信、寬正六年正月五日從二位、廿四文明五

年三月十八日正二位、卅一歲、去年五月七日分、〇信量正二

幕府蹴鞠會、

〔親長卿記〕三

五月七日、晴、參尊躰寺及晚於室町殿有御鞠、人數如已前、但

室町殿無御立、

勸修寺教
秀
持明院基
有
四辻季春
大炊御門
信量

文明四年五月七日

五八六

賀茂社神主ニ命シ、社内智恩寺領ニ新儀ノ課役ヲ賦スルコトヲ停ム、

〔親長卿記〕 卅一 傳奏奉書案

落田一段
長床役

知恩寺（智）號（田段方）百（田段方）知行當社境内落壹段課役事、如先々於長床役者、八疋分致沙汰

於新儀者、可止催促之由、度々被仰了、猶致催促之條、太以不可然、早可止違亂之由、可被下知給之由、按察殿仰所候也、恐々謹言、

五月七日

親繼判

賀茂神主殿

先可被申知恩寺（役方）紋事被仰遣候處、自廣橋殿御局御寄進被成、至去々年八疋分、年々致其沙汰之處、去年始而企新儀、可爲廿五疋之由、被申候條、不便之由被申候、於去年分者、預置百姓方了、不可爲無沙汰候由被申候、堅可有糺明之由、可申出候、恐々謹言、

文明四年六月廿日

親繼判

賀茂神主殿

知恩寺領、堺内落田壹段事、去比依員數相論、年貢令遲怠了、已社家如被申令落居、被致其沙汰之處、猶返遣云々、太以不可然、令收納候様、堅可被加下知之由、按察殿仰所候也、恐々謹言、

八月廿六日

親繼判

賀茂神主殿

十六日、（壬）山名豐遠、但馬惣持寺ニ敷地及ビ境内山林田畑ヲ安堵セシム、
〔福成寺文書〕馬○但

但馬國出石郡一宮惣持寺敷地之事、證文并坪付等、各加一見畢、爰有子細、多年雖遷寺院於他所、任往古之蹤跡、再興堂舍於當所上者、彼境内山林田畠以下如先々、寺家進退不可有相違候者也、仍狀如件、

文明四年

五月十六日

（山名）
豐遠（花押）

惣持寺衆徒中

出石郡一宮村惣持寺事、近年引遷舊跡、付而境内山林如形、田畠以下證文、并

文明四年五月十六日

五八七

寺院ヲ他所ニ遷ス

坪付等、悉京都之懸御目、則御判頂戴候訖、然所聊企濫訴、致狼藉之輩者、堅可處罪科者也、仍狀如件、

文明四

六月十一日

遠治(花押)

惣持寺年行事

十七日、癸丑和歌御會、

〔親長卿記〕

三

五月十七日、晴、於殿上有汁事、隨身飯、廣亞相張行有三十首

三十首續歌

(綱光)

二十日、丙辰信濃大井氏、武田氏ト甲斐花取山ニ戰フ、

〔妙法寺記〕

○甲

文明四、壬辰甲州花取り山ニ信州ノ大炊殿合セン、五月廿

日、

〔參考〕

〔四鄰譚藪〕

四

大井城主 大井美作守光照、美作守或は大膳大夫信貞、按

井氏諱字

此人爲始、一記云、信貞甲源の氏族にして、左衛門尉信正の子あり、文明三年、

城主甲州より入部と云々、○中略美作守ニ五男あり、嫡大井彈正忠長、戸呂を

大井城主

門主古市ニ逃ル

繼ぐ、文明三年岩尾に城を築く、二男大井宮内祐貞家根井に住せ、三男民部正信直、四男大井伊賀守、兩小諸采地あり、繼ぎ四男は大室の跡目とをといふ、一本後文明十六年、采地小室住云、長享元小諸鍋廊障、微州創也、應仁元年村上政國、佐久大井原にて大井黨と合戦、大井打負甲州走、

二十一日、巳東大寺大衆、寺領播磨大部莊ノ事ニ因リテ蜂起シ、東南院ノ

僧坊ヲ破却ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

五十

五月廿二日

一、夜前東大寺蜂起、率人勢、東南院坊官所、民部卿寺主坊、悉以破却了、播州大(加)部庄事云々、門主僧都沒落于古市、珍事々々、不知子細事也、追而可注之、令當寺牒送云々、

六月二日

一、念佛堂舍利不出、近日事也、東南院與惣持寺、大部庄事故云々、

〔經覺私要鈔〕

八十

五月廿二日戊午、霽

一、依東大寺公事、東南院被來、

廿七日癸亥

東南院公事條々有聞旨以外事也、

六月二日丁卯

一、就東南院事、自東室以盛海僧都出狀事可教訓之由申間、付理非可教訓被仰了、

三日戊辰、天曇

今日以公事仕丁、東大寺念佛堂舍利預置東室云々、希代次第也、仍承仕三人、人鑑預召之、急被返舍利可來由仰了、一人遣之、二人ヲハ召置了、

一、盛海以狀申云、前仰之趣、去年仰五師申處、此等之無力、院主可付罪名之由申遣、沙汰外次第也、然中御門付畑又有申旨由申之間、可爲受理之儀者出狀事可教訓無理申了、縱雖付罪名不可痛之由、可返答旨仰了、

五日庚午

一、東南院公事、(義滿)鹿菌院(義持)勝定院兩代御判物在之、古市へハ難進、被上人可被檢知歟之由、盛海僧都申送云々と可返事之由返答了、

六日辛未

東南院公事、東大寺之儀恣之間、無力存定可令返答歟之由、即躰ニモ令入魂然者定可及大儀歟、其時者涯分可致忠、偏可相憑之由仰古市畢、又水門子、大輔高天辻子ニ大兄、此公事間不可入言、此慮之由被仰含了、仍召下水門子、辻兩人召下可問答之由、以筑前家則返答了、

十日乙亥、雨

就東南院公事、自東大寺以兩使水門古市申遣云、此事可折中と申云々、就其以家則古市内々可折中(歟)右否事、伺所存之間、可相計之由返答了、仍先兩三日間、日次不宜と可申と返答云々、

〔經覺私要鈔〕二八 六月十六日辛巳、霽

一、古市胤榮就東南院公事、一昨日罷向東大寺、色々理非之様申分之間、彼一寺雖申所存、以告文不可有難之由問答之間、自東南院如形以出狀之通申伏云々、則被對面古市、直東南院被悅云々、

十九日甲申、霽

一、今度就大部庄事、東大寺使節兩人水門快賢、高間辻子、兩人古市所ニ來有申子細之間、申東南院被出狀了、又念佛堂舍利事預置東室之條、存外之由偏仰

文明四年五月二十二日 二十六日

五九二

之間、永存民部卿可取之由申間、爲其預東室了、寺門非可自專心中由兩人出狀了、

廿三日戊子、霽夕立雷鳴

一、今度東南公事、古市并筑前色々粉骨之間、兩人召之、能素麵瓜等了、

二十二日、戊午北島政郷ノ兵、奈良手害ニ陣ス、

〔經覺私要鈔〕八十 五月廿二日戊午、霽

一、今夜手害國司勢取陣、家々少々燒云々、付火歟、

○是ヨリ先政郷ノ一族、山城木津ニ陣セシコト、三月十六日ノ條ニ見

エタリ、參看スベシ、

二十六日、壬戌關東兩陣和議ノ風説アリ、

〔大乘院寺社雜事記〕五十 五月廿六日

一、關東兩陣御和與無爲云々、爲京都珍重事也、永享十一年持氏御自害享十

一年閏正月二十四日ノ條參看、以下、關東事悉皆京都將軍御計也、普光院殿御代以後、持

氏御息濟々出頭、其時無爲儀可申沙汰事也、關東上杉與京都伊勢守申合(貞親)

故歟、猶以及御確執之間、至今年卅二年也、利康正三年以來、普光院御息(足利義教)

上杉氏伊勢親ト和議ヲ圖ル

足利政知和議ヲ望ム

鎌倉ノ由來

大内氏ハ日本人ニ非ズ多々羅氏

利政知僧御還俗、關東御下向、千万無爲儀、難有風情也、然而彼御息和與無爲儀、思召定故也、大方正直御座云々、可悅事也、惣而鎌倉ハ賴朝卿開白地也、立谷ヤツ八所希有之地也、賴朝子孫滅亡以後、前代北條孫及九代、尊氏卿通領天下之時、其息(基ヲ)其(號瑞泉)院殿、住鎌倉者、于今子孫相續之、所詮京都將軍御一族也、又號鎌倉事ハ、大職冠被誅入鹿大臣、靈鑑奉納彼在所之故、有此號、如何様執柄由緒地者也、

二十七日、癸亥大乘院尋尊、大内教弘影像ノ讚ヲ、一條兼良ニ請フ、

〔大乘院寺社雜事記〕五十 五月廿七日

一、成就院ニ參申、故大内影讚申入之、○故大内トハ教弘金少々北絹進上之

云々、大内者本來非日本人、蒙古國者也、或又高麗人云々、其船寄來于多々(周防)

羅濱之間、則以其所之號爲多々羅氏、於中國九州一族數輩在之、希有事也、

近者

義弘應永五年持弘(世)教弘嘉吉元年入滅○持世ハ嘉吉元年七月二十

大和宇多郡地頭 條ルアリ、其 政弘近日在京天下大亂、○

文明四年五月二十七日

五九三

二十九日、乙丑祈雨奉幣使ヲ紀伊丹生社ニ發遣セントス、後用途ナキヲ以テ延引ス、

〔親長卿記〕

三 五月一日、晴、炎旱、土民愁傷云々、

廿九日、晴、可參殿上之由、自新大納言許申之、即參内、廣橋大納言同祇候、近日

炎旱以外也、祈雨奉幣事元長可申沙汰云々、可存知之由申之、丹生社事發遣

之儀如何、申云、南都通路無相違之上者不可苦云々、上卿事奏聞、可爲源中納

言之由有仰、予即罷向仰之、日之由有仰、惣用事廣橋大納言可令催促云々、赤

沙汰御年、予退下、仰含元長令書御教書、宿紙當時難得、仰兩局、富宿禰有敵陣、

其儀雅久有當陣、官方事奉行無例事歟、

六月四日、晴、今夕廣亞相示送云、明日奉幣事無用脚、先可被延引之由有仰云

々、其趣觸了、

炎旱ニヨリ、興福寺ニ勅シテ法華經ヲ讀誦シ、豐熟ヲ祈禱セシメ給フ、

〔經覺私要鈔〕

一八十一 五月廿七日癸亥

一、自京都祈雨事可沙汰旨傳奏申、傳雜掌申賜了、

六月四日己巳

赤松氏進上ノ年貢ヲ惣用トス、白紙ノ御教書

繪旨

午刻自雜掌重藝方、繪旨給之、

依炎旱凶歲之儀、任文和元年之例、當年中每月讀誦法花經貳千五百部

於四ヶ大寺都合一万部也、宜奉祈田畝豐熟、而黎庶康樂、天下泰平、而寶祚延長旨、可

令下知滿寺給之由、天氣所也、(候脫)仍言上如件、政顯謹言、

五月廿九日 (經覺) 左少辨政顯奉

進上 興福寺別當僧正御房

五日庚午

一、繪旨返事、寺門返事、

繪旨今日 午刻下着之由、御奉書於學侶集會令披露了、當寺事年中可抽

懇祈旨評定候、可有御申京都之由、可有洩御披露候、恐々謹言、

六月四日 供目代興弘

畑藏人殿

於京都返事者

依炎旱之凶歲之儀、任文和元年之例、當年中每月讀誦法花經貳千五百

部 於四ヶ大寺都合一万部也、宜奉祈田畝豐熟、而黎庶康樂、天下泰平、而寶祚延長旨、

繪旨請文

寺門返事

文明四年五月二十九日

五九六

可加下知滿寺旨謹承了、早可申含之由、可令奏聞給之狀如件、

六月四日

前大僧正經覺請文

左少辨殿

禮紙二

追申、去二十九日綸旨、今日四日午刻到來了、

〔東院年中行事記〕

五

晴

五月廿八日 甲子 祈雨事、自京都御奉書到來、

○興福寺祈雨、最勝曼荼羅ヲ繪クコト、ソノ他祈雨ニ關スルコト、左ニ

附收ス、

〔大乘院日記目錄〕

三

四月廿九日、近日請雨祈禱在之、作毛一向不叶者也、

希有事也、

最勝曼陀羅圖繪供養

五月六日、寂勝万陀ヲ圖繪供養、御衣絹學侶沙汰也、導師權別當、密供養上乘院僧正、此外祈雨至高山十講事盡了、

最勝王經供養

廿二日、六部寂勝王經供養、就繪師事不及圖繪者也、如文安二年也、導師淨法院權少僧都、

〔大乘院寺社雜事記〕

五十

四月晦日

學侶祈雨最勝曼荼羅衣絹代ヲ請求ス

一、學侶使節宗算、寬專兩五師參申、寂勝万ヲ自去年立願也、御衣絹代事、寺務ニ申入、于今不及御下行、可然様自此門跡可申沙汰云々、引違下行可目出云々、予返事、引違事中々不可叶ハ、就中御衣絹代事、更以非寺務所役間、其分被仰出候歟、以御奉伽儀如何様ニモ、自學侶可申入ニ、さのミ不可有御異儀候、以書狀申入者可目出也、以其下尙々可申入也、自去年於此門跡者無等閑儀申入了、則退出書狀到來、以繼舜法橋申入了、

五月二日

一、御衣絹事、寺務御返事到來、自國他國寺領一向無知行、有限所役猶以難義也、非分所出不可得旨也、則御書ハ先日兩使節方ニ遣之了、

一、祈雨寂勝万ヲ御衣絹代三百疋事、自學侶申入衆中ニ、繪所事、吐田長有法橋就寺務致所望、此子細予被尋之、更以寺務御計事不可有別會五師自專之由、巨細申入之了、

六日

一、祈雨寂勝万陀ヲ圖繪、繪師并六部頓寫寂勝王經分方、而一部宛也、龍花院方經料紙代五百當門跡坊官侍役也、自一薦御守其巡申送者也、去

繪師芝

最勝曼荼羅圖繪

文明四年五月二十九日

五九七

文明四年五月二十九日

五九八

嘉吉四年 子 七月廿八日、紙代、松谷住南院法橋泰祐、

文安二年 丑 六月六日、紙代、福智院住隆舜上座、

同年七月十八日、紙代、東桶井住多聞院繼舜經計在之、
圖繪無之、

寶德二年 未 六月十五日、紙代、松谷住成就院法眼清祐、沙汰也、
第二反

康正三年 丑 六月八日、紙代、成就院寺主清賢、

長祿二年 トラ 六月十二日、紙代、松谷住桶井中專實、十輪院
此年寺主孝承可沙

汰旨申送云々、雖然專實之坊、杉借住部屋住分也、善實住坊無之間、可被

閣之由申送云々、仍專實勲之畢、坊役旨存故也、龍花院方仁居住分坊官

侍沙汰也、隨而鵠興福院等ハ依他方郷不出之、

今日紙代寺主裝舜出之、去長祿二年紙代事、隆舜法眼之記ニハ、十輪院孝

承沙汰旨見之、然者今日ハ專實可沙汰之由存云々、相尋子細處孝承之記、

并龍花院方記ニハ、專實出之旨分明也、則專實ハ已勲云々、不審千万也、雖

然先以今日ハ裝舜出之、重而可一決云々、

一、今日供養奉行綱所裝舜從儀師、泰弘注記、近來孝乘威儀師稱在京、諸供養

ニ不參之間、當方綱所一圓出仕也、不便事也、無盡期之間、不可出仕旨申之、

自今以後事嚴密ニ可申付之由、學侶一決之間出仕云々、

導師權別當法印、讀師覺乘律師、祝願東北院大僧正、

一、今日本尊御衣絹代事、自學侶下行之、寺務御出無之、子細ハ先日記之、

九日

一、自今日五ヶ日內雨下者、重而宸勝圖繪可有之由、學侶立願云々、

十五日、一日
雨下

一、來卅日可有相舜云々、治定、同廿日比宸勝万々ラ圖繪可有之、隨而經料紙

事、自一藹所申送泰弘注記方云々、一年兩度例不審事也、

廿二日

一、六部宸勝王經頓寫、於金堂前延供養畢、導師淨法院僧都、綱所裝舜泰增兩

從儀師、孝乘威儀師所勞并在京之由、子息隆乘致咭文畢、吐田座無人數之

間、不及本尊圖繪者也、龍花院方經紙泰弘沙汰了、

〔經覺私要鈔〕

一八 四月廿二日戊子、霽

一、學侶申云、近日炎旱過法間、宸勝圖繪可沙汰候、御衣絹事爲寺家役上者、可

沙汰之由申給了、

文明四年五月二十九日

五九九

文明四年五月二十九日

六〇〇

廿三日己丑天曇

昨日返事仰遣學侶奉書、

寂勝圖繪御衣絹事、去年度々雖被申候、大乘院殿御寺務康正三年六月八日寂勝圖繪時、以御心落之儀御沙汰之間、又可有御沙汰之由、長祿二年六月十二日雖被申候、今度御沙汰候者、爲後々可爲傍例歟、色々雖被申、終無御沙汰候旨被記置候、近來事候間、定被存知哉、縱又雖可有御沙汰事候、他國之寺領悉無正躰間、難有御沙汰候、既依寺家御役、長祿二年無御沙汰上者、只今以同篇由可令披露集會給也、恐々謹言、

卯月廿三日

經胤

供目代御房

五月朔日丁酉、霽日々、炎旱、珍事云々

一、自禪定院以繼舜被申送云、寂勝圖繪御衣絹事、爲學侶再往雖申之、寺務曾無承諾之儀候、自門跡有沙汰之儀、可有功言之由申間、使節宗算五師云、縱雖爲寺務所役、他國寺領一所無知行分之間、可及子細歟、既此御衣絹事、非寺家役之間、打任可有沙汰之條、無覺束事也、然而如此懇申間、一重可

〇一九中

御衣絹下
知就下
寺務ノ口
入ヲ請フ

學侶承引
セザレバ
寺務ニ難
題アリ

申試之由被返答之間、如此進狀云々、

近日炎旱及累日之間、祈雨任先例雖致種々祈請候、更以無効驗、耕作一向打置候條、驚歎此事候、隨而六部寂勝頓寫事、去年令立願之間、可果遂之旨治定之處、御衣絹事申入于御寺務、多重雖問答申候、無御例之由被仰之間、于今停滯候、御寺務職事者、遷替御職候、仍余御職時、御衣絹御沙汰條々無餘儀候、只今寺門引違沙汰候者、可成引懸條迷惑候、所詮炎旱過法上者、以御撫民之儀、被垂天下泰平五穀成熟賢慮、以別段之上意、御衣絹無爲御下知之儀、爲御門跡被口入申入候者、可畏存之由、學侶評定旨、可有洩御披露候、恐々謹言、

卯月卅日

供目代興弘

伊與法橋御房

返答云、寺領龍門以下、依學侶一言、可止峯事違亂之間、以前再往雖令披露、終無承引之儀、學侶沙汰既令見終上者、寺務又非可優如之間、難題事之由、令返答了、

二日戊戌、霽

文明四年五月二十九日

六〇一

雨降ル

一、寂勝圖繪御衣絹事、難沙汰之由、禪定院以狀申遣了、以次重々述懷子紙、可被申遣學侶令返答了、

五日辛丑、雨下、誠甘雨也
六日壬寅、雨下甘雨、勿論也

今日最勝圖繪在之、導師光淳法印權別當也、呪願前大僧正俊圓、別會寬專五師、綱所裝舜從儀師、泰弘從儀師云々、同六部寂勝王經頓寫在之云々、
廿二日戊午、齋

最勝王經頓寫

今日寂勝頓寫六部、不雨下、定供養之儀在之歟、

〔東院年中行事記〕

五月三日己亥、最勝王經料紙代百六十五文送遣之、

五月六日壬寅、爲祈雨六部寂勝王經頓寫、同曼陀羅御圖繪供養被修之長巳、當方分料紙代者爲院家衆兩三人修南院、北戒壇院、出之、於經者凡人方當住并僧坊衆半卷宛書之、行專房分當時他行之間、爲結緣書之、但禪師房加賀宗圓助筆了、今日導師、權別當法印光淳、咒願東北院前大僧正俊圓、勤仕之、其餘者凡人也、僧綱出仕云々、供養之時分山雨脚(ア、)、
廿二日戊午、爲祈雨寂勝王經頓寫在之、料紙之代如以前出了、經書寫事行專

四恩院最勝十講

房分助筆了、今度ハ於曼陀羅者圖繪無之、供養導師淨法院僧都、呪願修南院僧正、其餘者凡人出仕云々、

〔大乘院日記目錄〕

六月六日、良家衆十人、於四恩院、寂勝十講始行之、

四恩院最勝講

講師

一、於四恩院良家衆寂勝十講行之、無重難座之在經尺論之、寂勝經義論々義、各付衣白五帖、極内々會合也、初座講師東北院大僧正、第二座講師修南院權僧正、第三座講師東院權僧正、第四座講師松林院權僧正、第五座講師東門院權僧正、第六座講師西南院法印大、第七座講師淨法院權少僧都、第八座講師光明院權少僧都、第九座講師大納言權少僧都、第十座講師喜多院得業至午刻事了、道場著座、東上エヒスカケ、南一廳ハ北講問以後日中飯、得業二廳也、承仕彼在所ニアリ、召出云々、本尊佛舍利也、講問以後日中飯、東南院沙汰云々、於四恩院在之、各皆朱碗折敷、々々足付也、自類會合用器物也、昔様ニ又成歸者也、上古一切用定器、關白家大饗被用朱器、定器事也、當時碗是也、近來土器ハ月見花見御幸行幸當座儀也、古今差別傳了、可得其意事也、

朱碗足付折敷定器

〔東院年中行事記〕

五月 六月六日辛未、爲祈雨良家中被修寂勝十講、於社頭

文明四年五月二十九日

六〇四

可有勸修之處、諸屋皆以指合之間、於四恩院禮堂被修之、集會辰具定、初座神分表、白勸談經尺、一、勸尺并第一卷別尺、祈句等丁寧之演說也、結句神分揚勸談經尺祈句在之、中間之座雖可有祈句等、炎氣之時分、長座皆々難義之間、揚勸談并經尺計也、座々ニ法用在之、初結ハ引聲、中間ハ略唄、略散花也、

東北院前大僧正、修南院權僧正、予、權僧正、松林院々々々、東門院々々々、西南院法印大僧都、淨法院權少僧都、光明院々々々、尊譽、大納言々々々、喜多院得業、任薦次勸仕之、互爲問答、無重難、題一條ハ取勝問答、一條ハ同學抄、於承仕者東北院北面沙汰之、佛供燈明等同自彼方下知之、日中飯自東北院下知之、講問已後於院主坊沙汰之、結座講師事、佛地院得業可有勸仕之處、不堪之間、先日於門跡御祈禱之、砌、内々爲一薦之沙汰、喜多院被申勸之處、可有參勸云々、仍雖爲上乘、於佛地院者今度不參了、土代又自衆中祈禱以下、清華之仁勸否先規兩樣也、旁以今度喜多院參勸、神妙之儀也、

〔大乘院寺社雜事記〕

五十 五月十日

一、自今日三个日、祈雨大般若於西室讀誦云々、

五月廿四日

自今日於社頭信讀大般若三个日云々、自一薦法印至二薦法師云々、去文安三年比祈雨在之、修中雷中院ニ落了、雖不吉例修之云々、

〔東院年中行事記〕

五十 五月廿四日晴庚申、爲祈雨於社頭祥參、大般若經自今日三个日被修之、

〔大乘院寺社雜事記〕

五十 六月三日

一、今日於一乘院祈雨大般若在之、門徒良家衆共參勸云々、

〔東院年中行事記〕

五十 六月三日晴戊辰、於門跡祈雨大般若經被讀誦之、東北

院前大僧正、修南院僧正、導師、散花、淨法院僧都、光明院々々、喜多院得業、大納言禪師光慶參勸之、東門院僧正ハ社頭參籠之間、進代官、西南院法印ハ所勞之間、同進代官、以上九人也、北戒壇院ハ伊勢國へ下向之間、不能催云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

五十 五月十三日

一、祈雨百座仁王講於講堂修之云々、三个日云々、

六月三日

一、自昨日百座仁王講修之、祈雨也、於講堂云々、

〔東院年中行事記〕

五十 六月二日晴丁卯、自今日三个日、爲祈雨百座仁王講、學

文明四年五月二十九日

六〇五

文明四年五月二十九日

侶等沙汰之云々、

六日辛未、自今日十日、爲祈雨於社頭學侶百座講問修之、

〔重胤記〕○歷代殘闕日 記七十八所收 五月廿三日、晴

一、三塔の面々、下社頭にて、仁王講雨こいあり、

〔東院年中行事記〕五 四月廿一日丁亥、自今日時也祈雨卅頌於西室被修之、

廿三日己丑、祈雨佛供燈明西室へ送遣之、

〔大乘院寺社雜事記〕五十 五月十九日

一、至今日三个日、西室群參論在之、祈雨、

〔東院年中行事記〕五 五月廿九日乙丑、祈雨事、西大寺へ申下之、

〔大乘院日記目錄〕三 六月十五日、南北鄉民南圓堂三万度、自身致其沙汰

了、祈雨立願也、自去七日連日大雨下故也、

〔大乘院寺社雜事記〕五十 六月十五日、雨下

一、南北鄉民等南圓堂三万度沙汰之、祈雨立願也、自衆中申付之、鄉人直垂等

云々指合躰、代官神人符坂油座衆ハ淨衣云々、白人神人故也、

〔粉河寺舊記〕○三 紀伊 御池坊舊記 拔書寫

一、文明四年七月廿日ア、コヒ零、即時降雨、祝儀松受太夫能七番仕候、各出錢馬(マ)謂(イ)

正、衆徒 二正、方衆 三正、行人衆 一正、御池坊 五正、地下中誓度院者地下合力、

〔經覺私要鈔〕一八十 五月十三日己酉

日々炎旱甚珍事云々、於所々色々雖有立願、一切不降雨、匪直事歟、諸社祭

禮禁中政一向無之間、神忿人憂之間、以何篇可有天哀愍哉、如此灾障尤也、

覺者也、

十四日庚戌、且快雖霽、自申刻雨下、甘雨中々無申計云々、

一、今日雨、雷鳴、衆人悅也、非夕立分歟、入夜猶甚、

六月二日丁卯

自寺門仰付白毫寺へ、於鹿野苑并岩井川、號八万四千基五重石塔ヲ、爲祈

雨可沙汰之由相觸云々、仍衆人集岩井河、小塔ヲ重云々、可成祈雨之條有

先例歟如何、白毫寺僧罷出可供養云々、古市者共至召仕者沙汰云々、

一、今日於興福寺、千人分一時持齋戒無言云々、當寺七百人、今四百人者、東大

寺へ申遣云々、是祈雨用也、笠木上人時有此祈雨云々、依之只今沙汰歟、

五日庚午

文明四年五月二十九日

雖有色々懇祈、一切雨不下、以外之珍事也、

七日壬申、夕立大雨下了、誠甘雨也、

〔東院年中行事記〕

五

六月二日丁卯、自東大寺男女僧俗令勸進、今日一日

持八齋戒、一時之間、令無言信仰也、經論神呪寶號等任意業念誦之、別而祈雨、物而災難消除等可祈念之、是則無上之祈禱、又ハ善根之寂長也、飢饉之年ハ病患災難等出來之間、男女僧俗可慎之、爲其之祈禱不可如之旨、解脫上人之御置文在之旨、諸寺諸山道俗男女勸進之、則當寺へも牒送之、自別會所方也云々、則當坊之上下大部結緣之、予令持齋、未一時於觀音之寶前、千手陀羅尼念誦之、祈雨除災等祈請之、人數及三万人歎云々、

〔大乘院日記目錄〕

三

五月廿一日、南北鄉相撲打勝等取之、於馬場院如例也、

〔經覺私要鈔〕

一八

五月廿一日丁巳

一、有願相撲於馬場也、假屋修理目代立之、百廿番後有打勝、雖然不雨下、青天增色者也、珍事々々、

〔東院年中行事記〕

五

五月廿一日丁巳、奈良南北兩鄉々民、爲祈雨於馬場

相撲沙汰之、

〔大乘院寺社雜事記〕

一五

七月十九日

一、西京鄉民等於藥師寺八幡宮手猿樂祈雨立願云々、本寺衆少々付衣ニテ見物云々、

〔大乘院日記目錄〕

三

八月廿五日、禪光院念佛在之、依炎旱日供無之、於中

幽贊談義

院幽贊談義始之、讀師定清僧都、

〔親長卿記〕

三

六月十七日、晴、參内、下姿、今日賀茂神主勝久來問談、依炎旱

堺内無作毛之儀、無先規之由語之、

〔二條寺主家記〕

文明四年二月ヨリ六月マテ炎旱

〔和漢合運圖〕

坤

文明四壬辰、天下大旱飢死、

〔異本塔寺長帳〕

原題長帳
續年日記

四 正月ヨリ六月迄雨不降大旱、諸作毛草木迄燒

枯、大飢饉、

〔相良家年代記〕

原題御當
家日記

壬辰 文明四 天下大旱、飢饉死、

〔下總風早莊平賀邑本土寺過去帳拔書〕

帳上諸寺過去

文明四年五年旱魃、

日本國中餓死者不可勝計云々、

手猿樂

願相撲

八齋戒

文明四年五月是月

六一〇

是月、横瀨國繁、禁制ヲ下野鏝阿寺ニ掲グ、

〔鏝阿寺文書〕

○三 禁制書下馬之舊記

制札

於足利寺家甲乙人不可有亂妨狼藉候若於違犯輩者可有其科候也仍禁制如件、

文明肆年五月日

(横瀨國繁) 信濃守(花押)

六月 丙寅 朔

六日、辛未義政、毛利元家ノ東軍ニ屬スルヲ以テ、兄豐元ノ所領ヲ與ヘ、カヲ効サシム、

〔毛利文書〕

○百三十四 末家證文

(義政) (花押)

安藝國所々兄治部少輔豐元跡事參御方之上者所充行毛利與次郎元家也、早守先例、全領知、相從一族被官等、可抽戰功之狀如件、

文明四年六月六日

○義政、兒玉修理亮等ヲシテ豐元ヲ討タシメシコト、文明三年閏八月二十七日ノ條ニ見エタリ、

十一日、丙子權大納言廣橋綱光ニ綸旨ヲ賜ヒ、其所領尾張小隈狐穴等ヲ安堵セシメ給フ、

〔親長卿記〕

三

六月十日、細雨下、廣橋大納言申、尾州知行分綸旨事、可書遣之由、以女房奉書被仰元長、申奉之由了、即可給案文之由申之、爲例日明日可申云々、

文明四年六月六日十一日

六一一

文明四年六月十二日 十七日

六一二

十一日、雨下、綸旨案送之、尾張國(美濃羽島郡)小隈狐穴等已下略之、案文在別、書遣了、

十二日、丑伯耆守護山名教之其國ニ歸ル、

〔大乘院寺社雜事記〕五十 六月廿二日、雨下

一、山名(教之)相模守没落在國云々、去十二日云々、

○是ヨリ先、教之東軍ニ降ルノ風説アリシコト、二年八月四日、西軍、島山政長ノ兵ヲ、河内若江ニ攻ムル條、大乘院寺社雜事記ニ見エタリ、コノ後、教之卒去ノコト、五年正月十三日ノ條ニ見ユ、

十七日、壬前右大臣德大寺公有出家ス、

〔公卿補任〕四十 前右大臣從一位藤原公有五十 六月十七日出家、○諸家傳

之ニ

〔宗賢卿記〕乙 六月十七日、後日聞之、今日前右大臣從一位藤原公有公出

法名

家、法名聖祐、五十九才云々、

東常縁、藤原俊成女等ノ手蹟古今和歌集ヲ宗順房ニ受ク、

〔古今和歌集〕○伊達伯(奥書) 西方行者宗順房爲助業歌道、且暮雨之外無餘事、

依之常縁如骨肉而歳久、然而欲爲諸國修行之時、爲殘舊友交儀、此書附與于

古今和歌集興書

伊達伯爵家所藏

原寸 紙七十五分
一、二、三、分

雖有代本、無家本、三方被書
か、勇、三京極、三門、三真、三筆、三下、三七
殊、三決、三年、三宗、三限、三美、

西方の心家助業方為助業方道
是言而外言傳事傳之令家也
青肉多美久花少欲力能國世の
為後定友交送しを附らるる令家美
情見之成多友交之相主も如之能者
任母用命は此方所奉る沖本
「日」云々云々云々云々

天明六年六月十七日 伊達

惟有代本一家本一方被書
か 勇方之京松葉門真筆下
殊に沖本一方限美

西方行志家必以廣為助業方可通
且言而外之何事依之有象也
育肉之氣久然亦欲為法國此以之而
為後定友交送也書附之有象矣
情見之成之有手之相交公加之修在
仕不可用而為德也此者准私家沖平
丁用也年之久而已

又照平丁六月十七日 多海丸

雖有代本無家本丁三被書
別 勇之六京松葉門真筆下
殊心沖平之限也

定家ノ眞蹟

東頼數子
孫ノ歌道
ヲ繼承ヲ願

常縁矣、倩見之、越邊殿手跡相交歟、加之假名仕等所用當流也、然者准私家證本、可用此本之儀而已、

文明四年六月十七日

雖有他本、無家本歌被書別紙歌共、京極黃門眞筆也、殊以證本無限者也、

常縁(花押)

奉施入白山大御前古今集一部、

此本者俊成卿女手跡也、又少々定家卿被加筆、老母附與于頼數、然今頼數爲成現當二世願故、

白山妙高嶽攀登、仍當家餘流、遍及未來世々、令絶和歌業子孫也、仰願神慮此志納受給耳、

文明十七年六月十七日

右近將監平頼數(花押)

右本、如奥書之彼眞筆共也、

左金吾藤(花押)

文明四年六月十七日

六一三

近衛植家ノ奥書

右本、如彼奥書無相違者也、尤至寶不可過之而已、

天文第九曆孟冬下旬

(近衛植家)
關白太政大臣(花押)

○是ヨリ先、常縁ノ古今集祕說ヲ連歌師宗祇ニ傳授セシコト、去年是歲ニ本條アリ、參看スベシ、

十九日、甲出雲杵築大社斧始、

〔千家家譜舊記〕

一 文明四年六月十九日、鑄始、同十八年九月廿八日、遷宮

式奉仕ス、○國造兼大社檢校職出雲助三郎

二十日、乙讚岐白峯寺領ヲ安堵セシメラル、

〔親長卿記〕

三 六月廿日、自未明雷鳴雨下、(讚岐阿野郡)白峯寺文書紛失、可申請勅裁之

由、奏聞、勅許、

廿二日、終日雨下、白峯寺住僧洞林院僧都同申勅裁有御不審事、子細今日奏聞之、於洞林院分者雖不被成、白峯寺同事歎之由有仰、々子細了、

廿三日、適屬晴、洞林院申勅裁事、與白峯寺院領各別之旨申之、然者可被成勅

文書紛失

裁云々、同仰元長令書遣之、
二十四日、己和泉守護細川持久、念佛寺ニ諸公事臨時課役等ヲ賦スルヲ停ム、

〔開口神社文書〕

○和泉

當國堺南庄念佛寺之事、任御判之旨、諸公事、臨時果役、并寄宿事堅令停止云々、若有違亂輩者可處罪科由候也、仍執達如件、

文明四年壬辰年

(課下同)
藤衛門殿

六月廿四日

久和(花押)

衆徒中

當國堺南庄念佛寺之事、任御判之旨、諸公事、臨時果役、并寄宿事堅令停止云々、若有違亂輩者可處罪科由候也、仍執達如件、

文明四年壬辰年

宇高殿

六月廿四日

光成(花押)

衆徒中

〔參考〕

〔和泉志〕

二 大鳥郡 開口神社、在堺南、初開口、本戸原三村共祭、因稱三念佛、寺一名大寺、又曰開口神社、本地佛、藏有勅書、廳宣數章

足利義教忌辰、幕府騷亂ヲ以テ等持寺法華八講ヲ停ム、

〔大乘院寺社雜事記〕

十五 六月廿四日、至土用今日

一、普廣院贈大政大臣御忌日也、自應仁元年至當年六個年之間、等持寺八講不被始行、天下大亂故也、

二十五日、庚寅、青蓮院尊應ヲシテ、同院御師職及ビ鎮守田ノ事ヲ管掌セシム、

〔親長卿記〕

三 六月廿五日、甚雨下、用久申、青蓮院御師職事、鎮守田事、延久

縣主執申之、奏聞、仰云、爲青蓮院成敗、可申彼准后之由有仰、

〔親長卿記〕

卅一 傳奏奉書案

就青蓮院殿御師職事、委細承候趣申入畢、去年御申之時、御奏聞候之處、森方支證可召進之由被仰出之間、其分被仰付森之處不進之、仍其後惣安堵之事、森申され候之處、有子細事、よて候間、鎮守田事、(マ、)郷ハ惣安堵よのこし候へど

被仰出候て、此こりのあん(るカ)とをかり下され候事、よて候間、御臺さぬへ御口入候て、禁裏さぬより御申あり事ハ御不審(るカ)候よし可申旨候、恐々謹言、

六月十四日

刑部大輔殿

青蓮院殿の御をあらいのうへハ、もんせきへ申され候へど、おほせ出され候うへ、あさ存てよく御申候様、井關殿ふもあゝし可申給候云々、

○是ヨリ先、賀茂社務貞久、禰宜用久ト青蓮院御師職ヲ争ヒ相訴ヘシコト、去年三月二十一日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

三十日、乙未、大祓、

〔親長卿記〕

三 六月卅日、雨下、六月祓也、

是月、長尾景信、禁制ヲ下野足利鏝阿守ニ掲グ、

〔鏝阿寺文書〕

三 禁制書下馬之舊記

禁制

右於足利庄鏝阿寺々中、軍勢甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、可被處罪科狀如件、

文明四年六月三十日、是月

文明四年六月是月

文明四年六月日

(長尾景信)
左衛門尉(花押)

六一八

七月丙申朔盡

四日己亥赤松氏ノ部將浦上則宗、山崎ニ陣ス、

〔親長卿記〕三 七月四日晴、浦上美作守、今日出山崎之陣云々、

〔天陰語錄〕 浦上美作守壽像讚

○上文ハ朝倉孝景、東軍ニ降ルコトニカ、洛南山崎西國咽喉也、將軍命則宗居之、

○コノ後、畠山義就ノ兵、天王山ヲ襲ヒ取り、則宗等之ヲ復スルコト、八月二日ノ條ニ見ユ、參看スベシ、

五日庚子御蹴鞠アリ、

〔重胤記〕○歴代殘闕日 七月五日

一、今夕殿上前無名門前ニテ切立、沙汰鞠在之、人數飛鳥井兵衛督、庭田殿(雅行)藤宰相殿(武者小路實世)勸修寺御方(政題)武家者共也、公家ハ葛袴也、

八日

一、殿上前ニテ御鞠在之、

十日

文明四年七月四日五日

六一九

無名門前
ニ行フ

殿上前ニ
行フ

鞠庭刀ノ置様

文明四年七月五日

六二〇

一、予、飯尾賀州使ニ飛鳥井殿參候、其次ニ色々物語候也、御鞠□武家人々鞠庭ニて刀置候様、故入道殿被仰ニ相違□□□今人々其まていとて御日らい、まきり日茂(く)うしろ□□□□□刀のやいとをそとへ、洗り日左の方へ、右上首あらハ刀のさき□□□□□るし、上の人をまやうと

一、本所、今夕殿上前御懸ニテ御鞠、直衣ニテ被遊之、御人數飛鳥井、冷泉大納言、廣橋大納言、勸修寺殿、勸修寺殿、勸修寺殿、由小路殿、室町殿、ソウ阿も吉□然間本所今夕太刀、金折紙ニテ、飛鳥井兵衛督殿御弟子ニ御成候也、歌鞠兩适(道カ)

十一日、晴

一、殿上前切立庭ニテ御鞠在之、ハテ時分本所直衣ニテ被遊候、御人數廣橋大納言、庭田殿、藤宰相殿、勸修寺殿御方、各葛袴也、

廿二日、晴

一、今朝御鞠有之、本所被遊候、無明門前也、賀茂者三人、飛鳥井殿、庭田殿、藤宰相殿、勸修寺殿御方、武家者共、

〔親長卿記〕

三 七月廿七日、晴、略、中及晚有鞠、如常、

七日、壬寅、御樂アリ、

〔重胤記〕

〇歴代殘闕日記 七月七日、晴、

一、夜入禁裏有樂、御所作本所計也、公方□□□本所小唐也、音取、次万歳樂、樂子、三臺急、五常□□□□太平樂、公方慶德、老君子、林歌、

十二日

一、今夕殿上有御樂之、筐中院大納言、本所、笛四辻殿、綾小路殿、御方、万歳樂、三臺急、太平樂、五常樂、慶德、老君子、太平樂又□□

十一日、丙午、攝津多田廟鳴動ス、是日、義政使ヲ遣シテ之ヲ祭ル、

〔多田院文書〕

〇攝津 維文明四年歲次壬辰、七月丙申朔、十一日丙午、吉日

良辰、乎擇定、豆、掛毛、畏、幾、多田院、乃御廟、濃、廣前、仁、征夷大將軍、准三后、從一位、源朝臣、義政、恐、美、恐、美、毛、申、久、夫、尊、靈、波、累、葉、乃、元、祖、天、止、之、跡、於、塵、土、仁、垂、大、樹、乃、宗、氏、天、止、之、德、於、天、下、仁、施、須、効、驗、日、新、之、天、万、代、守、護、濃、權、現、多、利、爰、去、三、日、戌、時、靈、場、俄、爾、震、動、之、豆、其、聲、日、於、連、奴、占、文、乃、所、差、謹、慎、不、輕、凡、當、院、乃、御、本、誓、波、兼、天、地、濃、妖、恠、於、知、見、之、豆、還、豆、國、家、濃、安、全、於、擁、護、賜、布、因、茲、專、一、濃、丹、祈、於、抽、豆、無、貳、濃、精、誠、於、凝、之、天、廟、塔、乃、噴、於、奉、鎮、者、奈、利、此、等、乃、趣、正、四、位

文明四年七月七日十一日

六二二

十二日又御樂アリ

義政ノ祭詞

三日ニ鳴動ス

卜部兼俱
ヲシテ啓
白セシム

義尚ノ災
消安穩ヲ
祈ル

寄進ノ馬
ヲ四百疋
ニ代フ

文明四年七月十一日

六二二

上行神祇權大副兼侍從卜部朝臣兼俱仁仰天、神祇濃齋場仁於天、所令啓白
奈理加之銀劔於奉獻之、龍蹄於牽立豆、廟前爾奉送者奈理、又追天一事濃法
味於執行之、報賽乃使於可令發遣乃由、深久心底仁挿者奈理、一天靜謐八紘
衛護運命長久濃冥助於加賜、別天波愚息災消安穩天、壽算波松竹與利
久具身軀波金石與利堅久保之、女賜陪、義政尊廟乃加護於奉憑事、蒼天與利
高久、溟海與利深之、此狀於平介久安、介久聞食天、夜乃守、日乃守仁護幸賜陪
止申、
辭別天申久、愚息壽命長遠、除病息災乃爲爾、別天靈劔乎奉獻者奈理、

今度就御鳴動、御注進之通、則被致披露候、殊ニ今度之時儀者、以舊規申入候
間、一段公方様御驚候て、任例御太刀御馬參候間、目出□□又若君様より太
刀一腰參候間、一段寺家御祝着る一條者、就御鳴動被仰出子細候、加賀守
被承候、定可被申候、次先々御祈之様御僧一人御上洛候て、御禮等可被御申
上候由、懇ニ此御使申上候就中此御馬憑候者、傍輩所望之由候間、於是代お
さ、せ候へハ、四百疋分申候間、其分申定候て、被下人候て、御馬お可給之由

被申候可被遣候、内々憑候者、此分申候て候、兼又御マやう御上之由ニ候ハ
、我々墜力有例様風度(御マ)可申承候、恐々謹言、

七月十一日

道安(花押)

智事御寮

尙々申候御馬給度之由被申候間、御馬代且貳貫文只今渡進候、於殘分國
よて御取候へく候、人お下候間、巨細可申候、每度御茶五袋拜領仕候畏入
□□候、度々被懸御意候、祝着之至候、

〔鎌倉大日記〕

文明三辛卯七月三日多田廟鳴動、○和漢合運圖同
文ニヨリ略ス、

〔かぶ年代記〕

七月三日、多田のるうめいとら、

○コノ後、源滿仲ニ從二位ヲ追贈シ、多田廟ニ勅使ヲ遣スコト、八月十
七日ノ條ニ見ユ、

十二日、丁未興福寺阿彌陀院權大僧都永秀寂ス、

〔東院年中行事記〕

五 七月十二日、丁未今曉永秀阿彌陀院琳
舜房法印他界、八十一

歳云々、當時遂大業之節之躰、只一人計也、佛法之名殘也、時蒙諷諫之子細共
在之、就惣別愁傷無極、則遣行專房訪了、葬送日中以後也、遣行專房了、自修

文明四年七月十二日

六二三

文明四年七月十五日

六二四

南院も被遣長順房了、葬以後面々是ニ住了、

〔大乘院日記目錄〕三 七月十二日、法印權大僧都永秀入滅也、八十 因明大疏

豎義遂業躰、此躰一人相殘了、

〔大乘院寺社雜事記〕一五 七月十二日、夕立

一、阿彌陀院坊主永秀琳舜房法印權大僧都、八十一歳、入滅、於當寺因明大疏豎義遂業躰此

外無之、未代至也、可歎々々、

〔經覺私要鈔〕二八 七月十二日丁未、霽、夕立大雨下了

一、木阿云、阿彌陀院永秀法印令逝去歟、只今有葬禮、事外大勢云々、修學功定

可有之之間、門弟等多以可在事也、何日令逝去哉、不便、當年菩提院方明王

院英算法印、惠信坊宗善僧都、永秀法印及三人了、永秀者當年八十歳歟、一

歟之由勸了、

十五日、庚戌、前權大納言從一位正親町持季薨ズ、

〔親長卿記〕三 七月十五日、晴、右金吾相語、正親町一品入道頭中將公兼朝臣父今朝死去五十

云々、不便也、乍去老病近日窮迫之故云々、勿論歟、

〔重胤記〕〇歷代殘闕日七八所收 七月十五日

一、正親町一品入道御圓寂五十今日也、

〔宗賢卿記〕乙 七月十四日、後聞、今日前權大納言從一位藤原持季入道薨、

〔尊卑分脈〕藤原正親町公 實季秀、頭、三木中將、一、權大納言、

持季頭、三木中將、權大、從一、

公澄頭、右衛門督、權大、從二、

公兼頭、三木中將、權大、從二、

〔正親町家譜〕 實秀從一位、權大納言、

持季從一位、權大納言、入道空慶、

寶德三、八十一番歌合御人數、寬正四、公宴續歌御人數、同六、禁裏御會

始讀師、

公兼從一位、權大納言、入道祥空、

永正元年、二年、三年、公宴續歌御人數、

季種正二位、權大納言、從二位、權中納言、小倉實右為養子、

女子深草門右大臣信量室、大炊御門右大臣經名母、

女子上藤院公數、左大將、入道洞院公數、猶子、

文明四年七月十五日

六二五

文明九歌合御人數

持季從一位權大納言實秀男 應永廿二乙未年月日誕生、○中略、應仁元年十月十四日薨、應仁元年十月四日、文明四年七月十五日薨、八十五歲、

○持季出家ノコト、應仁元年十月四日ノ條ニ見エタリ、

二十日乙卯、大和大風、一言主祠、元興寺金堂、龍蓋寺塔婆等破壞ス、尋テ興福寺、一言主祠修造段錢ヲ奈良ニ課ス、

〔大乘院日記目錄〕三 七月廿一日、夜前大風、一言主社、并拜殿、大杉顛倒之間打破之、以外事如此例無之云々、當宮棟木秘事云々、神躰南圓堂ニ飛給云々、其時自然ニ南圓堂南方門開了、此外在々所々破損不及是非、社頭大木共顛倒了、元興寺新金堂顛倒、本尊打破之、龍蓋寺塔婆顛倒云々、爲寺務不吉事也、但文安以下所々塔婆顛倒云々、不限一所歟、

〔大乘院寺社雜事記〕一五十一 七月廿一日

一、前夜大風以外事也、當院在々所々吹破之了、御領内者共悉以召出之、

一言主社并拜殿破損無形云々、大杉二本令顛倒故也、大石動上云々、爲寺門不吉珍事云々、神主幸德井三位勘進、來八九月之間兵亂事云々、以外驚

幸德井友重ノ勘進

成就院破壞

入者也來廿四日、可有下遷宮云々、供目代來相語者也、去文安元年三月十七日未刻、大檜顛倒、御殿北方軒、拜殿南方軒破損分也、仍加修理了、今度儀（超カ）令招過云々、

成就院所々如無、御座在所一字如形相殘了、佛木倒了、重尙々隨聞付可引付之、元興寺之新金堂顛倒、新佛破損了、御間大杉檜六道以下木共伏倒云々、

廿五日

一、淨土寺一言主ニ參詣了、兩社共以遷殿ニ御本御殿ヨリ五間計去テ、東ニ北面ニ立之一ノ内ニ兩社遷殿講之、一言主北面、小社西面也、昨日下午遷宮、神主幸德井從三位友重也、古棟無爲、珍重々々、南圓堂邊ニ置之、弘法大師之時ヨリノ棟也云々、擬神躰云々、凡其邊式非只事、以外事也、可恐事也、

〔經覺私要鈔〕二八十 七月廿日乙卯、夕少雨風吹

一、自亥剋風烈吹號、增聲次第吹増テ、此草庵上大略吹破了、言語道斷次第也、仍舊在所無可居所之間、北向居了、無程夜明之間、聞所々儀以外風也云々、

廿二日丁巳

一言主社并小社ヲ遷殿ニ置ク

弘法大師以來ノ棟

將軍塚社
顛倒

岡寺塔顛
倒

東院ノ倉
經藏築地
覆吹損
修南院南
戒壇院南
ノ雜屋破
損

三十三所
ノ巡禮

文明四年七月二十日

六二八

一、廿日夜風ニ、寺中一言主社後木折打破了、將軍塚社顛倒云々、自禪定院申送云、廿日夜風前ニ自一言主火(出カ)五、南圓堂ヲ指上處、南戶開聲爲之、則此火入内了、後大風吹云々、爲實事者不思儀事也、
一、岡寺塔モ顛倒云々、万歳塔モ顛倒云々、塔風ニ顛倒事、未聞及事也、南都邊事外破損云々、

〔東院年中行事記〕

五

大風之時分雨下

七月廿一日丙辰、今曉自後夜之時分大風起、至晨朝

之時分止了、當室倉并經藏築地覆等吹損了、
修南院、南戒壇院等雜屋以下悉以破損了、諸方吹損之躰以外之式也、
一言主之未申方大杉顛倒、則御殿中程へ倒懸、其梢拜殿中間土タへ顛懸了、仍御殿悉以破損、ヤ子井地ニツク式也、拜殿モ於中間者悉以破損、東西之間少々損、北ニ傾了、彼杉自根顛之間、自葛木山飛來五ヶ石少々、刎起了、言語道斷之式也、其外東邊之大杉も一本顛了、
爰ニ有奇異之子細、昨夜卅三所之巡禮四五人、一言主拜殿西間ニ令宿之處、大風之時分、近所鳴動、彼大杉特鳴之間、令恐怖、窪弁才天之拜殿ニ令移住、一言主之邊ヲ奉見之處、自御殿御前續明三把出現、東坂ヨリ南圓堂南岸へ上

一言主社
造營反錢

反別百文

上遷宮

龍蓋寺塔
婆建立ノ
勸進

ト見ヘテ滅了、當其刻限、杉木顛倒云々、則近所鄉民等馳參之處、南圓堂南方西扉一枚開了、彼扉率爾可開之儀無之、旁以奇異也、南圓堂へ令影向給歟、爲寺門令卜占之處、八月九月之間、喧嘩鬪諍之凶瑞云々、可慎々々、可恐々々、
〔大乘院日記目錄〕 三 七月廿九日、爲一言主造營奈良反錢事、自學侶加下知者也、來月五日以前可皆濟云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

一五

七月廿九日

一、爲一言主御造營奈良反錢反別百文云々、新免神殿事、來五日以前可皆濟之由、可有御下知之旨、自唐院書狀到來、郡使持來、新免事ハ不能左右事也、

〔東院年中行事記〕

五

十一月四日丁酉、一言主上遷宮今夜云々、

〔經覺私要鈔〕

八十

勸進沙門但阿彌敬白

請欲蒙殊貴賤道俗助成、大和國高市郡龍蓋寺塔婆於建立之狀、
右謹案緣起文、當寺者天智天皇御願、觀音拂厄灾淨場也、加之卅三所根本十五大寺之隨一也、就中本願義淵僧正者、觀音大士之化身、爲施利益於末世、達子細於叡聞、建佛閣、今龍蓋寺是也、抑又稽首(勸)君者無双之巧匠、名世之化人、安

文明四年七月二十日

六二九

文明四年七月二十一日

六三〇

塔婆顛倒

置二臂如意輪觀音堂爲本尊故助五々之重厄(一、二、三)罔炳焉之利生依之五厄難男女仲春初午之日必全參詣之間追年無絕爰本願以來有塔婆然去文明四年七月廿日依大風令顛倒畢但阿深歎之憑十方檀那企建立之大願乞願都鄙上下拋小賤助大願者現世預救世觀音之加被達心中願望來世答彼助願功德恣寶他希樂仍勸進之趣蓋如件矣

文明五年卯月日

但阿敬白

〔尋尊大僧正記〕

四 文明五年五月四日

一、龍蓋寺塔婆去年七月大風吹崩了修理勸進帳昨日致加判了寺務并一乘院判形在之當寺天智天皇御願義淵僧正建立云々五龍寺之内十大寺内也云々

義淵僧正建立ノ寺

二十一日

丙辰 鴨社禰宜祐國殺害セラル

〔親長卿記〕

三 七月廿五日晴去廿一日鴨祐國爲足輕被打取云々盜人之故云々

廿九日晴長興宿禰來及夜景雷鳴雨下祐躬縣主來祐國事於祐躬私宅進入致沙汰云々不息切之時取出之處ニ觸穢之由社務申之云々可依死人之躰

之由返答了

二十三日 高野山多寶塔供養

戊午 七月廿三日

〔大乘院寺社雜事記〕

一五十一 七月廿三日

一、今日高野山東塔供養十方檀那殊更和泉塚地下人袖皮奉伽云々爲女人五十余町之善綱引之

塚地下人袖皮某奉加

〔東院年中行事記〕

五 七月廿三日戊午於高野山塔婆供養在之云々兄部

昨日參詣了

〔東寺長者補任〕

〇東寺私用集所收 文明四(三)辰 七月廿二日高野多寶塔供養有之導

師當山ノ覺勝院也

二十五日 幕府、多賀、高忠等二命シテ、青蓮院門跡領近江坂田莊、平方莊

等ヲ安堵セシム

〔華頂要略〕

十一 門主傳二十二

青蓮院御門跡領江州坂田平方兩庄同額金寺山室保富永十七箇條并砥山庄躰光寺等事早退押妨之族可被全御門跡雜掌所務若猶有違亂之族爲有異沙汰可被注申交名由被仰出候仍執達如件

額金山寺 室保富永十七箇條 砥山莊躰 光寺

文明四年七月二十三日 二十五日

六三一

文明四年七月二十五日

文明四

七月廿五日

(飯尾大和守)

元連 在判

貞譽 在判

六三二

多賀豐後守殿

青蓮院御門跡領江州坂田郡平方庄同寺用方事早退押妨之族可被全門跡雜掌所務若有違亂之輩者爲有異沙汰可被注申交名之由被仰出候仍執達如件、

文明四

七月廿五日

元連 在判

貞譽 在判

小足彌九郎

小足彌九郎殿

御入國事珍重之由内々可申旨候抑就門跡領所之儀奉書如此、御事申御沙汰可爲御本意候於國之儀被加嚴重御下知者可有御快喜候雖不始御事候一段馮恩召候由能々可申旨候尤是等子細可參申之處先令啓達候於、、、參賀候恐々謹言、

〇三〇中

八月一日

多賀豐後守殿 御陣所

青蓮院御門跡領江州砥山庄并鉢光寺等事早退押妨族可被全御門跡雜掌所務若猶有違亂之輩者爲有異沙汰可被注申交名之由被仰出候仍執達如件、

文明四

八月十九日

元連 判

(飯尾肥前守) 之種判

佐々木虎夜叉殿

佐々木虎夜叉

二十八日、^{癸亥}幕府、甘露寺親長ニ宅地ヲ與フ、

〔親長卿記〕

三

七月廿八日晴長興宿禰來有將基今日自之祐朝臣許相副

一色使^{千菊丸申}一色左京居住敷地爲上意被下之早可立云々得其意之由返答即此子細申入禁裏可被申武家云々、

八月五日晴予居住敷地事被免之由自武家被申禁裏云々即下姿參内畏入之由申入了、

攝津之祐

文明四年七月二十八日

六三三

文明四年七月二十八日

六三四

義政、會所及ビ殿舎ノ修理料トシテ、段錢ヲ備中ニ課ス、

〔室町家御内書案〕^上

一、會所并殿々修理料、備中國段錢事、爲使節令下向守護使、相共守事書旨、可致執沙汰之狀如件、

文明四年七月廿八日

(義政) 御判

(數秀) 松田主計允とのへ

勝元山崎
地攻下衆ノ
功ヲ褒

則宗一日
内ニ復
讎ス

八月大丑盡

一日、^乙八朔ノ贈遺ヲ停ム、

〔宗賢卿記〕^乙 八月大一日、八朔之儀公私停止、亂以後如此

二日、^丙畠山義就ノ兵、山城天王山ヲ襲ヒテ之ヲ取ル、守將浦上則宗等、直ニ攻メテ之ヲ復ス、

〔離宮八幡宮文書〕^〇山城

去二日於當所、山城之御敵致夜討之處、數輩討取頸、^三到來、尤神妙候、彌可抽戰忠候也、恐々謹言、

八月五日

勝元(花押)

山崎地下衆中

〔天陰語錄〕 浦上美作守壽像讚

^略〇上 洛南山崎、西國咽喉也、將軍命則宗居之、^〇七月四日ノ敵日々盡力攻之、城中力疲矢盡、失守以出、則宗不移時日鼓噪又攻之、敵皆弃甲而走、一日之中復讎者、古今未見其比也、^〇下

〔應仁別記〕^カ〇上、文ハ山名是豐西軍ヲ備後ニ擊ツコトニ、或時下野守政秀、

文明四年八月一日二日

六三五

赤松政秀
則宗等口
五位川口
ニ退ク

則宗間道
ヨリ進ミ
城ヲ襲フ

宇野上野入道浦上美作守番之時、文明四_辰八月二日夜、畠山右衛門佐勝龍寺ヨリ兵ヲ勝テ、山崎天王山へ夜討ヲシケリ、以案内者忍入ケルヲ、遅ク聞付テ、十二人討死シ、生取ニナル者モ多カリケリ、カ、リケル處ニ、下野守浦上者トモ、少々五位川口へ引退ケル、下野モ、上野モ、美作守モ、チトモ騒スシテ有ケル、美作守申様、此山下ニテ腹ヲ切ヘシ、井上ハナキカ、井尻ハナキカト申ケレハ、井上治部丞ト、井尻左衛門太郎、是ニアリト出ニケリ、此城ノ後ナトモ、責上ヘキ間道ヤアルト申ケレハ、ソレアリ案内者可申ノ由云ケレハ、井上ニハ帶タル太刀ヲ解遣シ、井尻ニハ差タル刀ヲヤリテ、殊更伊豆殿譜代奉公ノ人ナレハ、憑敷ノ由申テ、兩人先ニ立テ、銜枚ヲシテ、シケミノ中ヲ忍ノホリ、城衆口々ヲ拘トイヘ、未無案内也、剩拂曉ノ夏ナレハ、秋露深カリケリ、咫尺ノ中ヲモ知サリケレハ、足輕トモ堀ヲ乘越テ、時ヲ舉ケレハ、北ル者數ヲ知ラス、少々戰者トモヲ討取勝時ヲ作テ居タリ、希代ノ高名トソ諸人申アヒケル、御感無比類由、ウケ給リ及ナリ、仁記之ニ同ジ、應

〔翰林五鳳集〕

三十二
送行分願部

文明辛卯之夏、赤松兵部少輔公令幕下諸將、以爲三軍、其一在皇都對賊壘、

喜多野孫
三郎

太田彌二
郎畫像ノ
贊
彌二郎ノ
戰死

其二爲播備作三州留後、其三守山崎之城也、山崎丁洛之南、爲西藩咽喉也、一夫守關、則諸戎爲之糧道不通也、可謂烝關一丸也、喜多野孫三郎受兵部公之命、從山崎之軍、卜日欲以往、索言詩以餞之也、昔天山相公在襁褓之日、公之高曾祖某輔相公以安累卵於泰山也、祖某父某守節死義、公承其後、不墜家聲、單騎赴敵、署以行人、僉曰、壯哉斯行、寔名下無虛士、如公之勇爲、則凱歌計日以竦之、因賦一章云、天隱

祖翁一箭定天山、之子從軍萬百蠻、他日凱歌重入洛、鼓聲聲斷柳營閑、

○是ヨリ先、赤松政則、則宗ヲ遣シ、天王山ニ陣セシメシコト、去月四日ノ條ニ見エタリ、又太田彌二郎ナルモノ、コノ秋攝津ノ役ニ戰死セル事アリ、其所ヲ詳ニゼズト雖、姑ク左ニ附收ス、

〔京花集〕

十一 遠仲宗久居士像贊 號彌二郎、默菴弟子

天資謹原、氣宇老成、遠承清和源流、慕李揆、得唐朝第一人之譽、親入京兆幕府、類宋濂、記日本彌二郎之名、論兵略而傳箕裘業、歸佛乘而結香火盟、五年橫身於干戈、鐘動長安半夜、一朝暴骨於沙磧、潮打津陽故城、彼淺丈夫魂銷膽落、此好男兒義重死輕、紫荊無花、寓田氏兄弟之感、黃壤有壁、知惇夫父子之情、閻浮

太田幸綱
ノ嫡子

文明四年八月四日 六日

六三八

二十六春秋、顔紅髮綠、毘盧盡三千世界、月白風清、默在何處、金粟如來又再生、
遠仲宗久居士、乃太田越前守源幸綱之嫡長也、壬辰秋赴津陽之役、遂死於敵矣、余昨陪京兆府君之座、話次及之、嗟嘆莫措、於是知居士爲人也、吁可惜矣、有子尙幼、幸綱命工肖其像、求贊於余、不辭而筆云、
文明四年小春十五日 橫山景三

四日、戊辰旨ヲ鴨社禰宜祐香ニ傳ヘ、闕所地ノ事ヲ幕府ニ申訴セシム、

〔親長卿記〕三 八月四日、晴、鴨禰宜三位祐香來、闕所三ヶ所事奏聞、被申武家、無相違之由被仰出之由仰了、

六日、庚午朝倉孝景、甲斐八郎ヲ擊チテ之ヲ破ル、義政書ヲ與ヘテ之ヲ褒ス、

〔大乘院寺社雜事記〕一五十一 八月十七日

一、越前國事、今月二三日ノ合戰ニ、甲斐方打負、引退國中、朝倉打勝云々、就其寺社領共事、自學侶可申入于京都之由云々、今日寺領事尋申入之者也、

廿日

一、越前國注進、自松林院進之、供目代參申同前也、去六日府中衆、甲斐以下沒落、朝倉與合戰故也、則下方衆、坂井郡長崎庄ニ閉籠、三千人計云々、八日朝倉方衆

長崎莊ノ戰

大内氏等
兵糧運輸
ノ通路塞
ガ
亂
炎
旱
ト
兵

越前寺社
本所領半
濟
八郎加賀
ニ
逃
走
ス

西軍諸將
越前梗塞
ヲ苦ミ東
陣ヲ攻メ
シトス
義政孝景
前ヲ退カ
シムトカ
ノ

越前ハ朝
倉ノ成敗

七千人計ニテ取籠合戰、十日河口坪江等ニ亂入無正躰、一國中様朝倉方

打勝畢、大内以下西國兵糧、以越前爲通路之處、如此儀出來、西方迷惑歟、河口之内本庄、新郷、溝江、新田、依炎、旱一向不作、自余郷半分計付毛云々、云炎旱、云兵亂、旁以年貢等事、思遣者也、不便々々、迷惑不可過之、

廿八日

一、越前寺社本所領半濟之由、朝倉申入、大略御許可云々、珍事之由雜掌令申云々、今日清賢法橋中間、自越前罷上、路次無爲、本道云々、甲斐加州ニ引退云々、今度儀一向不及合戰、致計略之故云々、比興事共在之云々、爲侍不宜事也、

一、赤丸自京都罷歸、路次物念無是非、仍三乃國下向事不叶云々、西方大名日々夜會合、越前通路不叶間、旁迷惑無力、可責東御陣云々、此事公方被聞召、御迷惑之間、越前國事、朝倉方可罷退之由、被成御下知云々、希代希有事也、且如何、

九月八日

一、安位寺殿御使虎松丸、自河口罷上、國儀無殊儀云々、一向朝倉成敗也、

文明四年八月六日

六三九

文明四年八月六日

六四〇

十二日

一、北國所々年貢事注文、定使慶德、催促分所々一卷、惣目錄一卷、令書之給定使者也、

十九日

一、自寺門神人大藏令下越前國之由、興弘申之、河口、坪江、木田庄事云々、御奉書等到來歟、

興福寺神
入ヲ越前
ニ遣ス

〔大乘院寺社雜事記〕二十五 十月十三日

一、去月越前國下向神人大藏昨日罷上、自寺門河口、坪江、木田三个所事、朝倉方ニ仰遣、木田庄事ハ、中々不及是非云々、同河口、坪江事、自門跡仰遣、其返事到來、國儀十貫在所ニハ、一百疋、百貫在所ニハ、十貫、千貫在所ニハ、百貫文分、一献寂前ニ付之、於其儀無者先以不及返事云々、

孝景越前
ノ國情ヲ
大乘院ニ
答報ス

就當國之儀、預尊札候者以畏入存候、仍御領等事、子細蒙仰候、尤候、無餘儀存候、雖然就今度一亂之儀、内々公方様へ申請子細候、其上於國忠節之面々、各歎申子細候間、旁以不及是非候、如何様自是可申入候、此由可預御披露候、恐惶謹言、

十月六日

孝景判

成就院法橋御房

〔經覺私要鈔〕八十 八月十日、齋

一、楠葉元次男申云、朝倉彈正左衛門打入坂井郡長崎以下云々、元次弟堂家、只今罷下申云々、實否如何、

十四日、齋

一、越前國合戰事、朝倉打勝之間、入府中由、楠葉申之、實儀如何、

十七日

越州合戰事、甲斐打負之間、朝倉如所存成ト之由、自所々申之、神妙、年久令知音之間、可祝着事也、

十九日

一、楠葉入道語申云、寺門兩使可罷上之由、令注進云々、又或者云、甲斐八郎年少者也、令生涯歟云々、是風聞說歟、

廿日

楠葉入道罷上南都歸來云、松林院自北國注進ニハ、下方十八頭一族者、自

十八頭一
族

八郎自殺
ノ風聞

孝景府中
ニ入ル

文明四年八月六日

六四一

近江ニ没
落ノ風聞

文明四年八月六日

六四二

今月七日朝倉責之、然而同十二日マテハ兩方牛角合戰云々、朝倉勢ハ七
千計甲也、所立籠勢ハ三千計云々、於甲斐黨者、近江進没落歟云々、
廿一日

一、東南北面參内府御方申云、甲斐黨大略京都へ罷上云々、眞偽如何、
九月二日

一、武友子武盛吐田菖蒲池、松宿院、北國事相尋之處、去月廿日比申送様ハ、朝
倉打入坪江河口間、甲斐方削跡了、仍先隱忍之處、如元可在庄之由朝倉申
間、堪忍由申上云々、

〔經覺私要鈔〕

十七

文明四年九月歟、越前事、朝倉方打勝、於甲斐者悉出國逃亡云々、希代事也、
仍朝倉爲守護分、先代未聞事歟、隨而楠葉新左衛門尉罷下間、祝着旨遣之
由仰遣了、爰楠葉事、有朝倉方儀由雖風聞、日比忠節異他、今何可思捨哉、由
存之間、相待一左右之處、一向年中無音、○中略、細呂宜年貢、抑楠葉之儀、依
何事如此令向背哉、不審々々、

〔朝倉英林宗滴〕

楠葉元次
孝景ニ屬
ス下ノ説

義政ノ感
狀

越前國凶徒甲斐八郎以下没落云々、連々計略合戰、尤神妙、彌殘黨等可加誅
伐候也、

文明

八月十五日

慈照院殿御判

朝倉彈正左衛門尉殿

越前國凶徒甲斐八郎以下没落之由、併忠義神妙候、猶以殘黨等不日可被加
誅伐候、仍成(被罵方)下御内書候也、恐々謹言、

八月廿三日

勝元御判 ○本書宛
名ヲ闕ク、

〔西野文書〕

前○越

軍勢甲乙人等濫妨狼藉事、令停止畢、萬一寄事於左右、有違犯輩者、可處嚴科
者也、仍狀如件、

文明四

八月十六日

(孝景)
(花押)

今泉刀禰

〔鎌倉大日記〕

文明三辛卯、朝倉英林越前國下向、退治甲斐太郎、
(八カ)

文明四年八月六日

六四三

孝景ノ禁
制

文明四年八月七日

六四四

○是ヨリ先、孝景八郎ト越前ニ戰ヒ、敗績セシコト、去年七月二十一日ノ條ニ、越前齋江及ビ新莊ニ戰ヒシコト、八月二十四日ノ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

七日、辛未前權中納言從二位阿野公熙西陣ニ薨ズ、

〔公卿補任〕二十四 前權中納言從二位藤公熙、八月七日逝去於敵陣、

〔公卿補任〕 參議正四位下藤公熙、父故權中納言實治卿、母、○諸家傳ニ、應永

リ、享德元年壬申月日任參議、左中將如元、○阿野家譜ニ、二月廿五年誕生トアリ、

從三位、○以上二年癸酉三月二十五日兼備後權守、四年乙亥三月二十八日任權

中納言、康正二年丙子四月九日敘正三位、三年丁丑四月二十三日辭、七月十一日

還任、季遠長祿二年戊寅三月二十四日辭、○以上四十一、從二位ニ敘セラレ、書

入ニ寬正六年正月五日トアリ、且文正元年子去年臨幸室町殿已

來、候御留守御所、十二月日可參之由被仰之處不參、仍准敵軍同意解却、○以

二十

〔尊卑分脈〕 藤原公季公流 實治權中納言、

公治僧正、東院

世系

官歴

公熙權中、參木、中將、

良春僧正、

九日、筒井順永、稅錢ヲ奈良ノ民ニ課ス、

〔大乘院寺社雜事記〕一五十一 八月九日

有德錢

一、筒井、奈良中有德錢懸之云々、

十日、甲戌幕府、石見出羽太祐ノ河上堯祐ヲ援ケテ、河上左馬助ヲ討チタルヲ褒ス、

〔萩藩閥閥録〕四十三 出羽源八

今度河上左馬助事、石州邇摩郡凶徒等同意之間、加誅伐之時、合力河上次郎

三郎堯祐之旨注進到來、尤神妙、彌廻計略、可被抽戰功之由、所被仰下也、仍執

達如件、

文明四年八月十日

(飯尾爲信) 判
加賀守
(飯尾之種) 判
肥前守

出羽(太祐)孫次郎殿

文明四年八月九日十日

六四五

十一日、乙京極政高部下今井秀遠ノ近江鎌刃城ノ戦功ヲ賞ス、

〔今井軍記〕秀遠備中守、法名成弁、文明四年八月十一日、堀次郎左衛門城合戦、

秀遠ノ戦功

多賀高忠

證判ヲ與

恩賞地

多賀蓮臺坊、赤尾左京亮伊藤民部丞、其外數十人頸を取、兄弟同名一族郎等

疵をうぶむる忠節をいとし、何れ御感御書、多賀豊後守高忠證判等有之、忠

賞として、法勝寺(近江坂田郡)十三條郷の地頭職、同十五條郷領家方、忍海庄本所方、神郷

開發して下さる、八郎五郎箕浦庄地頭職、朝妻庄家方、法勝寺十三條郷家方

下さる、其外同名一族衆何れ御給忍申沙汰せしめ畢ぬ、

大内政弘、内藤弘矩ヲ長門守護代ト爲ス、是日入府ス、

〔長門國守護代記〕號法泉寺殿、三十七、大内左京大夫殿政弘、

守護代内藤盛世

小守護代

藤武盛

小守護代南野大膳進盛鎮

其次守護代内藤中務丞武盛

小守護代南野大膳進盛鎮

其次守護代内藤彌七弘矩後任改、彈正忠

文明四年壬辰八月十一日、以騎馬百餘人初入府、

龜山社參
二宮參籠

小守護代南野大膳進盛鎮

其次厚安藝守

其次伴田入道宥盛

其次永富因幡守嗣久

文明四年壬辰四月八日入府

同御代、一二龜山御社參、同十五年九月十六日

二宮七一七日御參籠、御役人御幣右田彌三郎、御太刀杉七郎、

御騎馬五番各如木、仍三社所領御寄附焉、

小守護代永富彦左衛門尉貞嗣

十三日、丁丑幕府、三好式部少輔二命シ、阿波國內ノ犬神ヲ使フ者ヲ逮捕セシム、

〔阿波國徵古雜抄〕美馬郡口山村緒形政右衛門所藏文書

阿波國中、使犬神輩在之云々、早尋搜之、可致罪科之旨、相觸三郡諸領主、堅可被加下知之由候也、仍執達如件、

文明四

文明四年八月十五日

八月十三日

三好式部少輔殿

(飯尾カ)
常連(花押)

六四八

犬神

〔藝苑日涉〕

二十 狗神

余毎聞南海道諸州人説狗神之事曰、奸險之徒能處事之、則其所嫉怨崇之、靈於狐狸、或見它人金錢衣服百物件、心愛之、則附其人爲祟、其神傳至子孫、雖自厭惡、終無如之何、是以鄉里不肯與成親、迨近來其種漸絶、然所在有人不敢侵其故宅之地者、蓋犬靈之類耳、

〔中井積善國字牘〕

予モ四國ノ人ニ近附アリテ、ツノ語ヲキケリ、ナルホト四國ニハ、今ニ犬神ノ家トテ、國人ノ賤ミテ昏娶ヲ通セサル素性ノモノ往往ニアリ、勿論ツネノ人ニテ、恠シキコトカツテナシ、ツレニ異説ヲ云立ルハ、皆妄傳ナリトイヘリ、尤然ルヘキコトナリ、上略

十五日、乙、百首當座和歌、近臣ニモ御題ヲ賜ヒ詠進セシム、

〔親長卿記〕

三 八月十五日晴、依召參内去十一日參内之時、今日召具元長各祇候、近臣於御前給御題、其外直垂祇候、於番衆所給御題、

月百首御製

十五夜月

〔紅塵灰集〕

月前霞文明四年八月十五日

かきめともさやにみるらし春の夜此月よ至上の天津乙女を

月前郭公

聲或さへさしを志のむし時鳥をうとをみえて月よ鳴なり

月前女郎花

露ふくまざの野の秋此女郎花月をめて、やをとりとるらん

月前落葉

月此をる心ほくくを洒らし吹木のまほららハ紅葉ちる夜を

寄月見戀

なまどくく月よをあら勢面つけをうその空よを戀まるとるらん

山月

名ふしおふ今夜の月を我みてまはや久あさ此天の香久山

月前竹

なうめやる里をえるうまくれ竹此をる葉を山と出る月う聆

興福寺六方衆蜂起シ、吉祥院領檜垣田ノ事ニ依リテ、大西某ヲ攻メントス、筒井順永之ヲ調停ス、

文明四年八月十五日

六四九

〔大乘院寺社雜事記〕

一五十一 八月十六日

一、昨日六方蜂起、大西發向廻文事云々、吉祥院領檜垣田成違亂故云々、廿五日

一、昨日學侶六方大集會、於四恩院在之、馬借事并檜垣田大西間事云々、九月四日

一、明日大西發向延引、筒井内々申請于六方云々、七日

一、六方便節英寬順宣參申、大西發向事、來十三日必定、十日沙汰八卅一人令下向市本、十二日惣六方於森屋一國中軍勢可有著到、就其ハ十市以下可致忠節之由、御坊八方可有御下知、就中長谷寺事、大西方可合力歟之由、風聞驚入云々、同可有御下知云々、長谷寺者相語慈恩寺故歟云々、不可然旨、今日自六方も被申遣長谷寺云々、大方今度寺門より此題目取沙汰、不得其意事也、爲小林分對大西可申所存事也、相語寺門條、且ハ練達事也、筒井思案故歟、且如何云、寺門云、筒井一向恐成于十市風情也、十市又近年極成了、寺門作法衆徒國民等振舞、旁以無心元、一言主事、九十月寺門凶之由ト

長谷寺大
西某二與
開ストノ風

申云々、千万可恐々々、

八日

一、就大西進發事、十市、古市、豐田、長谷寺成奉書、對寺門可致忠節之由趣也、

九日

一、自六方書狀到來、大西發向事、筒井取申子細在之間、十三日進發、先以延引之、定而重而可令申云々、得其意旨以口狀申專當了、延引珍重事也、寺門可失面目事也、就中十市以下所々御請到來、少々遣六方便節方了、

十日

一、筒井代官進之、大西發向事、大略可爲無爲云々、珍重旨仰了、

十六日、庚辰當座和歌、御題ヲ賜ヒ、近臣ヲシテ詠進セシム、

〔親長卿記〕

三 八月十六日晴、參内、直衣、參御前、中略次仰云、時正之中也、可

被遊十戒歌云々、即被下御題、

御製敦生戒、不新大納言、教秀戒、廣橋大納言、綱光戒、予、不倫源中納言、雅行、酒、勸解由小路前中納言、不說四衆、飛鳥井、右兵衛督、雅康、不妄語、戒、菅宰相、顯長、不戒、白川、民部卿、忠實、不自戒、勾當内侍、不妄語、戒

時正中
十戒歌

文明四年八月十七日

六五二

冷泉大納言爲富雖爲御人數稱所勞之由不參、臨期右兵衛督不諱寶戒、詠進之政爲朝臣令祗候、依所勞不詠之、且無念歟

〔紅塵灰集〕

不殺生戒文明四年八月十六日正中世當時次

いそし水神をいさる我をまつころ法をかはら密心なまらせ
不邪姪戒

二みちにかよふきくるしいましを此心我分そなまらせせん

武藏越生季信、越生安樂寺天神社ヲ修造ス、

〔新編武藏風土記稿〕

百七十一 小杉村 天神社

練札武藏國入西郡越生郷恒弘名之内、岩峯山安樂寺天宮修造之事爲越生下野守季信願主再興畢、然者現當二世、天地圓滿、殊子孫繁昌、殿内安全故仍如件、

文明四歲壬辰八月十六日

越生下野守季信
于時聖天梅庵梵菊
大工左衛門四郎信家

十七日、辛巳正四位下源滿仲ニ從二位ヲ追贈シ、勅使ヲ多田廟ニ遣シ、之ヲ告グ、

宣命

〔多田院文書〕

○四攝津

天皇我詔旨須其贈尊位者、朝儀乃恒例、泉途能追賞奈、故正四位下行左馬頭源滿仲朝臣者、清和苗胤、大樹元祖、達武略、通和才勢、爰去月朔日爾、彼廟鳴動志、度三日、利、無休至、連日、止、聞食須、其慎不輕須、叡情無聊志、彼朝臣者、内存忠義志、外示靈威志、告不祥豆、擁護朝廷志、拂災難豆、撫育邦國須、故是以從二位於贈賜伊、令慰幽儀給、陪、令受朝獎豆、何莫冥助卒、夫妖不勝德須、仁能除災久、商太戊以桑穀昌陪、宋景公以熒惑壽阿、然則轉禍作福志、變凶爲祥豆、寶祚延長爾、武運悠久志、四海靜謐志、兆民歡娛勢、給陪、天皇我詔旨於聞給止、宣、
文明四年八月十七日

宣旨

故正四位下源滿仲

宜敘從二位

中務治國家武威感鬼神、風雅忠進無私、貞順達和、宜授榮爵、照朝章、可依前件、主者施行、

文明四年八月十七日

文明四年八月十七日

六五三

文明四年八月十七日

六五四

三品中務卿邦康親王宣

中務大輔

中務少輔藤原家博行奉

正二位行權大納言(柳原)資綱

正二位行權大納言(高辻)兼右近衛大將臣公敦

正二位行權大納言(中院)臣繼長

正二位行權大納言(冷泉)臣通秀

正二位行權大納言(近衛)臣爲富

正二位行權大納言(勸修寺)臣政家

從二位行權大納言(廣橋)臣教秀

從二位行權大納言(大炊御門)臣綱光

從二位行權大納言(德大寺)臣信量

權大納言正三位(庭田)臣實淳

正三位行權中納言(武者小路)臣雅行

正三位行權中納言(資世)臣資世

正三位行權中納言(清水谷)臣實久

正三位行權中納言(勸修寺)臣經茂

正三位行權中納言(烏丸)兼左衛門督臣益光

正三位行權中納言(中御門)臣宣胤

正三位行權中納言(松木)兼兵部卿臣宗綱

正三位行權中納言(花山院)臣政長等言

制書如右、請奉

制附外施行、謹言、

文明四年八月十七日

制下

月日辰

從四位下行掃部頭兼大外記造酒正博士中原朝臣師富

右

中

辨(廣橋)

兼

顯

關白左大臣正二位(三條政嗣)朝臣

右大臣正二位(九條政基)朝臣

內大臣正二位(鷹司政平)朝臣

文明四年八月十七日

六五五

文明四年八月十七日

正三位行式部大輔(唐橋)在治

贈敘從二位源滿仲

制書如右件到奉行

從四位下行式部少輔在永

大錄

少錄

少錄

文明四年八月十七日下

〔多田院文書〕

五

就多田御廟鳴動

贈位

勅使

藏人大內記兼文章得業生菅原朝臣(唐橋)在數

就多田御廟鳴動贈位勅使參向之條之事

一、就勅使九條藏人參向宿送事上下自丹波可到攝津多田

勅使發向
丹波津經
到攝津

贈位ノコ
トヲ諸公
ス卿ニ諸問

一、諸關勘過事

一、人數事 勅使之外十人省略之

一、於御廟所用意事

御廟前可立案可爲其前可敷小文疊一枚勅使座

一、上下十一人朝夕用意事下著并上

〔親長卿記〕

三

七月十日晴參內

自廣橋大納言許可參之由申送之故

也、命云、多田御廟滿仲朝臣、今月兩三度有鳴動、鳴動事雖及度々、今度之儀超

過先蹤云々、可有贈位歟、可尋申諸卿一條大間、關白、政嗣、日野、前內大、之由可

仰元長云々、何様各可被計申之由、可申旨返答、仰詞即注之、見廣亞(廣橋綱光)相了、在別

十三日晴、鳴動勅問事、元長向前內府、右大將、中院等仰之、

十七日、細雨下、鳴動勅問事、申關白了、消息、

八月一日晴○中略、長興、雅久ト官務職ヲ爭フコト、入夜參內、御祝之後、更被

召御前、條々有仰事等、多田鳴動勅問、未人々不申歟之由、有御尋申子細了、

二日晴、早旦詣廣亞相許、乍立面謁、多田鳴動勅問事、依輕服辭、非神事辭退無

謂、重可有存知之由、昨日仰旨仰了、明日且可奏聞、於武家宣下之事等申沙汰

文明四年八月十七日

消息宣下
トナスベ
キヤ否ラ
幕府ニ諮
ラル

之由仰了、

三日晴、參内、直衣、人々申詞關白、日野前内府、右大隨身、就先度申次以民部卿可申歟之由談廣、予已爲上姿只と可奏聞之由申之間、參御前奏聞、少々讀進了、仰云、於位階者、大閣申詞到來之後、可被定仰宣下事、爲武家可有申沙汰歟、又不事行者、可爲消息宣下歟、可申談武家之由、有仰、仰兩傳奏新大納言、廣橋大了、即參武家申之、御座泉殿、仍無御返事、明日可申云々、

四日晴、及晚參内、宣下事、可爲陣儀、元長可申沙汰云々、

七日晴、陣官人來、來十七日宣下、御訪五百疋不被下者、不可參之由申之、三百疋分加問答了、

九日晴、下姿參内、奏多田贈位事、今日爲御取亂、明日御衰日也、明後日子上姿可參内云々、

十一日晴、晝以後參内、直衣、新大納言教秀、廣橋大納言、綱光、等祇候、各下條々談奏聞、

一、可被定故滿仲元正四位下朝臣位階事、

一、雖可被副位記於宣命、請印之儀、當時不叶、然者可被副案文、但案文陵遲之

位階從二
位ト決ス

由、大閣被申、但雖爲幽玄之例、應永廿二年、同三十三年贈位宣下、階也、宣命許云々、可爲時宜事、○中略、親王御名字、草進ノコトニカ、ル、草

仰位階事、今度公卿等、關白、右大將、從一位、前内府、勝光、新大納言、從二位正、廣橋大納言、予等申二品了、中院大納言、就御佳例、可爲正三位、故貞氏、從五位、歟云々、就多分之儀奏、可爲從二位之由、叡慮也、但就大樹之先規佳例、可爲三位歟、宜申談武家云々、位記事副案文事、無先規者、雖爲幽玄之例、宣命許可進云

々、○中略、親王御名字、ヲ、ノコトニカ、ル、仰兩傳奏、猶正二位可然之由存之、爲二兩條事、○親王御名字、ノコトニカ、ル、仰兩傳奏、猶正二位可然之由存之、爲二

品者、正二位可然歟之由、廣橋大納言申之、重奏聞、仰云、只可爲從二位云々、兩人參武家申之、二品之由、就諸卿多分之意見、叡慮又無相違之條、畏入之由被申之、予書仰詞遣兩人了、案在次就贈位、路次已下寺家儲事等一紙、注進廣亞相、申遣奉行許云々、

十二日晴、入夜中院大納言來、今日以書狀有相尋事、依予物忌、不及返事之間、不審之間來云々、面談位記事、昨日御沙汰之趣相語之、彼卿申云、故一品給位（一本ナシ）記之時、請印不叶之間、内々送之由申之、不及請印位記送了、於臨時者多分不

位記請印
ニ及バズ

文明四年八月十七日

六六〇

及請印歟、隨而康正三年記六之趣陣之、請印儀不見存合之由申之、然者猶可

然之由相談、暫閑談之後歸了、
多田廟贈位諸卿申詞
十七日、天晴、今日有多田廟所源正四位下、贈位宣下、并親王宣下等事、件贈位

贈位諸問

事、去月十日可申沙汰之由、可仰元長云々、先書仰詞、
就故滿仲朝臣廟所鳴動事、可有贈位否、若有贈位者階級同可被計申矣、
私申、鳴動雖及度々、今度事無比類之由、注進之趣、依被公武驚思食、及此御沙

汰候、内々得御意候哉、
折宿紙書之、各見廻了、或以書狀送之、或元長持向之了、
遠所南都若藏 近邊人々

諸卿申詞

一條兼良

大間一條兼良公、南都御

入道左馬頭源滿仲朝臣遺廟鳴動事驚入候、但近日天下擾亂、爲彼子孫確執
之間、祖靈驚覺、頗與時相應候哉、次贈位事、出家以後儀、凡不打任子細候歟、其
上位記請印不可事行候、案文還文聊等候哉、其間事、可被如何哉、所詮廟所鳴
動事者、連綿儀候、多武峯鳴動時者、氏長者捧告文、致祈謝之、仍以彼例、先爲源
氏長者、可有懇祈之條、可然歟之由、爲勅定可被計仰之條、可爲如何候哉、以此

多武峯藤
原鎌足廟
鳴動ノ時
ノ例

旨内々可令披露給候也謹言、

七月廿三日

御判

半折御狀也

二條政嗣

關白 二條政嗣公

就故滿仲朝臣廟所鳴動、贈位事、於階級者雖三品勿論候、以一段之儀、可被贈
從一位歟、宜在時宜矣、

日野勝光

日野前内大臣 勝光公

就多田廟所鳴動、可有贈位歟、然者可爲何位哉事、

彼鳴動先例雖爲連綿、今般震聲超常篇、連日相續、過先蹤云々、旁以謹慎不輕、
仍彼朝臣者、近爲貞觀之苗胤、今崇大樹之元祖、爲宥靈威、贈位之御沙汰、定可
呈玄應乎、次階級事、於三位者爲普通之昇遷、以二品可被朝獎歟、宜在時宜矣、

折紙也引合、

右大將(三條) 公敦卿

就多田廟堂鳴動、可有贈位否、若有贈位者、階級同可計申之事、

凡依如此子細、或被授神號、或又贈位事、古來之通規也、殊法躰以後、被贈官位
之儀、頗雖邂逅、其例不求他家者乎、然者今度極位尤可宜候之歟、當座短慮之

三條公敦

文明四年八月十七日

六六一

一言、不如職之詳議而已、

同前紙也

中院通秀

中院大納言 通秀卿

就多田廟堂鳴動、可有贈位歟、將又可爲何位哉事、

今般鳴動、越先蹤、歷三个日、及十餘度云々、大凡物不得其平則鳴、尤可有謹慎乎、仍且爲宥靈威、且爲得感應、及贈位之御沙汰之條、有何難哉、次位階事、於彼御流、有贈三品之佳例、若可協准據歟、但於階級之高下者、可依朝獎之淺深也、宜在時宜矣、

強紙折之書之、

勸修寺教秀

新大納言 教秀卿

就多田廟堂鳴動、可有贈位否、將又可爲何位哉事、

彼鳴動者、既雖有先蹤、今度三个日連續、殊震聲甚云々、恠異之至、最有怖畏歟、仍有贈位之勅賞者、可協靈春之素意哉、然者攘災孽之不祥、可有鎮護之感應者乎、於位階之高下者、從二位正三位之間、可然候歟、猶可在時宜矣、

折引合書之、

廣橋綱光

廣橋大納言 綱光卿

就多田廟所鳴動、可有贈位否、將又可爲何位階哉事、

彼廟者、清和之御後、大樹之元祖、異于他、然今般鳴動超先規云々、謹慎尤不輕、上下無安息之意、惣別抱危廢之思、兼有贈位之賞者、定協感應之嗟哉、於階級之尊卑者、彼御流有贈三位之近例、尙爲二品歟、短慮難覃、宜在時宜矣、

予申詞

就多田廟所鳴動、可有贈位歟否、將又階級可計申事、

凡依靈神之尊敬、被贈加階、就古人之怨瞋、被贈一官者、古之通法、今之流例也、彼鳴動之恠異、爲被宥申、贈位御沙汰、何子細候乎、階級之高下事、雖可依例、二品可然候歟、宜在時儀矣、

已上兩人折強紙書之

就人々申詞、去十一日被申談室町殿訖、二品從二勅賞可畏入之由被申之、仍

今日治定了、爰今度可爲宣命許歟之由、兼有其沙汰、然者一條大閣可被副位贈位宣命計之事記、請印不可叶之由被申之、仍勸見先規之處、應永廿二年贈位、兩度宣命許也、位記不及請印事雖不被副位記、不可有其難歟、但中院故一品贈位之時、於臨時之儀、不請印送

贈位ノ位
記ヲ副ヘ
ズ

文明四年八月十七日

六六四

勅使參向
ノ先例

之云々、且又康正三年二月廿七日義量贈位贈官宣下之時、不及位記請印、教
卿于時上卿、分明之上者不及請印、可副位記云々、仍仰內記了、
彼記出現、抑參向廟所勅使事、少納言多分之例也、被仰少納言長直朝臣之處、所勞云々、
勅使事仍中務輔、并大內記參向例相尋之處、如此、

就贈位宣命、中務并內記參向例、無所見候、但貞治二年八月十四日源貞氏
贈位宣下、少納言不參、六位藏人勤代、輔不參、外記爲代、如此注置候、若藏人
參向候哉、可得御意候、恐々謹言、

八月八日

宗賢

就贈位宣命、中務并內記參向事、於中務者無所見候、應永卅二年十二月十
七日贈位宣下、大內記爲請印、令持參宣命於本所云々、

八月九日

大外記中原師富

就贈位宣命、中務并內記參向例、引見候之處、不分明候、可得御意候哉、

八月八日

雅久上

今度勅使事仰大內記兼將監六菅原在數了、

御訪錢

人々御訪事、

〇一一

勅使參向
二就武
家ハ沙

一、上卿中院大納言通秀 參百疋
一、辨藏入右少長 參百疋
一、外記賢親 五百疋康純依所勞、難參陣之由申之、仍俄被還任賢親、無御訪加增者、裝束等難治之、由申之、仍二
加百疋

一、陣官人 三百疋
一、菅原在數 三百疋
一、大內記宣命草進之故也 三百疋
一、參向勅使大內記菅原在數 千疋
一、掃部寮 三十疋軾用也、雖加問答、無爲之由申之時者、以私力進之、今者難叶之、由申之云々、
一、同寮官御訪 二十疋
一、木工寮 二十疋無可敷陣疊之仁、仍下行云々、
已上

此外三十疋、夏御裾被沙汰置公物、各申出藤中納言不返進之間、遣之
召出了、

參向勅使用意事等、書遣武家奉行、一紙如此、
就多田御鳴動、贈位勅使參向條々事、

文明四年八月十七日

六六五

文明四年八月十七日

六六六

一、就勅使參向宿送上下事九條藏人大內記、自丹波可到、攝津國多田、

一、人數事、勅使之外十八人省略之、

一、諸關勘過事、

一、御廟所用意事、

御廟前可立案可爲其前可敷小文疊一枚、勅使座

一、上下十一人朝夕用意事下著并上洛之日事也、

如此注之、遣廣亞相許、遣奉行飯尾美濃、

宣下

贈位宣下

申刻許用脚到來、下行諸司了、予依召今朝參內昨日仰長與宿禰事、有被直也、即

令退出、令著裝束、於元長令同道參內予直衣、元長束帶、元、上卿中院大納言、於殿上部屋

著束帶、刻限可始陣儀之由奏聞元長申之、即上卿著陣、與元長進出昇陣之時、懸膝忘失、有若亡也、

仰仰詞、就故滿仲朝臣廟所鳴動、可贈從二位宣命令作勸修寺教秀(綱光)、

件仰詞於予所存者、廟所鳴動事、不可載歟、新大納言廣亞相等命云、可被載

宣命之上者、可仰々詞候、仍如此、

次上卿召內記少外記清原賢親參陣、勲內記史等代、賢親參陣著軾、上卿仰宣命事、內記持參宣

命草件宣命草并清書位記等、自大內、上卿披見之、如元納筥、令持外記勲內進命草、記在數許送予許、遺少外記許了、

散狀書式

弓場、元長進出、給宣命草、付內侍奏聞自寢間、被返下、進出返上卿、上卿取替清書奏之、又奏聞、被返下、上卿著陣、給內記、可傳遣使之由、有命、外記內々於傍遣大內記菅原在數了在數異、跡見物密々遣之了、○中略、親王宣下ノコトニカ、ル、次ノ條ニ收ム、

散狀進上御所書樣

贈位宣下

上卿

中院大納言

辨

元長○中略、親王宣下散狀ノコトニカ、ル、次ノ條ニ收ム、

進武家散狀付廣橋大納言了、參向勅使可書載之由、廣亞相命之間、如此載之、

贈位宣下

上卿

中院大納言

辨

雖爲今案、參向之人、不可有御存知之間、注入也、

文明四年八月十七日

六六七

文明四年八月十七日

元長

內記

菅原在數

十九日、甚雨下、贈位事今日可參向多田之處、依用脚未下延引、

〔宗賢卿記〕

乙 七月小一日、後日聞之、攝州多田院御廟鳴動云々、委見十日、

十三日、前官務長興宿禰來語云、攝州多田院御廟近日鳴動、仍甘露寺右少辨

元長爲奉行被尋例、祈謝贈位之間、可宜歎云々、予家記等紛失之間、不分明之

由令申畢、

十九日、官務外史師富朝臣來語云、去比攝州多田院御廟、滿仲、三个日中十五

个度鳴動、仍有勅問諸所云々、

一條（兼良）太閤、二條（政嗣）關白、右大將（三條）權大、中院大納言、通秀、新大納言、教秀、廣橋

大納言、綱光、卿、按察前中納言、親長、等有勅問云々、

故滿仲朝臣廟鳴動之間、可被贈位階歟、然者可爲何樣哉、可計申之由云々、

寬正五年十一月五日愚記云、攝州多田院御廟、自去月廿日至廿八日、連日

鳴動、自室町殿被進御劍御馬等之由記之、

參向延引

甘露寺元長奉行トナリ前例ヲ尋ヌ

三箇日十五度鳴動

寬正五年ノ例

足利義量贈位ノ例

贈位宣下、上卿中院、通秀、職事、甘露寺元長

八月大七日、按察前中納言親長被所望贈位宣下次第紛失之間、注康正三年

二月廿七日長得院贈左大臣從一位、予少納言參陣記遣之、攝州多田御廟可有贈位宣下云々、

或說、來十七日贈位、立親王等宣下可爲同日云々、立親王ノコト、

十三日局務大外記師富朝臣來語云、來十七日宣下事、二蔭外記康純赤痢以

外之間、不及上洛之由、康顯以書狀申上、此上者以賢親可被推任少外記、可還

補之由云々、

十四日局務來、以賢親可被任外史之由治定、然問於御訪者五百疋可有下行

云々、先領狀申畢、

十七日、贈位宣下事、故正四位下、行左馬頭、源上卿、中院大納言、通秀、職事右少

辨元長、少外記清原賢親今日任等參陣之、兼日傳、按察前、其儀上卿著陣與

座、職事來仰々詞、故正四位下、左馬頭、源滿、退、次上卿移着外座、令敷軾、召內記、

次內記代清原賢親參軾、仰可作進宣命位記之由、仰詞、次內記進宣命、草位

記等、入篋、次上卿披見畢、令持內記、就弓場代奏聞之、即被返下、內記即進清書

宣命、取出草位記、上卿重奏聞之、被返下、次上卿歸著陣座、以內記進宣命、清書

位記、次上卿召內記、少納言不參位記之故也、次內記代賢親參軾、給宣命位記

文明四年八月十七日

文明四年八月十七日

六七〇

等退出、即渡大内記次召内記代賢親令撤筥、○中略、親王宣下ノコト

一、今夜無外記役、爲内記史等代參陣、依初度出仕、御訪五百疋被下行之、

一、多田御廟贈位宣命、大内記菅原在數、職人左近將被付千疋之足、明後日

日可持向之云々、然者廿一日可下著歟、亂中敵依塞通路、勅使通丹波國、野細川

就贈位宣命、中務并内記參向之例、可被注申之由、被仰下候也、恐々謹言、○中略、宣命前掲

八月八日

元長

大藏卿也如何
宮内卿殿

就贈位宣命、中務并内記參向例無所見候、但貞治二年八月十四日源貞氏
贈位宣下、少納言不參、六位藏人勤代、輔不參、少外記爲代、如此注置候、若藏
人參向候哉、可得御意候、恐々謹言、

八月八日

宗賢

故大外記師郷朝臣記

應永卅二十七贈位宣下、上按察大納言資家、奉行頭右中將基世朝臣、（痢脫分）
大内記爲清朝臣、外記師野、右大史盛久、（足利滿詮）以下參陣、此贈位者、小川殿思

（梶井門跡義承）
人當座主以下母儀也、仍無位一一誠子被奉贈從三位云々、則大内記持參

宣命歟
詔書於本所云々、

○多田廟鳴動シ、義政使ヲ遣シテ之ヲ祭ルコト、七月十一日ノ條ニ見

エタリ、

貞常親王ノ第二王子寺仁和ヲ親王ト爲シ、高平ト名ケラル、

〔親長卿記〕三 八月四日晴、及晚參内、○滿仲贈位宣下ノコトニ次仁和寺

宮親王宣下事、可被付行、可申沙汰之由、廣亞相命之、

六日、夕立下、長興來、種々言談、御室御俗名等、悉可注給之由、仰綱所了、

十一日、晴晝以後參内、直衣、新大納言、教秀、廣橋大納言、綱光等祇候、各下條々

談奏聞、○滿仲贈位ノコトニカ

一、親王御名字事、高平、雅、通義前管大納言、益長草進之、

親王御名字事、高平可然、雅明事、爲親王御名字之由、予申出之、引見御系、仍

被定高平了、

十七日、天晴、今日○中略、源滿仲贈位宣下ノ事并親王宣下等事、○下略、上

次上卿更出宣仁門代歸著陣、與、元長進出、下親王御名字、御室也、式部卿宮御

文明四年八月十七日

六七一

文明四年八月十七日

六七二

庭田雅行
ヲ別當ト
ナス

申出檀紙於殿上元長書御名字二字、高平、今度依仰、前營大納言、上卿結申、職
事仰々詞、可爲親王、仰了退入、次上卿移著端座、召辨、元長參進軾、被下御名字、
元長結申、上卿被仰々詞、辨退入、著床子座、取副券於召史下之、史不及披見退
入、不可也、辨起座、給券於進出著軾、仰云、權中納言源朝臣、可爲親王家勅別當
上卿即被仰辨、元長承仰退入、又著床子座、仰史、上卿起座事了、勅別當不參、無
親族拜、無本所儀、近代例也、次參賀御室、御座聖壽寺、有御對面、御童次歸畢、
親王宣下、親王宣下、公卿下書之、予今案也、於親王宣下者、公卿之由、
公卿

中院大納言

辨

元長

〔宗賢卿記〕

乙 八月十七日、○中略、源滿仲贈位宣下事、次被行親王宣下、職
事右少辨元長參軾仰々詞、高平、可爲、次上卿召右少辨仰々詞、被下名字、折紙歟、辨著
床子座、召史代賢親仰之、折紙、此間上卿退出畢、賢親傳名字折紙於主殿頭
雅久、官務晴富宿禰在敵方之間、仍親王宣旨本所持參事相語賢親爲史代持

親王宣下
ノ詔書

細川勝元
第借住

中原康純
史役ヲ望

舟橋宗賢
顯ト中原康

參事、依無先例、雖令故障、禁中之儀、外記史自他爲代事、連綿之上者、今日既勤
代之間、宣旨持參之儀、有何事哉、准宮并關白宣下等、中務輔不參之時、六位外
記爲代、勅書詔書持參事有之歟、仍令領狀畢、

高平親王 御室也、式部卿親王第二宮也、

右少辨藤原朝臣元長傳宣、權大納言源朝臣通秀宣、奉勅宜爲親王者、

文明四年八月十七日 造東大寺次官左大史小槻宿禰晴富奉

入夜少外記賢親爲史代持參宣旨、以眞光院借住之在所、屋敷、大也、被模門跡、

一、昨夕少外記中原康純、少內記、上洛、史役參陣事、雖望申、以前既以賢親爲代、
可參陣之由、被仰定之上者、康純參陣事、不可叶分被仰畢、其上康顯、康純兄
弟之間、一人在構中、可致奉公之處、無左右在國之條、不得其意、不進怠狀者、
隼人司領等、可被仰付他人之由、以勅定堅可申付之由、被仰出傳奏、廣橋畢、
凡權大外記康顯家者、曩祖康綱以來、代々爲當家門下、外記官位等、自當家
相計來之處、今度康顯日向守兼任事、不經案內、付源中納言雅行、卿直出所
望、勅許以後、粗令相語之間、始存知者也、背自他之約諾、破累祖之意趣之條、

文明四年八月十七日

六七三

文明四年八月十八日 二十二日

六七四

可謂奇恠者歟、此事存出之間、以次注付之、爲子孫存知也、先年康顯權大外
記轉任事、予出吹舉於左大辨相公廣光卿職事、申入畢

〔華頂要略〕

百四十五上 諸門蹟傳

東大寺上乘院

入道無印道永親王、伏見殿貞常親王男、母從二位盈子重有、後土御門院御猶子、
親長記云仁和寺宮云々

文明四年八月十七日親王宣下、俗諱高平、上卿中院大納言、奉行左少辨元長、

〔華頂要略〕

百四十一 諸門蹟傳一

仁和寺

道永一本云法親王、俗諱高平、後花園院御猶子、貞常親王息、

文安二年生、文明二年正月十九日薨、廿六歲、○コノ

〔本朝皇胤紹運錄〕

飛鳥

貞常親王

道永法親王 俗名高平

十八日、壬午御靈祭ヲ停ム、

〔宗賢卿記〕

乙 七月十八日、御靈祭不及沙汰者也、

〔續史愚抄〕

卅九 後土御門院上

八月十八日、壬午、無御靈祭、親長卿記

二十二日、丙戌越前平定セルニヨリ、幕府ニ命シ、仁和寺、安禪寺、及ビ廷臣

采地ノ同國ニ在ルモノヲ還付セシム、

〔親長卿記〕

三

八月廿二日、雨下、一昨日越前知行分奉書到來、今度就國一

義政新造
御所遷

統各可半濟之由申請了、然今度自禁裏御室、安禪寺殿、予、中御門中納言、正親
町西禰々丸、小川坊城阿古丸等事、被申武家、仍一圓可渡付之由被仰付、仍可
申御禮云々、今日依雨不參、

廿四日、晴、入晚陰、參室町殿新造御所、自去十六日御座此御所、時々越前小所
於此所有御遊山、近日事也、越前小所
事、被下一圓、今度自禁裏不被申、御奉書之故也、四辻同道、中御門中納言、正親
町西禰々丸、小川坊城阿古丸等、御太刀事付予同進上了、申次畠山宮内少輔
也、

二十三日、丁亥甘露寺親長ヲシテ、御製ノ和歌ヲ編纂セシム、

〔親長卿記〕

三

八月廿三日、雨下、及晚晴、未刻許參内、昨日依召也、仰云、數年

御詠草、分四季戀雜可書集、有被遊合事之故也、其時爲可被引御覽也云々、即
於御前書之、

廿六日、晴、參内同前、書御詠草等、

九月二日、晴、自今日又如已前、御詠草等令部類也、日々事也、

廿四日、晴、自去月廿三日、御製寄書、今日大略書了、

二十四日、戊子小槻長興、同族雅久ト官務職ヲ爭フ、日野勝光、義政ニ頼リテ

文明四年八月二十三日 二十四日

六七五

小槻長興ノ申狀

雅久ヲ推薦ス、是日、雅久ヲ之ニ補ス、

〔親長卿記〕

三

七月廿一日、晴、長興宿禰來、官務職事、可被還補之由、可奏聞云々、有申狀、

云々、有申狀、

廿三日、晴、參內、長興宿禰申狀奏聞、申狀於御前讀、何様被廻御思案、重可被仰下云々、

廿六日、晴、自鞍馬寺歸畢、有召參內、長興宿禰申狀被下之、可尋雅久云々、退出之時、召寄雅久仰了、

八月一日、晴、長興宿禰飯尾加賀守爲信等來閑談、陳狀早々可進之由、仰雅久了、

三日、晴、○中次雅久陳狀今朝到來、奏聞、申狀讀進、仰云、先可被尋仰前內府歟、予申云、此申狀等分更以無一決之儀、一向被盡申狀、可被仰歟、然者此申狀、可

談合兩傳奏之由有仰、仍令見了、各談合、兩方之申狀、被召二三問迄、可有御沙汰歟之由申之、即奏聞、然者重可尋長興之由有仰、取兩方申狀、一度可奏聞之

由申之、二問之時無不審者可奏聞、若有不審可尋三問、一度可奏聞之由有仰、

四日、晴、長興宿禰二問狀、遣雅久了、他行之由命也、

五日、晴、早且雅久來、昨日他行、入夜歸宅云々、引見記六可進第二陳答之由申

之、

十四日、晴、二問狀到來、

十五日、晴、依召參內、○中略、和歌御題ヲ近臣ニ賜フコトニ又仰云、官務事、可

被補雅久之由、自武家被執申、此間被經御沙汰之處、如此執奏如何、明日可持

參二問、可被仰談云々、今日禁裏御衰日長戌、仍明日

十六日、晴、參內、直衣、參御前、長興宿禰二問、雅久陳答、於御前予讀申、仰云、今度

申狀各條目繁多也、雖然有無詮用事等、肝要閣上首、二代相續事有例、長興宿禰於二

代相續者、有子、三代相續之由、雅久申之、閣上首三代相續事無今度晴、宿禰

依晨照宿禰讓補、長興宿禰雖爲上首、晴、宿禰被補了、前內大臣勝光、執申了、

理不盡之儀等有之云々、今度又雅久可相續之條雖無例、又御執奏、例私談之

傳領有子細云々、於申狀者、就無其理、以內奏申入、武家歟、勅答云、無三代相續

之例、閣上首可拜任之條如何、殊明年武家若公、就御元服佳例、可被仰付之由、

被申之上者、先被還補長興、來年可被補雅久、不背道理歟之由被思食也、但新

大納言、廣橋大納言等召之、令見申狀、有被御覽誤事者、可申時宜之趣、又無子

細者、可被申武家、御文案可書進云々、兩卿參入於臺盤所前、令見兩方之文書、

之、

十四日、晴、二問狀到來、

十五日、晴、依召參內、○中略、和歌御題ヲ近臣ニ賜フコトニ又仰云、官務事、可

被補雅久之由、自武家被執申、此間被經御沙汰之處、如此執奏如何、明日可持

參二問、可被仰談云々、今日禁裏御衰日長戌、仍明日

十六日、晴、參內、直衣、參御前、長興宿禰二問、雅久陳答、於御前予讀申、仰云、今度

申狀各條目繁多也、雖然有無詮用事等、肝要閣上首、二代相續事有例、長興宿禰於二

代相續者、有子、三代相續之由、雅久申之、閣上首三代相續事無今度晴、宿禰

依晨照宿禰讓補、長興宿禰雖爲上首、晴、宿禰被補了、前內大臣勝光、執申了、

理不盡之儀等有之云々、今度又雅久可相續之條雖無例、又御執奏、例私談之

傳領有子細云々、於申狀者、就無其理、以內奏申入、武家歟、勅答云、無三代相續

之例、閣上首可拜任之條如何、殊明年武家若公、就御元服佳例、可被仰付之由、

被申之上者、先被還補長興、來年可被補雅久、不背道理歟之由被思食也、但新

大納言、廣橋大納言等召之、令見申狀、有被御覽誤事者、可申時宜之趣、又無子

細者、可被申武家、御文案可書進云々、兩卿參入於臺盤所前、令見兩方之文書、

雅久二陳狀

義政雅久ヲ推擧ス

上首ヲ閣下ノ例ニ相續キテ以テ雅久ヲ斥ク

雅久申狀ニ依リテ野勝光ノ理ヲ申ス

長興二問狀

小槻雅久ノ陳狀

各讀之、雖枝葉繁多、仰之趣尤也、子細見、彼申狀、可被申勅定云々、御文案書進之、猶被加御筆有被直下之事、

十八日、陰、略、○中、午刻許右衛門督、中黃、長興宿禰等來、有將基、

十九日、甚雨下、長興事、一昨日被申武家、伺申可申勅答之由、前內府申云々、彼公雅久引級之間、(組カ)正路之御返事如何、

廿四日、晴、參內如昨日、日野前內府參內、官務事、猶可爲雅久之由被申云々、被違背勅定、可被補雅久之由、重武命事、人々有不審、有莫言事、

廿五日、晴、略、○中、長興宿禰申、今度之子細、已任道理、雖可有勅許、雅久橫入事、武家御執奏之上者無力、所詮御沙汰之次第、可被下勅裁云々、何様近可被仰云々、

九月十一日、雨下、長興宿禰申、官務職事、今度雅久與被經御沙汰、問、二之處、以室町殿御執奏、理不盡、可有雅久御沙汰之由、被申之間、閣上首三代相續事、無例之間、雖可被還補長興、御執奏之間、雅久被補官務、令堪忍、可奉公之由、可仰長興之由、被下女房奉書了、
十二日、晴、長興宿禰來、遣女房奉書了、

勝光雅久
任命ヲ強
請ス

長興勅裁
ヲ請フ

雅久官務
ニ補セラ
ル

晴富ノ讓
補ニ依ル

長興利運

長興ヲ一
旦任命シ
義尚元服

〔宗賢卿記〕

乙 八月四日、就官務職、長興宿禰去月比出申狀、主殿頭雅久支

狀今日進之云々、

廿四日、今日主殿頭小槻雅久任左大史、正五位上、廿五才云々、補氏長者、父晴富宿禰讓

補之由也、晴富宿禰、是事先日種々被經御沙汰、於、前官務長興宿禰出申狀、

閣上首無故三代、長照宿禰、晴富宿禰、雅久、相續并父雖居敵陣、其子在御方、數年爲代例、兩

方及二問二答、按、前中納言、爲傳奏被尋之、訴陳之處、長興宿禰大略有其理之由有沙汰、仍

於殿上兩傳奏、勸修寺、亞相、并按察卿等被尋意見、如此之中央、日野前內府爲

申次、以雅久可被補官務職之由、室町殿御執奏之由被申入之、前內府、然間去

十六日、以勅筆、長興宿禰理運之間、可被補之由、雖被申武家、猶可被補雅久之

由、昨日、廿三、重被申請之分、前內府、勝光、參內申入、直有御問答云々、雖然御執

奏之由、頻被申入之上者無力、被補任雅久畢、初御執奏之趣、前內府、雖被申入之、辨

官務職事、以前有三代相續例之上、雖爲私儀、明年四月室町殿若公可有御元

服、義持、被用勝定院例之間、件度征夷大將軍宣旨、故周枝宿禰、晴富宿禰、成進之、今

度被摸彼例之間、如此被申入之云々、勅答分、以勅書被、此事近日兩方御糺明

之處、長興宿禰大略理運也、雖然就御例御執奏之上者、來御元服臨期必可被

文明四年八月二十四日

六八〇

ニ雅久ニ
代ヘント
スレズ
ハハ
ハハ
ハハ

女房奉書
ヲ下シテ
長興ヲ慰
撫セラル

仰付雅久、其間先以長興可被補之由雖有勅答、重猶雅久事被申入之間、今日宣下也云々、逆鱗以外之由有沙汰者也、長興者自晨照下鵠、自晴富上首也、九月十一日、被下女房奉書於前官務、

久日ん望志よく此事、御ささ成るられ候つるよ、上し由をさしをきて、三代さうそくの事ハ、ま井も候ハぬ程よ、なりおきのしゆく絲をけんぬさせられ候へきと、むろまちとのへ申あはせられ候つるに、うさ守てちやうく日んのき成申され候つまとも、その、ちあまゝこまゝにもち候うへハ、さやうよ御はさめありうさく候、なにも入候ハず、うさ守て御志つそりの事よて候程よ、まさひさをなされ候よ、前内ふして御返事申され候つる、いりやうにもまつうんにんし候へと、なりおきよおほせられ候へと申とて候、うしえ、

表書
あせちとのへ

就官務職事、女房奉書如此、可被存知之狀如件、

文明四
九月十一日

按察親長卿
判

四位史殿
長興

長興窮困
ヲ訴フ

法名

房平疾ム

〔地下家傳〕

五

小槻宿禰、以小槻改阿保、又歸本姓、稱號壬生、

雅久晴富男

同四年八月

廿八日任左大史、同日奉官務、并氏長者事、

○コノ後、長興ノ甘露寺親長ヲ訪ウテ、困窮ヲ訴フルコト、左ニ附收ス、

〔親長卿記〕

三

十一月十五日、晴、長興宿禰、貞綱、俊通等來、元長一盞張行、頭

役、

十八日、晴、入夜貞綱、長興、俊通來、一盞張行、俊通頭役、

廿五日、晴、長興宿禰申、窮困事被申武家、可被助一流之由申之、有申狀、去年も

御訪事被申訖、連々之儀御難治云々、公家之輩事者雖爲何个度、以叡慮不被

達武家之侍、不可有正躰歎、如此之仰不便之事也、

廿六日、晴、長興宿禰來、仰勅答之旨、無興之躰也、

二十五日、丑、巳、前左大臣鷹司房平出家ス、

〔大乘院日記目錄〕

三

八月廿五日、鷹司前殿御出家、法名眞性、六十

〔大乘院寺社雜事記〕

一五

八月十二日

一、鷹司前殿御不例以外云々、爲御訪參申、御對面了、(教玄)一乘院參會了、

十三日

文明四年八月二十五日

六八一

文明四年八月二十六日 二十八日

六八二

一、昨日御禮榼代百疋、鷹司殿ニ進上之、

〔經覺私要鈔〕八十 八月十三日

鷹司前殿房平 御違亂以外之間、禪定院僧正被參訪申云々、
十四日、齋

一、明心來間對面了、鷹司殿所勞事相尋之處、水腫長滿也、不可叶之由醫師共
申云々、驚入者也、

○房平薨去ノコト、十一月十六日ノ條ニ見ユ、

二十六日、寅、蹴鞠アリ、

〔重胤記〕〇歷代殘闕日 記七十八所收 八月廿六日、晴、

一、殿上前御懸ニテ有鞠、(親長) (高倉永繼) (雅康) (政顯)
御方、各葛袴、武家□□□
甘露寺殿、藤宰相殿、飛鳥井兵衛督、勸修寺

二十八日、壬、大和宇陀郡ノ澤某、旁野某ト戰フ、

〔大乘院寺社雜事記〕一五十 八月廿八日

一、當國宇多郡澤與旁野合戰出來、衆徒國民等爲合力出陣畢、日々矢軍云々、
今日則大合戰、旁野方打負歟云々、

水腫脹滿

八田遠勝
旁野ヲ助

九月二日、雨下

一、宇多合戰事、無心元之間、尋遣長谷寺、無殊儀云々、珍重者也、寄手旁野自燒
不知行方云々、

三日

一、八田彈正忠遠勝、當年願主人也、爲旁野合力、今度出陣、依爲神事、不著腹卷
而爲大將、打負沒落、不切手之間、神慮至也、一昨日朔日社參申云々、

二十九日、癸、後崇光院十七年忌辰、甘露寺親長等ニ命ジテ釋教歌ヲ詠進
セシム、

〔親長卿記〕三

八月廿九日、晴、依召參内、依後崇光院御十七回、爲御精進、予
(烏丸益光) (庭田雅行) (西坊城顯長) (白川忠宣)
右衛門督、源中納言、菅宰相、民部卿、橘通任等、於御前可食御時云々、御時了有
御受戒、次尺教歌各一首詠進、

三十日、甲、流星アリ、伊勢大神宮及ビ大和興福寺ニ命ジ、變異ヲ祈攘セシ
ム、幕府モ亦之ヲ命ズ、

〔宗賢卿記〕乙

八月卅日、流星在坤方、長丈計也、日入時分也

〔大乘院日記目錄〕三

八月卅日、酉刻光物飛南方、

文明四年八月二十九日 三十日

六八三

〔大乘院寺社雜事記〕

一五十一 八月卅日

一、酉刻流星、且其跡如白雲、南方ニ流了、

九月廿日

一、昨日京都御奉書到來、去月晦日流星御祈事云々、

〔內宮引付〕

御教書

一、依去月卅日流星變異事、爲公武御祈、早撰吉日、一七個日間、可抽懇篤之由、可令下知内外宮禰宜等給之旨、被仰下候也、謹言、

九月六日

判

祭主三位殿

御教書如此、早可被下知兩宮之狀如件、

九月六日

神祇大副判

大司宿館

御教書并祭主下知如此、仍獻覽之、早可令存知給候、恐々謹言、

九月十四日

大宮司判

謹上 內官長殿

氏長

一、皇太神宮神主

依御教書注進、依去月卅日流星變異、爲公武御祈禱、一七個日抽懇篤間事、

右今月六日御教書傳、同日祭主下知傳、十四日宮司告狀傳、依去月卅日流星變異事、爲公武御祈、早撰吉日、一七個日間、可抽懇篤之由事、謹所請如件、者任被仰下之旨、禰宜等不去神籬下、致御祈禱之丹誠者也、仍注進如件、以解、

文明二年九月日

禰宜

十八同前

是月、義政ノ使朝鮮ヨリ還ル、

〔善隣國寶記〕

中 文明四年壬辰、遣朝鮮國書、橫川製之、

日本國義政奉書朝鮮國王殿下(李葵)、(文明二年)庚寅歲弊邑特遣專使、蓋賀新祚也、今年八月使還報書慰勸嘉貺多之、○下略、全文八十條、幕府

〔續本朝通鑑〕後七十一、天皇三八月乙丑朔、○中使僧光以還自朝鮮、以光

以テ使トスルコト、二年八月二十八日ノ條ニ收ムル善隣國寶記、文明二年遣朝鮮書ニ見エタリ、

○義政使ヲ朝鮮ニ遣シ、李葵ノ嗣立ヲ賀スルコト、文明二年八月二十
八日ニ見エタリ、

山名持豐家ヲ其子政豐ニ讓ル、

〔大乘院寺社雜事記〕一五十 九月廿日

一、山名入道宗全、去月隱居、子息小弼家德云々、今出河殿御禮申入畢、今日竹
内使者相語云々、

○コノ條、ソノ日ヲ詳ニセザルモ、雜事記ニ因リ、姑ク此ニ掲グ、又持豐
ノ子教豐卒シ、弟政豐ノ嗣ギシコト、應仁元年九月九日ニ本條アリ、

九月乙未朔

一日、乙未二番衆、松崎ノ民ト爭鬪シ、死傷アリ、

〔親長卿記〕三 九月一日、晴、自早旦參内番也、今日二番衆早於松崎有喧嘩

事、奉公之人々少々打死云々、

屋内放火

六日、晴、今日重奉公之輩押寄松崎、地下人等已落失、屋内放火畢、

〔宗賢卿記〕乙 九月小一日、松崎發向事、左脇、澤木衆也、番所爲也、

〔重胤記〕○歷代殘闕日、九月一日

一、相木松崎へ二番衆催シ、九過ニ發向候、

二日、丙申正四位下持明院基保ヲ從三位ニ敘ス、

〔公卿補任〕二十四 非參議從三位藤基保(持明院) 九月二日敘、元右中將、父母、

〔親長卿記〕三 九月二日、晴、德大寺大納言實淳申、基保朝臣上階事奏聞、仰

云、父祖被聽上階者、不可有相違云々、勿論之由予申之、勅許、

三日、丁酉近江坂本馬借蜂起シ、是日、日吉十禪師下殿ヲ火ク、尋デ、天台座
主尊應ニ勅シテ、舊殿ニ奉遷セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕一五十 九月九日

一、坂本馬借蜂起、十禪師御殿悉以燒失畢、隨而濱悉以燒拂之、清水以下張本之間如此、京衆迷惑中々無是非云々、

〔華頂要略〕

門十一 傳二十二 青蓮院尊應

去月三日、十禪師下殿火災事、所驚思食也、早令遂造替之營功、雖可有飯座之儀式、今度巫女忽傳託宣云々、奇語明神更示和光之嚴旨、此上者如元可奉遷舊殿之由、可令下知山門給、者天氣如此、以此旨可令申入座主准后給、仍執達如件、

十月四日

左少辨政顯 奉

謹上 大納言僧都御房

十禪師宮就御遷宮事給旨如此、可被存知之由、座主准后御氣色所候也、

十一月三日

法眼判

本院執行法印御房

就二宮御遷座事給旨如此、被達一院愁訴之條、尤以珍重候、依社家申、遲引了、

其以後可被申請宣下之旨衆議候間、他院前後之不同沙汰、可被得此意由御沙汰候也、恐々謹言、

十月十二日

法眼判 奉

西塔院執行法印御房

五日、記禁裏御所藏ノ經卷ヲ鞍馬寺ニ寄託セシメ給フ、

〔親長卿記〕

三 九月五日、晴、禁裏御經廿四合歟遣鞍馬寺、予書目錄、仰寺家了、

七日、晴、被預鞍馬寺御經、預狀遣民部卿許、

八日、壬寅義政參内、

〔親長卿記〕

三 九月八日、晴、室町殿有御參内、

九日、癸卯三首和歌ヲ詠シ給ヒ、番衆近臣ヲシテ之ヲ詠進セシム、又是日ヨリ百首着到ノ和歌アリ、義政之ヲ詠進ス、

〔親長卿記〕

三 九月九日、晴、今日可被遊三首和歌、各可相觸云々、仍仰人々

了、(勸修寺)新大納言 教秀、廣橋大納言 綱光、(庭田)源中納言 雅行、勘解由小路前中納言 高清、中御門中納言 宣胤、(飛鳥井)右兵衛督 雅康、民部卿 忠富等也、番衆并近臣等也、懷紙

立春

文明四年九月九日

六九〇

取集持參御前、閑重進上之、自今日百日御歌、番中先可詠進之由有仰、今日立

御着到

十月一日、晴、入夜參内、御祝之儀如常、百日着到御歌、雖非御番可詠進之由有

仰、申領狀了、仍每日令詠進、令持參、書御短尺、

十一月九日、雪下、略○中次予日歌兩三日懈怠、三首入見參、於御前書短尺了、

十二月一日、雪下、入夜參内、略○中次御日歌五箇日分、於御前書御短尺了、次退

出、

御製百首
清書

〔親長卿記〕四 文明五年正月二日、陰雪時々散亂、申刻參内、略○中次抄之次

義政飛鳥
井雅康ト
之ヲ點ス

仰云、舊冬御百首、近頃早々清書神妙思食云々、暫令祇候、可拜見被點云々、中

略

天抄終之後、更被召御前、被見御百首、自九月九日御製也、御點(義政)衛督雅康、兩人也、令

拜見退出、

二月二日、晴、參御前、書去年着到御製了、

御製百首

〔紅塵灰集〕

立春文明四年九月九日、自九月九日御製也、御點(義政)衛督雅康、兩人也、令

春二十首

風の聲人此こゝろをふより登のとけゆるへは春をきにふる十九以前下

略

夏十五首

更衣

堂地うへをうき衣は夏比く涼今朝の中々風う身よしむ十四以前下

略

早秋

以は此まに秋とふくらん昨日までさしまされし風の音つを十九以前下

略

時雨過

老くをばる雲此うへしの夕うをにのこるとみるまむま日のうけ十四以前下

略

初戀

思入登此日よ星ハやあふ坂み心わうよふ戀路な星は星十九以前下

略

寢覺雞

みえ鳥乃おとろうす音は寐さめ老の心をうねて老る哉

古寺鐘

むししをまとはこゝへよ今を名にと地花寺此入あひのうま

名所松

文明四年九月九日

六九一

雜十首

戀三十首

冬十五首

秋二十首

文明四年九月九日

六九二

いみしへもきく私をあらしおろなる方此を山乃松のよのえ

山家

いはよ里うとえ岩路の私を山とけり心をもまを庵むまへん

田家

冬を猶あせの不行道行つよ私門田乃面う人死かれせぬ

羈中衣

と私衣と地うさねても秋風此吹と希此穿る暮そ身よしむ

旅泊夢

音とうき浦半乃浪のうきねよも身をならばしう夢むまふ也

思往事

夢うほとをよとへまし過ぎつる身此いよしへのさうならぬを

述懐

神ならくおさめん事やうと岡の杜此嵐をさへうしき世を

祝言

鶴うめ就日う代の程乃友としてあまへん敷をちきりをく哉

〔源義政公集〕

詠百首和歌、文明四年九月九日始之。

義政百首
春二十首

春二十首

夏十五首

夏十五首

曉立春

あそといふ年はいけくふ分るらん春にあけとつ横雲終雲十首下

ス略

遅櫻

吹分る青葉の陰の遅櫻いとひし風そ花ふまるとる、十首下

ス略

秋二十首

早秋

秋といへんをうてさひしき夕哉昨日ふ替る色へみえまると十首下

ス略

冬十五首

初冬

志とひこし昨日の秋や冬あらん春法名ふとつ神無月哉十首下

ス略

戀二十首

戀二十首

不逢戀

文明四年九月九日

六九三

文明四年九月九日

六九四

ほきあさのむくひを志らてかこつこそ戀れうき世の迷成なり十〇九以下

雑十首

寄衣雑

かきりなく昔忍ふのきり衣あみとみとれ（てら）袖あなせつ、

寄枕雑

かりそめふひちを枕ようよ、移も其たのよとハ有とこそきけ

寄花雑

咲やこの花乃都ふうつりきて難波此こともふりやあぬらん

寄舟雑

をろっふる身を捨舟此日れのこも思くとけて朽や果まし

寄市雑

のこるへま名ふのこもへて物誌次誌すつる命やかる誌市人

寄橋雑

朽そつる眞木誌坂田誌橋柱拵さへいまはのこるとも（ま）し

寄鐘雑

いく里の人誌移ふりくさめぬらんこもとらあさ誌鐘のひさふ

寄木雑

陰くさくさうふる楓の木末哉弓にきるてふこともあき世ハ

寄苔雑

柴人もあハしやあをむ苔蒔こましく山誌岩誌うけちハ

寄水雑

更に猶ぬくくそとのむいそし水流ての世もたえぬめくもを

〔續本朝通鑑〕

百七十一 九月乙未朔癸卯義政詠百首倭歌自今月始每

二月成中

○百首御續歌ノコト便宜左ニ附收ス、

〔親長卿記〕

三 十月十二日晴入夜參内御亥子也如例御祝之後可參御前

之由有仰一昨日有百首御續歌可拜見云々、

東將多賀高忠、近江ヲ略定ス、尋テ、齋藤妙椿、美濃ノ兵ヲ率井、西將六角

高頼ヲ援ケテ高忠ヲ撃ツ、高忠越前ニ走ル、

〔大乘院寺社雜事記〕

一五十一 九月九日

一、江州ハ多賀豐後守打勝了、

文明四年九月九日

六九五

孝
百首續歌

高忠越前
ニ走ル

〔大乘院寺社雜事記〕

五十一 十月十三日

一、江州多賀豐後守、自去夏比打取一國之處、去月持誓院法印權大僧都妙椿（齋藤）令發向江州之間、豐後守沒落于越前國畢、西方之六角爲合力妙椿出陣、三乃十八郡悉以出陣之間、大勢中々不及是非云々、東方御勢江州ニ出陣云々、仍自西方畠山義就手日々兩御陣矢軍在之、於于今者江州御勢可歸參歟、

〔經覺私要鈔〕

二十八 八月十四日霽

一、江州事多賀豐後罷出云々、旁以西方一大事歟、

○妙椿高忠等ヲ山城如意嶽ニ攻メテ之ヲ破リシコト、三年三月二十一日ノ條ニ、義政朽木貞綱ニ命ジ、六角政堯ト共ニ高賴等ヲ討タシメシコト、同閏八月二十七日ノ條ニ、政堯近江清水城ニ戰死スルコト、同十一月十二日ノ條ニ、高忠近江入國ノコト、本年七月二十五日條所收ノ華頂要略八月一日ノ文書ニ見エタリ、并ニ參看スベシ、

十日、丙辰義政、興福寺領攝津福原莊地頭職ヲ收メントス、山名是豐ノ代官怒リテ退去ス、

福原莊

〔大乘院寺社雜事記〕

五十一 九月十日

一、成就院ニ參申、兵庫福原庄事、巨細蒙仰問、仰遣供目代方了、供目方申分、當莊地頭職事、爲公方被召上之間、山名彈正代官令腹立、今日兵庫於引退云々、

十三日、丁未庭田雅行ノ勸進ニヨリテ、和歌三首ヲ詠シ給フ、

〔紅塵灰集〕

岡上月（庭田） 文雅行 四年九月十三日 夜續歌

故郷の名のこのまてこる人ささうか々岡乃秋の夜の月

雲間月

山のそ我をみの不まてまうき雲にえみみえまき月ういさよふ

寄月忍戀

なまこ河をききふは身比くるしさ我袖とふ月よ空よこと日々

十九日、癸丑幕府、大山崎神人ニ命ジ、徳政一揆ノ巨魁ヲ逮捕セシム、

〔離宮八幡宮文書〕

〇二 山城

今度徳政事禁制處、可蜂起風聞在之云々、爲事實者太不可然、早尋搜張本人、可擲進之、至與力之輩者、可被處同罪之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四年九月二十五日

文明四

九月十九日

(清) 貞秀(花押)
(治部) 國通(花押)

六九八

大山崎神人中

二十五日^{己未}土寇アリ、奈良ニ侵入ス、筒井順永之ヲ鎮定ス、

〔大乘院寺社雜事記〕^{一五十一} 九月廿五日

一、夜前土民蜂起之間、寺住輩口々馳向、用併沙汰之云々、今日又土民寄來善勝寺口手云々、六方若物少々馳向云々、

廿六日

東大寺坊
舎火ク

一、夜前東大寺衆徒中院坊悉以燒失云々、公事故歟云々、

晦日

一、土民蜂起、奈良南口止之云々、前夜於龍花院之東邊、一人打止之、常光院同宿組止之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕^{一五十二} 十月一日

一、就土民蜂起、口々用併致其沙汰、鄉民等召出之、於力者御童子者、朝夕門跡

筒井順永
奈良ニ來ル

召仕候物之間、不可混郷民之由、如前々奉書遣龍花院方等了、

二日

一、筒井昨日より罷上、土民蜂起事、下藹分神人事、大西間事等、大綱事在之、種々及計略者也、

三日

一、衆中集會、色々題目在之、土民蜂起事、是非不一決云々、木津者共資物計可許可歟云々、此條猶以不可然云々、

八日

一、土民蜂起、寄來般若寺邊云々、筒井種々致計略、不叶歟如何、

十四日

一、土民蜂起、事ニ六方衆、大安寺可發向之由云々、於大安寺行德政故云々、藥師寺并芝屋等可發向之由云々、

十七日

一、昨日爲土民沙汰、藥師寺之勅使坊燒之云々、

十八日

藥師寺勅
使坊ヲ火ク

大安寺德
政ヲ行フ

文明四年九月二十五日

六九九

寶壽院檣
原氏ノ兵
ヲ率井土
寇ヲ撃ツ

一、此一兩日奈良中軍勢、以外物怠、無殊儀引退了、珍重々々、上下安堵者也、
廿六日、自夜前
風雨

一、檣原代官進之、安位寺之寶壽院歸寺事無爲畏入云々、彼寶壽院爲惣山致
罪科之處、今度土民等蜂起、彼寺責之可滅亡之處、彼寶壽院引率檣原勢等
致寺合力了、(依脱カ)其忠節加免除云々、別段儀也、不可混自余云々、

廿七日

一、六方藥師寺之教所發向、去十六日馬借勅使放火等故也、并大安寺長本少
々進發、自餘及過錢了、

十一月朔日

一、昨日筒井方遣檣三荷兩種了、畏入之由云々、世上物怠以外子細、迷惑事等
在之云々、

〔大乘院日記目錄〕

三 十月十六日、土民藥師寺之勅使坊放火了、近所地下

人沙汰、

廿七日、六方藥師寺之教所發向了、放火等儀故也、并大安寺之教所長本發向、
自餘及過錢畢、

〔東院年中行事記〕

五 九月二十五日、晴己未、土一揆蜂起、於般若寺邊合戰在

之云々、

十月十八日、晴辛巳、筒井以下于今在奈良、種々物怠之子細在之間、軍勢數多馳

報云々、筒井へ卷敷遣了、

終日雨下

廿日癸未、物怠大都靜謐歟、軍勢少々引退云々、

二十六日、庚申一夜百首ノ和歌ヲ詠シ給フ、甘露寺親長、飛鳥井雅康等ヲシ
テ、亦之ヲ詠ゼシム、

〔親長卿記〕

三 九月廿五日、晴五十首和歌題、依仰予寄書之、

廿六日、晴依庚申有一夜百首御製予、(飛鳥井雅康)右衛門督等百首詠之、(西坊城顯長)勾當内侍、(白川忠富)菅宰相、
民部卿等五十首也、橘通任十九首詠之、

庚申ノ夜

是月、祇園社執行顯重、顯永、顯純ノ執行職ヲ横奪セントスルヲ訴フ、

〔建内文書〕

第二十號

〔安文〕

祇園執行顯重謹重言上初訴ノ年月
ヲ詳ニセズ

右當社執行識者、開闢以來不渡余流、于今無相違處、親類中相續彼識之由、(職)掠

文明四年九月二十六日是月

顯永ハ相傳ノ證文ヲ有セズ

文明四年九月是月

七〇二

申條言語道斷虛言也、又顯永神秘以下相傳之由申、無跡形濫吹也、其謂者一紙之證文等不可有之、次內陣故實不存、知之由申之、某爲唯受一人手繼分明之上者、還無故實申事也、

一、顯、宥歡樂之事被披聞食、忝被成下案堵之御成敗之條、頗施面目處、菟角重而訴申、去六月申請繪旨御判之段、一向輕上意、且者背御法者歟、

一、帶代々繪旨院宣御判、任理運申上子細處、不可唯御成敗之申狀何躰事哉、於顯純者不帶代々之證文、去應仁年中、初而掠給御判條、前代未聞所行、太難通其科者哉、所詮云理運云證文、如元被成下御成敗、彌天下太平之爲、致御祈禱、粗言上如件、

文明四年九月日

顯純ハ代々ノ證文ヲ帶ビズ

十月大甲子朔盡

三日、丙寅義政、使ヲ朝鮮ニ遣ス、

〔善隣國寶記〕

中 文明四年壬辰遣朝鮮國書 橫川製之

日本國義政、○京華集、コノ下ニ奉書朝鮮國王殿下、庚寅歲、弊邑特遣專使、蓋印也、ノ二字アリ、

賀新祚也、今年八月使還、○八月是月、報書慇懃、嘉貺多之、○京華集、無任感荷、

之至、茲承前年屬弊邑艱虞、號細川伊勢兩氏之使者、發書請救、然而弊邑實不知之、是奸賊矯令所爲也、必加囚禁、以謝其罪、今後通信幸有新印、以此爲驗、可也、又承物色所求珍禽、上國無之、更煩搜索、何賜過焉、抑弊邑有山、曰高野、高野

有院、曰西光、安無量壽佛像、相傳毘首羯磨所造也、主院、亥者告曰、比年堂宇欹傾、上漏下濕、未奈之何、苟無上國之助、安得復舊貫哉、故今差釋氏正球首座、選

諭情實、其使百廢之地、變成十萬億樂土、在斯一舉、豈非殿下化及遐陬也耶、不腆土宜、具于別幅、切希采納、不宣、

龍集壬辰冬十月三日

日本國源 義政印也

文明四年十月三日

七〇三

新印ヲ以テ通信ノ高野山西ノ光院ヲ修理シテ望ム

使者正球

文明四年十月三日

奉書

日本國源義政

印也 謹封

朝鮮國王殿下

高麗書無可漏子直封其書耳此書一十六行、別幅

裝金屏風貳張

綵畫扇貳伯把

長刀壹拾把○京花集把柄ニ作ル、コノ次ニ大刀壹拾把ノ五字アリ、

大紅漆木車椀大小計七十隻

大紅漆淺方盆大小計貳拾隻

蒔繪硯匣壹箇

鏡臺 壹箇○京花集附鏡ニ字アリ、

酒壺 壹隻

銚子提子壹具

敕正印也

七〇四

○義政書ヲ朝鮮王李婁ニ贈リテ其嗣立ヲ賀セシコト、二年八月二十八日ノ條ニ見エタリ、

十四日、丁丑美濃善惠寺ヲ勅願寺ト爲ス、

〔善惠寺文書〕

濃○美

濃州善惠寺可爲勅願寺自今以後住持代々着香衣可令專御祈禱之由天氣所候也仍執達如件、

文明四年十月十四日

(勸修寺政願) 左少辨(花押)

圓海上人御房

十六日、己卯筒井順永大内氏ノ將杉十郎ヲ山城大北城ニ攻メテ之ヲ陷ル、杉右京御厨子城ヨリ來リ救ヒ順永ノ兵ヲ破ル、

〔大乘院寺社雜事記〕

二五 十月十六日

杉十郎自
殺ス
御厨子城
相互ノ死
傷

一、今曉筒井律師率大勢寄事於德政發向水津進發之由相觸之不遷時刻、打寄下狛之大北之城而大内代官杉十郎責落之十郎則自害了然而自御厨子城杉右京爲合力打出及合戰之間寄衆蓬來手不及一合戰被追散畢然間筒井手者城中亂入衆不殘一人被打斃了城衆ハ杉十郎以下三十餘被

文明四年十月十四日 十六日

七〇五

文明四年十月十六日

七〇六

打、筒井方ハ數十人云々、手負不知其數云々、

松林院侍藤若丸、大安寺向兄弟、辰市堀父子、成身院之彌六兄弟、小南院之
甲岡十九歳云々、松木、六林院、白土中、窪田南父子等、一族若黨以下大略生涯了、

〔大乘院日記目錄〕三 十月十六日、下狛合戰、杉十郎自害、

〔東院年中行事記〕五 十月晴十六日、己卯、今曉山城國下狛大内之城墾へ、筒

井勢夜打沙汰之、則城三ヶ所之勢悉以打死、大將杉十郎腹切云々、城墾燒祓
引退刻、御厨子之大將杉右京以下之勢逐懸及合戰之間、筒井之内衆一族若
黨十四人被打了、其外合力之勢多以生涯了云々、及晚筒井、同息、舜、覺福住以

下奈良へ引退了、

〔京花集〕七 書金剛經代不白

(文明四年)

藤氏南嶺居士與余善、曾赴壬辰之役、死於敵矣、可惜、平日書問往來、其遺墨尙
在篋笥、就中和歌數篇、辭清意切、是可忍乎、今茲小春十六日、乃三周忌日也、命
工印其紙背以金剛般若、其意在朝口此經、以薦冥福、暮手此書、以慰戀慕而已
矣、感喟不勝、自寫早德係各篇之后、蓋示不忘也、于時菊后梅前寒雨未止、呀、不
白齋親元書、○南嶺居士、下狛戰爭ノ日ニ
戰シタレハ、姑ク此ニ收ム、

藤氏南嶺
居士戰死

親元金剛
經ヲ書シ
テ之ヲ弔
ス

順永兵ヲ
奈良ニ返
ス

大北城ヲ
火ク

陶弘護、再ビ誓書ヲ石見ノ益田貞兼ニ送りテ、前約ヲ申ネ、成頼ノ東軍ニ
降ルヲ告ゲ、之ヲ警ム、

〔益田家什書〕八五

敬白

再拜々々起請文事

- 一、對申貞兼、已前申承之筋目、於已後毛不可有相違事、
- 一、成頼(吉見カ)既對政弘現不儀上者、於已後雖有懇望之子細、不可致許容、縱政弘被
思直候とも、弘護申沙汰仕之、不可閣申事、但有一段之儀者、
貞兼可申合之、
- 一、如此申合上者、以城内上意國衆有一味同心之、對貞兼被致不儀之時者、不
可捨申事、

右條々若偽申候者、日本國諸神、殊氷上妙見大菩薩可蒙御罰候、仍起請文如
件

文明四年十月十六日

弘護判

益田治部少輔殿

(宗世) 文明四年十月十八日、到來、使僧泉福庵、神名之狀

文明四年十月十六日

七〇七

誓書

文明四年十月十六日

七〇八

敬白

再拜々々起請文事

一、奉對貞兼、已前被申承之筋目、於已後毛不可有相違事、
 一、成頼既對當方被現不（義カ）上者、已後雖有懇望之子細、弘護不可致許容之旨、
 各申談事、但有一段之儀者、貞兼可被申合之、
 一、如此申合上者、以城內上意國衆有一味同心之、被對申貞兼、御弓箭出來候時者、弘護不可捨申事、
 右條々若偽申候者、日本國諸神、殊氷上妙見大菩薩可罷蒙御罰、於各身候、仍起請文如件、

野上備前守

景郷判

文明四年十月十六日

直村藤右衛門尉

房家判

直村因幡守

重家判

江良丹後守

重信判

山崎伊豆守

秀泰判

下 民部丞殿

寺戶備後守殿

岩本筑後守殿

吉田修理進殿

○弘護ノ誓書ヲ貞兼ニ送リテ前約ヲ申ネシコト、去年十一月二日ノ條ニ見エタリ、參看スベシ、

十八日、辛巳幕府、長野政高二命シ、若王子領伊勢窪田莊ニ不法懈怠ノ事ナカラシム、

〔若王子神社文書〕

○山城

（表書）

長野彌次郎殿

御住所

伊勢守

貞宗

文明四年十月十八日

七〇九

文明四年十月二十一日

七一〇

若王子御坊領伊勢國窪田庄事、如此間、無不法懈怠儀、可被致執沙汰候、被預申御旗御本尊、被致御祈禱條、別而被成御奉書候、次昌禪寺事、兎角被申候哉、不可然候、早々被任被仰出之旨、可被止其綺候、恐々謹言、

文明二年

十月十八日

貞宗判

長野彌次郎殿

御住所

伊勢貞宗

二十一日、甲申菊池重朝、阿蘇社修造ニ依リ、棟別錢ヲ肥後國中ニ徵ス、

〔阿蘇文書〕

六菊池氏書翰

爲阿蘇十二之御社、并本堂修造、任舊例、當國棟別事相催候、御奔走可目出候、委細自大宮司方可被申候、恐々謹言、

文明二年

十月廿一日

重朝

相良殿

相良爲續

舊例ニ任
ジ棟別錢
ヲ徵ス

爲阿蘇十二之御社、并本堂修造、任舊例、當國棟別事相催候、御奔走可目出候、委細自大宮司方可被申候、恐々謹言、

文明二年

十月廿一日

重朝

伯耆殿

名和顯忠

御嶽本堂之上葺、并下宮可有御修造之由承候、誠目出候、天下之御祈禱不可過之候哉、仍以御兩使示預候之趣、老者共以談合自是可申候、不可有疎略之儀候、恐々敬白、

文明二年

八月十九日

重朝花押

阿蘇殿

阿蘇惟忠

貴札令拜見致披露候、抑就御嶽本堂同下宮御造營、御使悦喜被申候於私も、目出肝要存候、委細直被申候之間、省略仕候、恐々謹言、

文明四年十月二十一日

七一一

文明四年十月二十一日

文明二年 辰壬

八月十九日

光永山城守殿

爲冬花押

七二二

城爲冬

御書令拜見候了、仍阿蘇十二之御社、同御本堂就修造、棟別之子細蒙仰候、則致催促、可進上仕候、委曲久木原孫三郎方令申候、此等之通可得御意候、恐惶謹言、

文明二年 辰壬

十月十九日

隈部上總介殿

上包同、

爲武明花押

方保田武明

隈部忠直

御書趣拜見仕候了、抑就阿蘇御宮御造營、棟別事被仰出候、目出候、則申付可致結構候、委細旨隈部次郎右衛門方令申候、定可有言上候、恐惶謹言、

文明二年 辰壬

十月十九日

爲德鶴丸

隈部殿

上包隅部殿

裏ニ肥前德鶴丸

爲阿蘇御社、并本堂御修造、棟別事蒙仰候、目出候、則申付可致奔走候、不可有無沙汰候、委細御使申入候、定可有御披露候哉、万吉恐惶謹言、

文明二年

十月十九日

隈部次郎右衛門殿

上包同、但裏ニ高瀬との、

爲泰朝花押

高瀬泰朝

隈部武治

尙々此旨阿蘇殿へも御申達頼入候、就阿蘇十二之社、并本堂御造營、委細蒙仰候、目出存候、則可申付候、此旨方保田方へ令申候、可得御意候、恐惶謹言、

文明二年 辰壬

十月十九日

隈部上總介殿

上包同、但下ノ文字殿、裏ニ字土殿、

爲字土花押

字土爲光

文明四年十月二十一日

七二三

文明四年十月二十一日

七一四

爲阿蘇十二宮之社、并本堂修造棟別事蒙仰候、奔走可申候、委細之趣御使者
ニ令申候、可得御意候、恐々謹言、

文明二年 辰壬

(託摩) 重房花押

十月廿日

隈部上總殿 上包同、裏ニ託广との、

託摩重房

重朝ノ盡力

就阿蘇十二之御社、并本堂修造事、棟別事先度承候、先例之様無存知之由、古
老者申候、雖然我等別而爲奔走、方々致催促候、返事同壁書案爲御披見進之
候、求麻八代天草以下返事到來候者、重可進之候、若無沙汰之方候ハ、自貴
様御催促可目出候、諸事期後信候、恐々謹言、

文明二年 辰壬

重朝花押

十月廿三日

阿蘇殿 上包同、

〔阿蘇文書〕

先祖讓狀

當國棟別之事、可有御奔走之由、菊池より以使者仰候之通承候、殊書狀共數

通致披見、千万々々目出存候、一向神之御爲、守護當家之爲、肝要題目候、彼狀
披見候て進上候、如仰爲以後候、能々被召置肝要候、如何様懸御目、御悅可申
上候、委曲猶高良尾張守、鳥子若狹守、可被申候、可得御意候、恐惶謹言、

文明二年 辰壬

惟忠 花押

十月廿五日

進上人々御中

〔阿蘇文書〕

○十七 肥後

棟別碎書案

定 三文充棟別事

右爲阿蘇十二之社、并本堂修造、任舊例所促之也、各領内不殘一字相調、十一
月中可令拜進、萬一至無沙汰輩者、忽招神罰於其身歟、抽信心而宜馳走者也、

文明壬辰冬十月 日

〔阿蘇文書〕

○二十二 肥後

別之御料足亥、

阿蘇之棟別之御使新樂坊下田之山城守、小陣玄番尉、彼三人より請取申候

文明四年十月二十一日

七一五

棟別壁書案 三文充

棟別料足

棟別使

文明四年十月二十一日

料足、三十貫三百五十文、

七一六

健軍分使

健軍分御使極樂坊、田上甲斐守、彼兩人より請取申候料足、八貫七百廿文、

長善坊契秀 花押
伍樂、幸懷 同
那羅延、契久 同

豐田堅田ノ使

豐田堅田之御使成滿院、澁河備前守、彼兩人より請取申候料足、八貫百三十文、

長善、契秀 花押
伍樂、幸懷 同
那羅延、契久 同

上野田代ノ使

上野田代之御使大德坊、長野出雲守、彼兩人より請取申候料足、五貫百三十文、

早奈良柏ノ使

早奈良柏之御使圓鏡坊、目丸近江守、彼兩人より請取申候料足、十一貫五文、

長善、契秀 花押
伍樂、幸懷 同
那羅延、契久 同

野尻草壁ノ使

野尻草壁之御使慈眼坊、高柳又八殿、彼兩人より請取申候料足、十一貫文、

長善、契秀 花押
伍樂、幸懷 同
那羅延、契久 同

津守ノ使

津守之御使陽泉、光永三郎左衛門尉、彼兩人より請取申候料足、十四貫八百十文、

長善、契秀 花押
伍樂、幸懷 同

文明四年十月二十一日

七一七

文明四年十月二十一日

七一八

甲佐ノ使

甲佐之御使禮德坊、荒木殿彼兩人より請取申候料足、二十二貫六百六十二文、

那羅延、契久 同

長善、契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

大野倉岡ノ使

大野倉岡之御使妙圓坊、菅彈正殿彼兩人より請取申候料足、八貫二百文、

長善、契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

野部之内中島之使

野部之内中嶋之御使鏡觀、蘇生原二郎五郎殿、彼兩人より請取申候料足、五貫五百七十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

碓用ノ分ノ使

碓用之分之御使長善坊、大山田源左衛門尉、向山三郎左衛門殿、彼三人より請取申候料足、十七貫八百十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

勾野兩小河ノ使

勾野兩小河之御使福性、瀨田周防守、彼兩人より請取申候料足、八貫百八十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

豊後内家中ノ使

豊後内家中之御(使脱カ)了忍坊、矢村祝、井手掃部介、彼兩三人より請取申候料足之、
夏、四貫三百二十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

文明四年十月二十一日

七一九

栗野山田ノ使

文明四年十月二十一日

七二〇

栗野山田之御使幸寶坊、三宮遠江守、今村左馬介、彼之兩三人より請取申候料足、九貫九百六十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

阿蘇横波野ノ使
阿蘇横波野之御使道場房、三宮掃部介、彼兩人より請取申候料足、五貫五百七十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

南郷ノ使

南郷之御使實門房、原常陸守、彼兩人より請取申候料足、四十四貫五十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

野部ノ使

野部之御使萬福院、彼方より請取申候料足、五十四貫九百文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

中山海東ノ使

中山海東之御使大寶院、田上新左衛門尉、大山田新左衛門尉、彼三人より請取申候料足、十九貫三百文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

南郷山西ノ使

南郷山西之御使了實坊荒木二郎衛門尉、彼兩人より請取申候料足、九貫九百十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

正法新開分年行事

正法新開分年行事福滿坊より請取申候料足、二貫七十文、

長善坊契秀 花押

文明四年十月二十一日

七二一

文明四年十月二十一日

七二二

小國ノ使

小國之御使鏡一坊久木野殿、彼兩人より請取申候料足、三十三貫八百六十文、

伍樂坊幸懷 同
那羅延坊契久 同

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延坊契久 同

郡浦分使

郡浦分御使得善坊下田殿、彼兩人より請取申候料足、十七貫二百二十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延坊契久 同

近見分

近見分、極樂房より請取申候料足、一貫百九十文、

長善坊契秀 花押

伍樂、幸懷 同

那羅延、契久 同

起工

以上三百五十三貫九百十七文、

此内百十八貫文那羅延坊契久花押

同 百十八貫文伍樂、幸懷同

同 百十七貫九百十七文長善坊契秀同

文明四年_{辰壬}十一月廿六日

〔阿蘇文書〕

先祖讓狀

阿蘇山本堂就御造營、去年進使者候之處、御懇承候、祝着候、仍今月十二日より結講_(構)申候、棟別之事御催促可目出候、恐々敬白、

文明五年

六月吉日

菊池殿

進之候

(阿蘇) 惟歲

阿蘇惟歲

〔阿蘇文書〕

○十肥後

其以後雖可申入候、依無指題目候、乍存候、聊非緩怠之儀候、就其阿蘇御造營、勸進之御事、去年蒙仰候、此方時宜共依取亂候、其後遅々仕候、非無沙汰候歟、

文明四年十月二十一日

七二三

文明四年十月二十一日

七二四

仍棟別相調之間進上仕候、其間之事委曲城方、隈部方ニ申候、定而可有御披露候哉、恐惶謹言、

文明五年 巳癸

九月廿七日

爲續〔花押〕

菊池殿

御宿所

〔包紙〕

菊池殿 御宿所

〔同裏〕

爲續
〔相頁〕

爲續棟別
錢ヲ進ム

〔阿蘇文書〕

菊池氏書翰

其以後者依無指事、不申承候、當時諸方無相替義候哉、不審之時者可申談候、抑自相頁爲續棟別錢到來候、可然候仍彼書狀等相添進之候、他事期後信候、恐々謹言、

文明五年 巳癸

十月七日

重朝花押

阿蘇殿

上包同、但トノ文字殿、

健軍宮造
營棟別日
記

神馬奉納

求麻ヨリ
棟別

御宿所

〔阿蘇文書〕

先祖讓狀

尙々御造營物之事、可然様ニ御談合候て、御結構可目出候、健軍就御造營、所々爲勸進、前々棟別日記之事承候間、是ニ書付置候分進候、此外ニ隈部より當國之棟別被遣候、注文者光永信濃方へあるべく候、此後御尋可然候、此棟別之分をりみて、健軍之御造營不可事足候哉、兼又此間御神馬まいらずよし承候、是ハ直ニ神被召候御馬ふて候、如今候てハ不可然候歟と存候、前々拙者代ふハ、多分馬共まいり候間、書付候て置候、以次爲御披見進候、万吉恐々謹言、

七月廿日

惟歲花押

阿蘇殿

本堂就御造營、當國棟別之事相定候、日記事一日承候間、少々進て候、重々見分候て、證狀十九通只今進候、此内求麻より之棟別、隈部より被遣候、其外ハ高森駿州、光永信濃方うけとられ候哉、御尋可然候、何も爲後證候、多しか□

文明四年十月二十一日

七二五

文明四年十月二十一日

御文書ニ被相添可爲肝要候、万吉恐々謹言、

八月三日

阿蘇殿

惟歳花押

七二六

〔阿蘇文書〕

○二十
肥後

棟別料足
日記

棟別料足日記

- 一家數九百七十五 代九貫七百五十文
- 一所、四面之内
- 一所、坂梨 家數三百五十 代三貫五百
- 一所、北坂梨 家數三百 野中 まめうゝ 代三貫
- 一所、阿蘇品 家數二百 古家 牛峰 荻迫 隈崎 代二貫
- 一所、手野 屋敷二百 代二貫
- 一所、山田 あい野 小藏 家數二百 代二貫
- 一所、湯浦 家數二百五十 代二貫五百
- 一所、かゞ尾 的石 家數百 代一貫
- 一所、竹原 黒河 家數四百五十 代四貫五百

已上三十貫二百五十文

文明四年八月廿五日

新樂坊 契 弁花押

下田山城守能政同

小陣玄蕃尉惟典同

中司

家幸同

家弘同

能安同

南郷大野
分棟別

□(文)明四年(壬辰)のむ手へ□□□

阿蘇山本たうのむ手へ□□□

一、おうの、かうふるいち此どころ いる五

一、いる十八 ミやうくその 一、いる十二 さいちやう寺

一、いる廿三 ぬまる殿 一、いる十八 にあの□いりをやし殿

文明四年十月二十一日

七二七

一、いゑ十四	い□□□	一、いゑ廿	とちわう殿
一、いゑ廿五	おうまね	一、いゑ十二	ぬくえる
一、いゑ十一	こなかたけ	一、いゑ十一	へらき
一、いゑ十七	きわうたに <small>(ちカ)</small>	一、いゑ八	ならへら
一、いゑ十二	めい□□	一、いゑ廿	□□□□
一、いゑ八	□□□□	一、いゑ四	□□□□
一、いゑ十二	□□□□	一、いゑ五	おか□□
一、いゑ四	すのこ	一、いゑ十	さうつひら殿
一、いゑ十	けすのき	一、いゑ卅	おの四り
一、いゑ九	□□の	一、いゑ廿九	一のかけより
一、いゑ七	ひんかし	一、いゑ三	さいふく寺
一、いゑ二	うぬぬきはる	一、いゑ八	あゑさその
一、いゑ十六	一、のえる	一、いゑ十五	たましい
一、いゑ九	せんまやう	一、いゑ四	にし
一、いゑ三	いりつる	一、いゑ卅一	かまのまゑ□

一、いゑ九	あ□つゑ□	一、いゑ十六	□□□□
一、いゑ卅	□□□□	一、いゑ六	□□□□
一、いゑ十二	□□□□	一、いゑ十五	□□ちと□
一、いゑ十	□□けの□	一、いゑ卅	くろえる
一、いゑ十	やなひえる	一、いゑ五	あもつる
一、いゑ三	ふるその	一、いゑ廿	えうかのし分
一、いゑ四	どゝろ		
一、いゑ九	くらうかの分ゑもえるおのたんゑやう殿		
一、いゑ八	上をるおの	一、いゑ卅	おきわら <small>(うカ)</small>
一、いゑ四	すくなえる	一、いゑ八	なかま手
一、いゑ七	まんどころ殿	一、いゑ八	たうちん
一、いゑ五	ゑん三郎殿	一、いゑ七	やきしその
一、いゑ七	□□□□	一、いゑ一	□□□□
一、いゑ一	□□□□	一、いゑ五	□□□□
一、いゑ八	□□□□	一、いゑ四	さこ

文明四年十月二十一日

七三〇

- 一、いゑ四 まめわう殿 一、いゑ八 (文獻)
- 一、いゑ五 なかさい 一、いゑ五 いらもと
- 一、いゑ二 さへあんたう 一、いゑ三 えさけなか

八月廿八日

右ノ書外題云
南郷内

大野分 むねるののにんき

〔阿蘇學頭坊文書〕

○三 肥後

材木目錄

まゆ木

きあいの木

かやい

- 一、まゆ木、あつさ九すん、ひろさ一尺四すん、えあより八しやくおひて、一尺
- 二すんのそり、あつさ五いろ三しやく、數四枚、
- 一、きあいの木、あつさ六すん、ひろさ八すん、あつさ五いろ、えあより一丈二
- しやくおいて、一尺一すんのそり、うす八しゆ、おぬしくせいハおぬし、長
- さ五いろ、數九不ん、
- 一、かやい、あつさ六すん、高さ七すん五分、えあより一丈二尺おいて、一尺二
- すんのそり、あつさ五いろ三尺、數八しゆ、すくふ九しゆ、せひハおぬし、

とる木

うらいた

うらかま

おいき

うらつせ

ぬき

ひゑんの

うらいた

とるきの

こしのく

木はけの

くき

- 一、とるき、あつさ四すん、ひろさ六すん、えあより五しやくおいて、一すん二
- 分のそり、あつさ三いろ三しやく、かす五百二十不ん、
- 一、うらいた、あつさ一すん、ひろさ一尺、あつさ一ちやう、數四百五十まい、
- 一、うらかま、あつさ四すん、ひろさ一しやく、長さ四いろ二しやく、うす二十
- 不ん、
- 一、おいき、くち六すん不う、あつさ四いろ二しやく、うす百しゆ、
- 一、うらつせしら、くち七すん不う、長さ一ちやう三しやく、數十不ん、おぬし
- くせしらあつさ八尺、數二十二不ん、
- 一、ぬき、あつさ二すん、ひろさ六すん、あつさ四いろ二尺、うす七十不ん、
- 一、ひゑんのとるき、あつさ四すん、ひろさ五すん五分、あつさ一丈、數五百し
- ゆ、
- 一、うらいと、あつさ一すん、ひろさ一尺、あつさ七しやく、うす四百五十まい、
- 一、とるきのこしのくき、あつさ七すん、七百五十、おの釘、長六すん、七百五十、
- 一、木はけのくき、長さ五寸五分、七百五十、ひゑんとるきこしのくき、長さ六
- すん、八百、おあし□き、はちの釘、長さ五すん五分、八百、

文明四年十月二十一日

七三一

- 一、うらいとの釘、うす二万、
- 一、うらかうのくき、ありさ五すん五分、百五十、

〔阿蘇文書〕

○肥後

阿蘇山本堂上葺切符之事、

小國分

- 小國分
- かうら
- のち木
- のあるき
- のきいん
- さくけ
- のいん

- 一、かうら長さ三尋一尺、口一尺二寸方、敷一不ん、
- 一、のち木、あつさ五寸、ひろさ八寸、長さ三尋一尺、敷一不ん、
- 一、のあるき、あつさ四寸、ひろさ五寸、長さ三いろ三尺、敷十不ん、
- 一、のきいん、あつさ四寸、ひろさ一尺二寸、ありさ三しやく五寸、敷六十まい、
- 一、さくけのいん、ひろさ一尺二寸、あつさ一寸五分、ありさ一丈、敷六十まい、

5、

栗野山田分

- 栗野山田分
- あいど
- まきと
- 軒板

- 一、あいと、あつさ一尺、廣さ一尺四寸、長さ一丈、うす一不ん、
- 一、まきと、あつさ八寸、ひろさ一しやく、長さ一丈一尺、敷一不ん、
- 一、軒板、あつさ四寸、ひろさ一尺二寸、ありさ三尺五寸、うす二十まい、
- 一、さくけの板、廣さ一尺二寸、あつさ一寸五分、長さ一丈、うす二十まい、

家中分

あよいん

家中分

- 一、あよいん、ひろさ一尺四寸、あつさ六寸、長さ三尺、敷一まい、
- 一、まきと、あつさ八寸、ひろさ一尺、なりさ一丈一尺、うす一不ん、
- 一、のきいん、あつさ四寸、ひろさ一尺二寸、なりさ三尺五寸、うす十まい、
- 一、さくけのいん、廣さ一尺二寸、あつさ一寸五分、ありさ一丈、うす一枚、

豊田分

- 一、あふいと、廣さ一尺四寸、あつさ六寸、長さ三尺、うす一まい、
- 一、のちる木、あつさ四寸、ひろさ五寸、長さ三いろ三尺、うす五不ん、
- 一、のきいん、あつさ四寸、廣さ一尺二寸、長さ三尺五寸、うす十五まい、
- 一、さくけの板、廣さ一尺二寸、あつさ一寸五分、ありさ一丈、うす十五まい、

勾野分

- 一、あよいん、ひろさ一尺四寸、あつさ六寸、長さ三尺、うす一まい、
- 一、のちる木、あつさ四寸、ひろさ五寸、ありさ三いろ三尺、うす五不ん、
- 一、軒いん、あつさ四寸、ひろさ一尺二寸、ありさ三尺五寸、かす十五まい、
- 一、さくけのいん、ひろさ一尺二寸、あつさ一寸五分、ありさ一丈、うす十五

文明四年十月二十一日

七三四

早河分

早河分 糸手村よりこゝるへし、

- 一、のゝる木、あつさ四寸、ひろさ五寸、長さ三尋三尺、くす十不ん、
- 一、のきいと、あつさ四寸、ひろさ一尺二寸、なりさ三しやく五寸、かす六まい、
- 一、さゝりけのいと、ひろさ一尺二寸、あつさ一寸五分、ありさ一ちやう、くす六枚、

日置分

日置分

- 一、のゝる木、あつさ四寸、ひろさ五寸、長さ三尋三尺、かす二不ん、
- 一、のきいと、あつさ四寸、ひろさ一尺二寸、長さ三尺五寸、くす四まい、
- 一、さゝりけのいと、ひろさ一尺二寸、あつさ一寸五分、なりさ一丈、くす四まい、

近見分

近見分

- 一、のきいと、あつさ四寸、ひろさ一尺二寸、長さ三しやく五寸、かす六まい、
- 一、のゝる木、あつさ四寸、ひろさ五寸、ありさ三尋三しやく、くす五不ん、
- 一、さゝりけのいと、ひろさ一尺二寸、あつさ一寸五分、ありさ一丈、くす六

本堂葺板

本堂葺板

千五百枚	阿蘇	七百五十三枚	下野部
千五百枚	南郷	六百枚	小國
七百枚	津守健軍	七百枚	郡浦
四百枚	甲佐	七百五十枚	碓用
三百七十枚	中山	三百枚	堅志田
百五十枚	豊田	百五十枚	勾野

此書付コ、ヨリ下脱ス、

〔阿蘇文書〕

○十四肥後

依仰申候、抑光照寺之御坊主様大病よて御座候間、爲御祈禱、御祕藏御鎧同御馬御拜進候、彼御鎧御馬事、適七堂社再興時分ニ候之間、其寺御造營之御心あて、御まいらせ候、此之由□□□□田上三郎左衛門尉有御披露之由仰候、其間之事、御使者可被申候、恐惶謹言、

大山寺へ
鎧及ビ馬
ヲ納ル

文明四年十月二十一日

七三五

文明四年十月二十一日

文明四年辰壬

七月廿日

阿蘇大山寺

惟藤判

七三六

〔阿蘇學頭坊文書〕

○三 肥後

就光照寺住持違例、爲祈禱、馬鎧拜進仕候處、被致精誠、御卷數光照寺へ被遣候之由、依貴書承候、誠ニ目出大慶候、如仰定當、病可有平、(癒)候、尙々御懇之至畏入候、万吉々々恐惶謹言、

七月廿四日

惟忠(花押)

進上阿蘇山衆徒

御中

奉納ノ
額ニ
文ニ
請五

如此被仰候、千万可有御斟酌候へ共、爲御祈禱、御拜進候事候間、如何ニも彼代御造營ニ入候する事、今生後生之御爲候間、不願斟酌被仰候由ニ候、依仰申候、抑就御祈禱、御鎧爲本堂御造營物、御拜進候處、高知尾馬原方廿五貫ニ請被申候、彼代事、南郷小牟田ニおゐて、御内者以兩人御請取候て、南郷光照寺ニ先御置候、御造營物事候間、即山上ニ可有御登き之處、今程當國雜

〇一三

公方

世上無爲
トナラバ
料足ラ山
上ニ送ラ
シム

說時分候間、御神物事、南郷公方様よりすけ方へ御あつけあるへき由、一日被仰候、此御料足之事も、定而可爲同前候間、如何ニも御造營物ニあり候する事、今生後生之御爲候間、適御城共候間、佐渡方へ御あつけ候て、世上無爲ニも候者、定御造營あるへく候、其時者早々山上ニ上被申候へと、可被仰付候、可爲如何様候哉、大儀之御料足事候間、如此被仰候、巨細示給可得其心候、但山上ニ御請取候て可然候ハ、依此御返事、南郷より其方へ登を申候へと可被仰付候、恐惶謹言、

(文明六年)

壬五月廿一日

惟長(阿蘇花押)

阿蘇山

年行事御坊へ

ら

小陣勘解由左衛門

寄進狀返進候、

依仰昨日進狀候處、御懇御返事御悦喜之由仰候、仍彼刀事、被聞食及候間、仰

文明四年十月二十一日

七三七

福満坊へ
刀ヲ進ズ

文明四年十月二十一日

七三八

之處御進上候御祝着候、仍寄進候由狀共候間、雖無是非候、今程御造營時分候、代るとニおされ候て、御造營候者可然候哉、只いゝつらニ刀を被置候てハ、無所用候歟、雖然學頭坊へも被仰候、鬮を被召候て、御鬮あり候ハ、代御斷せ候て、刀之事被召度候由仰候、但御造營候砌ニ候間、鬮まてもあく候ハ、秀此御返事ニ可有御申候、能々學頭様へ御談合あるへく候、又御造營物と候て進上候刀ハ御返候、返々能々御談合可然候、恐惶謹言、

九月十五日

惟久(花押)

福滿坊御同宿御中

本堂造營物ヲ衆中ニ預ク

春年行事秋年行事

本堂御造營物衆中預申へく候分

文明六年分年行事

一、春年行夏陽泉坊、秋年行事善性坊兩人ニ預申候分、豊後より雜説候時、下田山城殿、田嶋左衛門殿兩人御使とゑて被召候、善性坊より三十四貫、陽泉坊より廿四貫、慥ニ渡申候、其後衆中へハ不給候、
一、成道坊ニ八貫五百文預申候、

料足ラ營ニ預ク

一、衆徒行者あつかり申候料、足州八貫八百文、此内四貫八百うせ候、是ハ懷順大寶院澄祐淨光院、長懷善性坊離山時うせ候、雖然重而當坊主弁可申由候間、進上被申候了、

一、公方様より御借用分野部、公方様より五貫文、未御返弁あく候、御借狀ハ見え候、

一、南郷より御借用分十貫文、又九日の市ニ五貫文、都合十五貫文、

一、古上様豊後へ御越候時、千貫文御借用候、御借狀有之、

一、延命寺御祈禱御鑑分廿貫、本當御内陣のため、學頭坊へ文明五年正月十日渡申て候、

一、又野部より御拜進御鑑、馬原十郎被給候、料足廿五貫まで候、其料足ハ依雜説、南郷より管へ御置可有由承候間、任上意候、其後此方へハ不給候、

文明七年七月廿二日

成道坊長契

万福院俊能

已上五百五十五貫三百

文明四年十月二十一日

七三九

文明四年十月二十一日

七四〇

依仰申候、抑去夏御用段候間、南郷ニ御申候て、料足^{御神}二十貫文御借用候、適玳珠より毎年二千匹此方へまいり候間、其を御返あるへき由、北里方へ被仰定候、適年行事御事よて御座候間、其まて進上候へと、北里方へ被仰候、御請取肝要候、昨日南郷ニ上様御出候間、御伺候程ニ、其まて御上を可然之由、被仰候間申候、御料足まいり候する時、請取事北里方へも、又此方へも可給候、爲後日候間申候へき由、被仰候、恐惶謹言、

文明七年乙未

十月十日

惟長(花押)

阿蘇山年行事

万福院

小陣勘解由左衛門

野部之上
意

野部之依上意申候、抑市ニ御用段候間、被仰候、御神物御座候者、十貫文借御申候者、御悦候へく候、臈而御返候へく候、物召うけ候間、被仰候、尙々同者能候する御料、足十御借用候へく候、恐惶謹言、

文明八年

九月十六日

忠利(花押)

阿蘇山年行事

十貫文借上申候、

年行事大寶院

度々如申候^(坊)防々より多分御造營物御借用由承候、堅固ニ五貫宛御預候者、簡要候、野部よりも兩度其段被仰候、自然過分ニ御用段共候する時者、不渡候由被申候而者、無勿躰候、爲後日申候、老若中よりも同前ニ被申由被申候、可有御心得候、年内防々ニさしうよ御預候する分、又者無沙汰の方、以注文承候ハ、老若達へ見せ可申候、御油斷あるへうらす候、委細田上彦左衛門可申候、恐々敬白、

文明八年

十二月三日

惟歲(花押)

年行事

大寶院
進候

(包紙)
年行事

淨光院
御同宿

高森駿河守

惟在

文明四年十月二十一日

七四一

文明四年十月二十一日

七四二

權現御社頭上葺事可有御奔走之由承候可然候更不可成御本役候葺事
て候間今年計可被仰付候追而板葺時者自是可有御催促候委細申御使候
恐惶謹言

文明十二
子庚

九月十八日

惟在(花押)

年行事

淨光院 御同宿

衆徒へ百
貫文ヲ進
ズ

公方様御氣分未甲斐敷無御座候間重而爲御祈禱鳥目百貫爲本堂御造營
物御拜進候當病忽御平癒(癒)息災延命之御祈念千秋万歳可目出候彼鳥目之
事者衆徒行者方一味ニ被仰合理錢之御沙汰簡要候巨細者能仙坊ニ申候
定可有御物語候万吉恐惶謹言

文明十七年 巳乙

惟貞(花押)

五月八日

惟明(花押)

阿蘇山

衆徒御中
らる

十二年間
料足寄進

就御立願阿蘇山本堂爲御造營貴殿様より十二年之間鳥目十二貫御拜進
候去年之分料足十二貫被遣候彼御使則御嶽へ被罷通可然之由雖申候是
まてゝるへき由被仰付候趣被申候間先請取申候即御嶽へ年行事被進御
返事取可進候少も不可有無沙汰候御神物御拜進目出之由惟忠被申候万
吉恐々謹言

甲上周防守

惟光

十月三日

則元新衛門尉殿

岩田越後守殿 御報

(裏書)
八代へ返事案

返々十五貫此方へ可給候

就本堂御造營坊中間別被貫候鳥目前ニ爲御用廿五貫借錢候相殘事ハ預

文明四年十月二十一日

七四三

文明四年十月二十一日

七四四

申候、重而御用候十五貫御下可給候、來春御造營之時、可致其沙汰候、相殘事ハ能々可被召置候、尙々於已前預置申候、此前二年行事ハ御書可給候恐々謹言、

十二月廿日

惟貞(花押)

惟滿(花押)

阿蘇山

年行事

(端書) 村山美濃守

竹崎筑前守

就御千句長々御辛勞奉察候、抑古上様去御世上之時分、爲本堂御造營物、鳥目百貫文御寄進候、各大綱存候間、本堂御内陣納可申由、頻雖申上候、如何候之由蒙仰候間、坊別預申候、先日爲御使、惠良殿桑内殿御登山候、利分之通蒙仰候、驚存候、御世上無事罷成候ハ共、上様屋形様依無御對面、國中參詣者無如存候、諸坊不弁御察之前候、然者如本錢被召置候者、衆徒行者畏奉存候、

○以下
缺ク、

右裏書云

此之由御役人御老宿中江御心得、可然様御披露奉憑候、定委細成道坊可被申候間、不能巨細候、万吉恐惶謹言、

尙々山上之躰、每々不限之、聊爾之様候、内々不可然存候、連々堅可被仰候、自然不應御下知方候者、承候て直一廉可申候、

中宮造營

中宮造營之事、泉藏坊結搆候、誠肝要候、彼方之事ハ徘徊之方よて候さへ、依志如此之大儀成就候處、作事中、山上之衆徒行者、一向無奔走之由承候、無是非次第候、殊ニ今度御遷宮時分、不弁之躰承及候、曲事ニ存候、就中彼中宮之事ハ、行者之役候間、惟家御代あとも、悉皆雜用祝儀等、山伏方より弁候ある、縱非本役候共、衆徒行者之事ハ、觀音、大明神、權現之御影よて被罷居、結句神奉公之儀、無沙汰之至、不及覺悟候、既從先代行者之役候處、於當代至如在候事、如何様之當概候哉、堅固衆徒行者ハ被仰斷、巨細承可得其心候、若又其様より兼日不被仰候歟、旁以無勿躰存計候、如今候者、果而ハ宮司分之事可召

文明四年十月二十一日

七四五

文明四年十月二十一日

放候、爲御存知令申候、恐々謹言、

十月六日

小陣殿

惟長(花押)

七四六

湯屋ノ材
木數

湯屋之材木之木かず

- 一、としら、せい六寸不_レう、ありさ九しやく、かず十二不_レん、
- 一、ぬき、ひろさ五寸、あつさ二寸五ふん、ありさ三間ぬき、ありさ四ひろ、かず八不_レん、おあしく二けんぬき、十二不_レん、
- 一、けさ、あつさ三寸五ふん、ひろさ四寸五ふん、ありさ四ひろ二しやく、かず四不_レん、
- 一、大とこ、あつさ三寸五ふん、とけ五寸、かず二不_レん、
- 一、とけさ、ひろさ四寸、あつさ三寸、かず十不_レん、ありさ三けん木、
- 一、板、ありさ六しやく五寸、あつさ一寸、ひろさ一しやく二寸、かず六十まい、
- 一、いとしきの板、三十六まい、ひろさ一しやく二寸、あつさ一寸五ふん、
- 一、とりとせと六寸、とけ七すん、ありさ一ちやう三しやく、かず四不_レん、

- 一、さす、ありさ一ちやう、かず十二不_レん、
- 一、あゆう木、かず四不_レん、ありさ一ちやう六しやく、
- 一、むすの木、ひろさ四寸不_レう、ありさ一ちやう三しやく、
- 一、二郎足やう、ありさ三けん木、

文明十五年五月六日

大工藏人丞

- 一、あまし、廣さ不_レう四寸、ありさ四い_(ひ)ろ一しやく、數四、同あけし、一ちやう四尺、數四、

- 一、あきい、ひろさ四寸、あつさ三寸、長さ六しやく五寸、數二十、
 - 一、杉、あつさ七ふん、かず三十まい、ありさ七しやく、ふれ、二とけさう、さうことの御いとし候、
 - 一、戸の板、ひろさ一しやく八寸、あつさ一寸二ふん、ありさ七しやく、かず二まい、せんしやうをう御出也、
 - 一、ふき板、ひろさ一しやく一寸、あつさ二寸五ふん、ありさ六しやく、かず四、
- 以上木數六十四
- 一、く、後、戸をきくき、ありさ、_(ま)

文明四年十月二十一日

七四七